志木市の文化財　第63集

埼玉県志木市

埋蔵文化財調査報告書 6

城山遺跡第27地点

城山遺跡第28地点

中道遺跡第56地点

2015

埼玉県志木市教育委員会

志木市の文化財　第63集　埋蔵文化財調査報告書 6　埼玉県志木市教育委員会

志木市の文化財　第63集

埼玉県志木市

埋蔵文化財調査報告書 6

城山遺跡第27地点

城山遺跡第28地点

中道遺跡第56地点

2015

埼玉県志木市教育委員会

は じ め に

志木市教育委員会
教育長　尾崎　健市

ここに刊行する『埋蔵文化財調査報告書６』は、志木市遺跡調査会が実施した発掘調査事業の調査成果をまとめたものです。

志木市は埼玉県の南東部に位置し、都心から 20㎞圏内という距離にあるため、住宅建設を始めとする各種開発行為が非常に多い地になっています。

当市を地理的に見てみると、市域には、荒川・新河岸川・柳瀬川といった大きな３つの河川が流れていることから、古より自然豊かな環境に恵まれていたものと想像できます。このことから、柳瀬川・新河岸川に面した台地縁辺や荒川低地の自然堤防上には 14 カ所の埋蔵文化財包蔵地が確認されています。

今回報告する城山遺跡と中道遺跡ですが、市内でも古くから各種開発が盛んに実施されてきた地域であり、個人住宅・共同住宅・分譲住宅建設などの建設工事に伴い、発掘調査が実施されてきました。

こうした調査により、城山遺跡内には、平成２年度に市指定文化財に登録された「城山貝塚」、大石信濃守の居城跡と考えられる「柏の城」をはじめ、日本最古の土器群に位置付けられる「爪形文系土器」が発見されるなど、貴重な文化財が数多く発見されています。

また、中道遺跡内からも多くの貴重な資料が発見されており、今までの調査成果から、旧石器時代から縄文時代、弥生時代、古墳時代、奈良・平安時代、中・近世までの幅広い時代にわたる複合遺跡であることが判明しています。

発掘調査・整理作業及び調査報告書刊行につきましては、関係各位の皆様からは多くのご協力をいただきました。ここに、心から感謝申し上げる次第です。

最後に、本書が埋蔵文化財の理解と認識を深めるとともに、志木市の歴史を学ぶための一助になれば幸いに存じます。

例　言

1．本書は、埼玉県志木市に所在する城山遺跡（県№09－003）の第27・28地点、中道遺跡（県№09－005）第56地点の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は、志木市教育委員会の斡旋により、各開発主体者の事業者から志木市遺跡調査会が委託を受け実施した。整理作業及び報告書刊行は、志木市教育委員会が実施した。なお、志木市における志木市遺跡調査会は、平成22年12月28日付けで解散している。

3．本書の作成において、編集は尾形則敏が行い、執筆は下記以外を尾形が行った。なお、近世以降の遺物については、朝霞市教育委員会の野澤　均氏にご教示を頂いた。

深井恵子　　第２～４章の遺構

青木　修　　第２・３章の縄文時代の遺構・遺物

4．遺物の実測は、星野恵美子・鈴木浩子・松浦恵子・増田千春が行った。遺構・遺物のデジタルトレースは深井恵子・青木　修が行った。写真撮影は青木　修が行った。

5．本報告書に掲載した旧石器・縄文時代の石器については、有限会社アルケーリサーチに実測を委託した。

6．本報告に係る出土品及び記録資料等は、志木市立埋蔵文化財保管センターに一括して保管している。

7．各遺跡の発掘調査及び整理作業・報告書刊行作業には、以下の諸機関・諸氏のご教示・ご援助を賜った。記して感謝する次第である（敬称略）。

埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課・㈶埼玉県埋蔵文化財事業団・朝霞市教育委員会・朝霞市博物館・新座市教育委員会・和光市教育委員会・富士見市教育員会・富士見市立水子貝塚資料館・富士見市立難波田城資料館

江原　順・加藤秀之・川畑隼人・隈本健介・斎藤　純・齊藤欣延・斯波　治・鈴木一郎・照林敏郎・中岡貴裕・根本　靖・野沢　均・早坂廣人・堀　善之・前田秀則・松本富雄・柳井彰宏・山本　龍・和田晋治・渡辺邦仁

8．本報告に係る文化財保護法に基づく各種届出等及び指示通知については、下記の通りである。

○周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について（通知）

城山遺跡第27地点／平成７年３月16日付け　教文第３－641号

城山遺跡第28地点／平成７年１月27日付け　教文第３－545号

中道遺跡第56地点／平成13年４月３日付け　教文第３－993号

○埋蔵文化財の発掘調査について（通知）

城山遺跡第27地点／平成７年３月16日付け　教文第２－176号

城山遺跡第28地点／平成７年１月27日付け　教文第２－166号

中道遺跡第56地点／平成13年４月３日付け　教文第２－131号

○埋蔵物の文化財認定について

城山遺跡第27地点／平成７年８月15日付け　教文第６－041号

城山遺跡第28地点／平成17年12月１日付け　教生文第５－321号

中道遺跡第56地点／平成13年６月22日付け　教文第５－87号

凡　例

1．本報告書で使用した地図は以下のとおりである。

第１図　　1：10,000「志木市全図」アジア航測株式会社調製

第２・35図　　1：2,500　ゼンリン電子住宅地図　デジタウン「埼玉県志木市」平成15年８月発行株式会社ゼンリンを一部改変

2．挿図版の縮尺は、それぞれに明記した。

3．遺構挿図版中の水糸レベルは、海抜標高を示す。

4．ピット・掘り込み内の数値は、床面もしくは確認面からの深さを示し、単位はcmである。また、同一遺構内にあるピットでも、おそらく後世のピットと思われるものには、数値を省略した。

5．遺構挿図版中のドットは遺物出土位置を示すが、遺物が密集する場合は個体別にドットマークを換えて表示した。番号は遺物挿図版中の遺物番号と一致する。

6．遺構挿図版中のスクリーントーンについては、各挿図版内にその内容を示したが、遺物挿図版中のスクリーントーンは、土器の赤彩範囲を示す。

7．第10表の遺構外出土の縄文土器の記述の中で使用した色調は、『新版　標準土色帖　1999年版』農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修を参考にした。

8．遺構の略記号は、以下のとおりである。

U＝旧石器時代の石器集中地点　　J＝縄文時代の住居跡　　H＝古墳時代の住居跡

D＝土坑　　M＝溝跡　　W＝井戸跡　　P＝ピット

志木市遺跡調査会組織

〈役　　員〉

会　　長　秋山太蔵（志木市教育委員会教育長）（昭和63年7月～平成12年6月）
細田信良（　　〃　　）（平成12年7月～平成17年6月）
柚木　博（　　〃　　）（平成17年10月～平成20年3月）
白砂正明（　　〃　　）（平成20年4月～平成22年12月）

会長職務代理者　新井　茂（　　〃　　）（平成17年7月～9月）

副　会　長　川目憲夫（志木市教育委員会教育総務部長）（平成7年4月～平成12年3月）
谷合弘行（志木市教育委員会教育政策部長）（平成12年4月～平成15年3月）
白砂正明（　　〃　　）（平成15年4月～平成16年3月）
杉山　勇（　　〃　　）（平成16年4月～平成17年3月）
新井　茂（　　〃　　）（平成17年10月～平成22年12月）

理　　事　神山健吉（志木市文化財保護審議会委員長）
井上國夫（志木市文化財保護審議会委員）
高橋長次（　　〃　　）
高橋　豊（　　〃　　）
内田正子（　　〃　　）

理事兼事務局長　並木勝司（志木市教育委員会教育総務部参事兼生涯学習課長）
（平成3年4月～平成8年3月）
鈴木重光（生涯学習課長）（平成8年4月～平成12年3月）
土橋春樹（志木市教育委員会教育政策部参事兼生涯学習課長）
（平成12年4月～平成16年3月）
大熊章只（生涯学習課長）（平成16年4月～平成18年3月）
宮川英夫（志木市教育委員会教育政策部参事兼生涯学習課長）
（平成18年4月～平成19年3月）
吉田　洋（志木市教育委員会教育政策部生涯学習課長）
（平成19年4月～平成21年3月）
土岐隆一（志木市教育委員会教育政策部生涯学習課長）
（平成21年4月～平成22年12月）

〈監　　査〉

監　　事　武川洋子（志木市郷土資料館長）（平成5年4月～平成8年3月）
萩原洋子（　　〃　　）（平成8年4月～平成14年3月）
鈴木憲三（社会教育指導員）（平成5年4月～平成9年3月）
佐藤　茂（　　〃　　）（平成6年4月～平成10年3月）
永田伸夫（　　〃　　）（平成10年4月～平成14年3月）
福田鮎子（　　〃　　）（平成14年4月～平成16年3月）

金子雅佳（生涯学習課主幹）（平成14年4月～8月、平成15年8月～平成16年3月）
荒井正夫（生涯学習課主査）（平成14年8月～平成15年7月）
樺嶋秀俊（生涯学習課主任）（平成16年4月～平成18年3月）
並木貴子（　　〃　　）（平成16年4月～平成17年3月）
古屋大輔（　　〃　　）（平成17年4月～平成18年3月）
原田隆一（志木市教育委員会教育総務課長）（平成18年4月～平成20年3月）
菊原龍治（　　〃　　）（平成20年4月～平成22年12月）
鈴木幸治郎（志木市出納室長）（平成18年4月～平成20年3月）
宮川英夫（志木市出納室長）（平成20年4月～平成22年12月）

〈事　務　局〉

担　当　課　志木市教育委員会教育総務部社会教育課（～平成12年3月）
志木市教育委員会生涯学習部生涯学習課（平成12年4月～平成14年3月）
志木市教育委員会教育政策部生涯学習課（平成14年4月～平成22年12月）

事　務　局　尾崎健市（生涯学習課長補佐兼生涯学習課係長）（平成7年4月～平成10年3月）
土岐隆一（生涯学習課副課長）（平成20年4月～平成21年3月）
醍醐一正（　　〃　　）（平成21年4月～平成21年12月）
金子雅佳（生涯学習課主幹）（平成14年8月～平成16年3月、
平成14年8月～平成17年3月）
下河辺信行（生涯学習課主幹）（平成14年4月～8月）
醍醐一正（　　〃　　）（平成16年4月～平成18年3月）
今野美香（　　〃　　）（平成19年4月～11月）
大熊克之（　　〃　　）（平成19年12月～平成22年12月）
岡本　孝（生涯学習課係長）（平成3年4月～平成9年3月）
関根正明（生涯学習課主査）（平成9年4月～平成15年7月）
内田　誠（　　〃　　）（平成18年4月～7月）
佐々木保俊（　　〃　　）（～平成21年8月）
清水　隆（　　〃　　）（平成19年5月～7月）
今野美香（　　〃　　）（平成15年8月～平成19年3月）
尾形則敏（　　〃　　）（～平成22年12月）
清水あや子（生涯学習課主任）（平成8年4月～平成12年3月）
新井由紀子（　　〃　　）（平成12年4月～平成14年3月）
倉部恵子（　　〃　　）（平成14年4月～平成18年3月）
松永真知子（　　〃　　）（平成18年4月～平成22年12月）
高野雅也（　　〃　　）（平成20年4月～平成21年7月）
徳留彰紀（生涯学習課主事）（～平成22年12月）

〈城山遺跡第27地点の発掘調査〉

調査担当者　尾形則敏
調　査　員　深井恵子

発掘協力員　太田敦子・鎌本あけみ・高田美智子・星野恵美子・松浦恵子・丸山恵美子

〈城山遺跡第28地点の発掘調査〉

調査担当者　尾形則敏

調査員　深井恵子

発掘協力員　太田敦子・鎌本あけみ・高田美智子・星野恵美子・松浦恵子・丸山恵美子

〈中道遺跡第56地点の発掘調査〉

調査担当者　尾形則敏

調査員　深井恵子

発掘協力員　足立裕子・阿部公子・阿部理英・太田敦子・奥野恭子・鎌本あけみ・三瓶慎一・鈴木浩子・高杉朝子・高田美智子・塚田和枝・土屋冨子・富田静江・永井真理・成田しのぶ・二階堂美知子・星野恵美子・松浦恵子・丸山恵美子・山口優子・矢野恵子

志木市教育委員会組織

教育長	尾崎健市
教育政策部長	菊原龍治
生涯学習課長	松井俊之
生涯学習課主幹	井上　茂
生涯学習課主査	尾形則敏
〃	浅見千穂
〃	武井香代子
生涯学習課主任	松永真知子
生涯学習課主事	徳留彰紀
〃	大久保　聡
志木市文化財保護審議会	井上國夫（会長）
	高橋長次（委員）
	高橋　豊（委員）
	深瀬　克（委員）
	上野守嘉（委員）

〈整理作業〉

担当者	尾形則敏・徳留彰紀
調査員	深井恵子・青木　修
調査補助員	星野恵美子・鈴木浩子
整理協力員	池野谷有紀・小林　律・高田美智子・二階堂美知子・林ゆき子・増田千春・松浦恵子・村田浩美

目　　次

はじめに
例　言／凡　例／目　次／挿図目次／表 目 次／図版目次
第１章　遺跡の立地と環境 …… 1
　第１節　市域の地形と遺跡 …… 1
　第２節　遺跡の概要 …… 7
第２章　城山遺跡第27地点の調査 …… 9
　第１節　調査の経緯 …… 9
　第２節　古墳時代後期の遺構・遺物 …… 13
　第３節　中世以降の遺構・遺物 …… 19
　第４節　遺構外出土遺物 …… 36
第３章　城山遺跡第28地点の調査 …… 40
　第１節　調査の経緯 …… 40
　第２節　縄文時代の遺構・遺物 …… 42
　第３節　古墳時代後期の遺構・遺物 …… 43
　第４節　近世の遺構・遺物 …… 58
　第５節　遺構外出土遺物 …… 59
第４章　中道遺跡第56地点の調査 …… 62
　第１節　調査の経緯 …… 62
　第２節　検出された遺構・遺物 …… 66
第５章　調査のまとめ …… 72
　第１節　城山遺跡第27地点 …… 72
　第２節　城山遺跡第28地点 …… 74
　第３節　中道遺跡第56地点 …… 76

図　版
報告書抄録

挿図目次

第１図　市域の地形と遺跡分布（1／20,000）…… 2
第２図　城山遺跡の調査地点（1／3,000）…… 10
第３図　遺構分布図（1／150）…… 12
第４図　121・122号住居跡・115号土坑（1／60）…… 14
第５図　121号住居跡遺物出土状態（1／60）…… 15
第６図　121号住居跡カマド（1／30）…… 15
第７図　121号住居跡出土遺物（1／4・1／3）…… 16
第８図　土坑1（1／60）…… 21
第９図　103号土坑出土遺物１（1／4）…… 22
第10図　103号土坑出土遺物２（1／4・4／5）…… 23
第11図　土坑2（1／60）…… 26
第12図　土坑3（1／60）…… 27
第13図　109～111号土坑出土遺物（1／4・1／3）…… 27
第14図　15号井戸跡（1／60）…… 28
第15図　27・28号溝跡（1／70）…… 29
第16図　27号溝跡出土遺物（1／4）…… 31
第17図　53号溝跡（1／60）…… 32
第18図　遺構外出土遺物１（2／3・1／3）…… 37
第19図　遺構外出土遺物２（1／3）…… 38
第20図　遺構分布図（1／150）…… 41
第21図　102号土坑・出土遺物（1／60・1／3）…… 43
第22図　116号住居跡（1／60）…… 45
第23図　116号住居跡カマド（1／30）…… 46
第24図　117号住居跡（1／60）…… 46
第25図　116号住居跡出土遺物１（1／4）…… 47
第26図　116号住居跡出土遺物２（1／4・1／3）…… 48
第27図　118号住居跡（1／60）…… 50
第28図　118号住居跡カマド（1／30）…… 50
第29図　118号住居跡出土遺物（1／4・2／3）…… 51
第30図　119号住居跡・出土遺物（1／60・1／4）…… 52
第31図　120号住居跡（1／60）…… 53
第32図　120号住居跡出土遺物（1／4・1／3）…… 54
第33図　101号土坑・出土遺物（1／60・1／3）…… 59
第34図　遺構外出土遺物（2／3・1／3・1／4）…… 61
第35図　中道遺跡の調査地点（1／2.500）…… 63

第36図　確認調査時の遺構分布図（1／500）…… 64
第37図　遺構分布図（1／500）…… 65
第38図　17号溝跡（1／100）…… 67
第39図　24号溝跡（1／60）…… 68
第40図　溝跡出土遺物（1／4・1／3）…… 68
第41図　土坑（1／60）…… 69
第42図　遺構外出土遺物（1／3）…… 70
第43図　17号溝跡検出状況（1／1,500）…… 77

表目次

第1表　志木市埋蔵文化財包蔵地一覧 …… 1
第2表　城山遺跡第27地点の発掘調査工程表 …… 11
第3表　121号住居跡出土土器一覧（1） …… 17
　　121号住居跡出土土器一覧（2） …… 18
第4表　土坑・井戸跡・溝跡出土の陶磁器・土器一覧（1） …… 33
　　土坑・井戸跡・溝跡出土の陶磁器・土器一覧（2） …… 34
　　土坑・井戸跡・溝跡出土の陶磁器・土器一覧（3） …… 35
第5表　遺構外出土の石器一覧 …… 36
第6表　遺構外出土の縄文土器一覧 …… 38
第7表　遺構外出土の陶磁器・土器一覧 …… 39
第8表　城山遺跡第28地点の発掘調査工程表 …… 41
第9表　116号住居跡出土土器一覧（1） …… 55
　　116号住居跡出土土器一覧（2） …… 56
第10表　118号住居跡出土土器一覧 …… 57
第11表　119号住居跡出土土器一覧 …… 57
第12表　120号住居跡出土土器一覧 …… 58
第13表　101号土坑出土の陶器一覧 …… 59
第14表　遺構外出土の石器一覧 …… 61
第15表　遺構外出土の陶磁器・土器一覧 …… 61
第16表　17号溝跡出土土器一覧 …… 71
第17表　24号溝跡・遺構外出土の陶器・土器一覧 …… 71

図版目次

図版1　城山遺跡第27地点
1．表土剥ぎ風景　2～4．121号住居跡遺物出土状態
5．121号住居跡貯蔵穴遺物出土状態　6．121号住居跡カマド
7．121・122号住居跡　8．121号住居跡掘り方
図版2　城山遺跡第27地点
1．103号土坑　2．103号土坑縦坑　3・4．103号土坑主体部　5．105号土坑
6．106号土坑　7．107号土坑　8．108号土坑A～D
図版3　城山遺跡第27地点
1．109号土坑　2．110号土坑　3．111・112号土坑　4．113・114号土坑
5．115号土坑　6．15号井戸跡　7．発掘調査風景
図版4　城山遺跡第27地点
1．27・28号溝跡（南から）　2．27号溝跡南端（北から）　3．27号溝跡（北から）
4．27・28号溝跡（南から）
図版5　城山遺跡第27地点
1．28号溝跡（南から）　2．28号溝跡（北から）　3．27・28号溝跡（南から）
4・5．53号溝跡
図版6　城山遺跡第27地点
121号住居跡出土遺物
図版7　城山遺跡第27地点
103号土坑出土遺物1
図版8　城山遺跡第27地点
1．103号土坑出土遺物2　2．109号土坑出土遺物　3．111号土坑出土遺物
4．110号土坑出土遺物
図版9　城山遺跡第27地点
1．15号井戸跡出土遺物　2．27号溝跡出土遺物　3．28号溝跡出土遺物
図版10　城山遺跡第27地点
遺構外出土遺物
図版11　城山遺跡第28地点
1．102号土坑　2．116号住居跡発掘風景　3～6．116号住居跡遺物出土状態
7．116号住居跡貯蔵穴付近　8．116号住居跡貯蔵穴
図版12　城山遺跡第28地点
1．116号住居跡カマド粘土出土状態　2．116号住居跡カマド掘り方
3．116号住居跡掘り方　4．117号住居跡　5．117号住居跡カマド
6．117号住居跡貯蔵穴　7．118・119号住居跡　8．118号住居跡遺物出土状態

図版13　城山遺跡第28地点

1．118号住居跡カマド遺物出土状態　2．118号住居跡カマド掘り方

3．119号住居跡　4．119号住居跡遺物出土状態　5．118・119号住居跡掘り方

6．120号住居跡遺物出土状態　7．120号住居跡

図版14　城山遺跡第28地点

1．102号土坑出土遺物　2．116号住居跡出土遺物1

図版15　城山遺跡第28地点

1．116号住居跡出土遺物2　2．119号住居跡出土遺物

図版16　城山遺跡第28地点

1．118号住居跡出土遺物　2．120号住居跡出土遺物

図版17　城山遺跡第28地点

1．101号土坑出土遺物　2．遺構外出土遺物

図版18　中道遺跡第56地点

1．遺構確認風景　2．発掘調査風景　3～6．17号溝跡（南から）

図版19　中道遺跡第56地点

1・2．17号溝跡（北から）　3．17号溝跡南端　4．17号溝跡・139号土坑（北から）

5．24号溝跡（東から）　6．137号土坑　7．138号土坑

図版20　中道遺跡第56地点

1．17号溝跡出土遺物　2．24号溝跡出土遺物　3．137号土坑出土遺物

4．1号ピット出土遺物　5．遺構外出土遺物

第１章　遺跡の立地と環境

第１節　市域の地形と遺跡

（１）地理的環境と遺跡分布

志木市は、埼玉県の南西部に位置し、市域はおおよそ南北4.71km、東西4.73kmの広がりをもち、面積は9.06㎢、人口約７万３千人の自然と文化の調和する都市である。

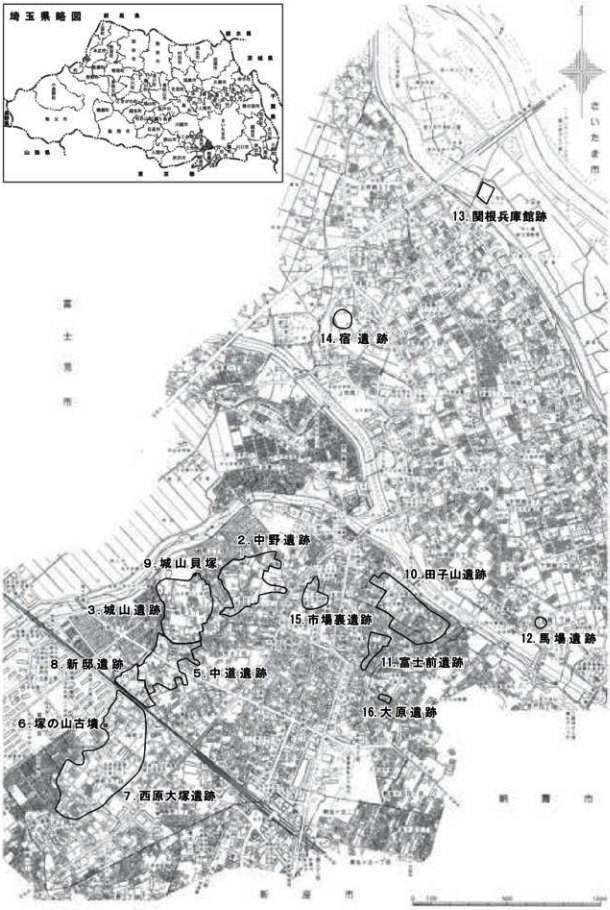
地理的景観を眺めて見ると、市域東部の宗岡地区は、荒川（旧入間川）の形成した沖積低地が拡がり、市域西部の本町・柏町・幸町地区は、古多摩川によって形成された武蔵野台地の上にある。また、市内には東部に荒川、中央に古くは舟運で利用された新河岸川、そして西部から中央に新河岸川と合流する柳瀬川の３本の川が流れている。

こうした自然環境の中で、市内遺跡の大部分は、柳瀬川・新河岸川右岸流域の台地縁辺部に帯状に分布している。遺跡は柳瀬川上流から順に、西原大塚遺跡（７）、新邸遺跡（８）、中道遺跡（５）、城山遺跡（３）、中野遺跡（２）、市場裏遺跡（15）、田子山遺跡（10）、富士前遺跡（11）、大原遺跡（16）

№　遺跡名	遺跡の規模	地　目	遺跡の種類	遺跡の時代	主な遺構	主な遺物
2　中　野	63,540㎡	畑・宅地	集落跡	旧石器、縄（早～晩）、弥（後）、古（前～後）、平、中・近世	石器集中地点、住居跡、土坑、井戸跡、溝跡等	石器、縄文・弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器等
3　城　山	81,310㎡	畑・宅地	城館跡・集落跡	旧石器、縄（草創～晩）、弥（後）、古（前～後）、奈・平、中・近世	石器集中地点、住居跡、土坑、土坑墓、地下室、井戸跡、溝跡、柏城跡関連、鋳造関連等	石器、縄文・弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、土師質土器、古銭、鋳造関連遺物等
5　中　道	52,980㎡	畑・宅地	集落跡・墓跡	旧石器、縄（早～後）、弥（後）、古（前～後）、平、中・近世	石器集中地点、住居跡、土坑、方形周溝墓、土坑墓、地下式坑、溝跡、道路状遺構等	石器、縄文土器、土師器、須恵器、陶磁器、古銭、人骨等
6　塚の山古墳	800㎡	林	古墳?	古　墳?	古　墳?	なし
7　西原大塚	163,930㎡	畑・宅地	集落跡・墓跡	旧石器、縄（前～晩）、弥（後）、古（前・後）、奈・平、中・近世	石器集中地点、住居跡、土坑、方形周溝墓、井戸跡、溝跡等	石器、縄文・弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、古銭等
8　新　邸	20,080㎡	畑・宅地	貝塚・集落跡・墓跡	縄（早～中）、古（前・後）、中・近世、近代	貝塚、住居跡、土坑、方形周溝墓、井戸跡、溝跡、段切状遺構、ピット群等	石器、貝、縄文・弥生土器、土師器、陶磁器、古銭等
9　城山貝塚	900㎡	林	貝　塚	縄（前）	斜面貝塚	石器、縄文土器、貝
10　田子山	74,030㎡	畑・宅地	集落跡・墓跡	縄（草創～晩）、弥（後）、古（後）、奈・平、中・近世、近代	住居跡、土坑、方形・円形周溝墓、ローム採掘遺構、溝跡等	縄文・弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、炭化種子等
11　富士前	12,000㎡	宅　地	集落跡	弥（後）～古（前）、平安、近世以降	住居跡、土坑?、溝跡?	弥生土器、土師器
12　馬　場	2,800㎡	畑	集落跡	古（前）	住居跡?	土師器
13　関根兵庫館跡	4,900㎡	グラウンド	館　跡	中世	不明	なし
14　宿	7,700㎡	田	館　跡	中世	溝跡・井桁状構築物	木・石製品
15　市場裏	13,800㎡	宅　地	集落跡・墓跡	弥（後）～古（前）、中世以降	住居跡・方形周溝墓・土坑	弥生土器、土師器、土師質土器
16　大　原	1,700㎡	宅　地	不　明	近世以降?	溝跡	なし
合　計	500,470㎡					

平成26年12月26日現在

第１表　志木市埋蔵文化財包蔵地一覧



第１図　市域の地形と遺跡分布（1／20,000）　平成26年12月26日現在

と名付けられている。また、荒川・新河岸川が形成した沖積低地でも、馬場遺跡（12）、宿遺跡（14）、関根兵庫館跡（13）のように自然堤防上に存在する遺跡も明らかにされつつあり、将来的には新たな遺跡が相次いで発見される可能性がある。なお、現在市内の遺跡総数は、前述した12遺跡に塚の山古墳（６）、城山貝塚（９）を加えた14遺跡である（第１図）。

（２）歴史的環境

次に市内の遺跡を時代順に概観してみることにする。

１．旧石器時代

旧石器時代の遺跡は、柳瀬川右岸の中野・城山・中道・西原大塚遺跡で確認されている。

中道遺跡では、昭和62（1987）年の富士見・大原線（現ユリノキ通り）の工事に伴う発掘調査により、立川ローム層のⅣ層上部・Ⅵ層・Ⅶ層で文化層が確認されており、礫群、石器集中地点が検出されている。これにより、黒曜石製のスクレイパーやナイフ形石器、安山岩や凝灰岩の石核や剥片などが発見されている。

西原大塚遺跡では、西原特定土地区画整理事業に伴う発掘調査により、石器集中地点が検出されている。石器集中地点は、平成６（1994）年度には２ヶ所、平成７年（1995）度には１ヶ所が検出され、ナイフ形石器・剥片などが発見されている。

平成11～14（1999～2002）年度にかけて発掘調査が実施された中野遺跡第49地点からも立川ローム層の第Ⅳ層下部から、黒曜石・頁岩の石核・剥片が約60点出土している。

また、城山遺跡では、平成13（2001）年に発掘調査が実施された第42地点から、立川ローム層の第Ⅳ層上部と第Ⅶ層の２ヶ所で石器集中地点が検出され、黒曜石・安山岩・チャート・頁岩などの抉入石器・剥片など32点が出土している。平成20・21（2008・2009）年に発掘調査が実施された第62地点（道路・駐車場部分）でも１ヶ所の石器集中地点が検出され、ナイフ形石器・剥片が出土している。最新では、平成23（2011）年に発掘調査が実施された第71地点では、石器集中地点２ヶ所、礫群９基が検出され、特に礫群については、市内において初の発見例につながった。

２．縄文時代

縄文時代では、西原大塚遺跡を中心に中期後葉の遺跡が集中し、城山貝塚の周辺の城山遺跡からは、前期末葉（諸磯式期）の住居跡や土器がやや多く検出される傾向にある。

ここでは、時代の推移に従って説明することにする。まず、草創期では、平成４（1992）年に発掘調査が実施された城山遺跡第16地点から爪形文系土器１点、平成６（1994）年に発掘調査が実施された城山第21地点から多縄文系土器３点、第22地点から爪形文系土器１点、平成10（1998）年に発掘調査が実施された田子山遺跡第51地点から有茎尖頭器１点が出土している。

早期では、遺構の検出例はまだ少ないが、住居跡として、平成18（2006）年に発掘調査が実施された中道遺跡第65地点で検出された早期末葉（条痕文系）の10号住居跡１軒が最古のものと言える。土器としては、田子山遺跡で撚糸文・沈線文・条痕文系土器が出土しているが、御嶽神社を中心とする東側でやや多く出土する傾向がある。最新資料では、平成23（2011）年に発掘調査が実施された田子山遺跡第121地点のローム上層の遺物包含層から撚糸文系土器・石器がまとまって出土している。また、城山・中野・田子山遺跡からは、条痕文系土器が炉穴に伴い出土している。

前期では、西原大塚・新邸遺跡で住居跡（黒浜式期）、城山遺跡では住居跡（諸磯式期）が検出されている。そのうち、新邸遺跡のものは貝層をもつ住居跡である。また、平成２（1990）年度に市指定文化財に認定された城山貝塚も縄文海進期にあたるこの頃の時代に形成された斜面貝塚と考えられる。

中期になると遺跡が最も増加する。特に、中期中葉から後葉の勝坂式～加曽利Ｅ式期にはその傾向が強くなり、中野・城山・中道・西原大塚・田子山遺跡で住居跡を中心に土坑が検出されている。特に西原大塚遺跡では、現時点で180軒以上の住居跡が環状に配置していることが判明しつつある。中期末葉からは遺跡が減少し、現在のところ西原大塚遺跡から敷石をもつ住居跡が１軒確認されるのみである。

後期では、西原大塚遺跡から堀之内式期の住居跡１軒と加曽利Ｂ式期の住居跡１軒、遺物集中地点１ヶ所が検出されている。また、その他の遺構としては、平成６（1994）年に発掘調査が実施された田子山遺跡第31地点で、土坑１基が検出され、下層から称名寺Ⅰ式期の土器、上層からⅡ式の特徴をもつ土器が出土している。西原大塚遺跡第54地点でも２基の土坑が検出されている。最新資料では、平成25（2013）年度に発掘調査が実施された中野遺跡第85地点から、市内初の柄鏡形住居（敷石住居）１軒が検出され、注目される。

晩期では、中野・田子山遺跡から安行３ｃ式・千網式の土器片が少量発見されるにとどまり、以降市内では弥生時代後期まで空白の時代となる。

３．弥生時代～古墳時代前期

弥生時代では、現時点において、前・中期の遺跡は検出されていないが、後期末葉から古墳時代前期と考えられる遺跡が数多く検出されている。中でも、平成６（1994）年に発掘調査が実施された田子山遺跡第31地点の21号住居跡は後期中葉に比定される可能性があり、その住居跡からは、多数の土器をはじめ、大量の炭化種子（イネ・アワ・ダイズなど）、炭化材が出土し、当時の食糧事情を考える上で重要である。富士前遺跡では、『志木市史』にも掲載されているが、不時の発見に伴い、籠目痕をもつ壺形土器をはじめとした多くの土器が発見されている。

西原大塚遺跡では後期末葉から古墳時代前期にかけての住居跡が約600軒確認されており、市内最大の集落跡であることが判明している。特に、122号住居跡からは全国的にも稀な「イヌ」を象ったと思われる動物形土製品が出土している。平成24（2012）年に発掘調査が実施された第179地点からは、遺存状態は良好ではないが、市内初の銅釧が出土している。

昭和62（1987）年以降、西原大塚・田子山・市場裏遺跡の３遺跡において、方形周溝墓が検出されてきたが、最新では、平成15（2003）年に発掘調査が実施された新邸遺跡第８地点と平成18（2006）年に実施された中道遺跡第65地点でも、それぞれ１基が確認されている。これにより当時の墓域が、集落と単位のなまとまりをもって存在することが明らかになってきたと言えるであろう。

市内で最も多く方形周溝墓が検出されている西原大塚遺跡では、10号方形周溝墓の溝底から一括出土した中に畿内系の庄内式の長脚高坏が出土していることに注目される。また、平成11（1999）年に発掘調査が実施された西原大塚遺跡第45地点では、一辺20ｍを超える市内最大規模の17号方形周溝墓が発見され、この方形周溝墓の溝からは、珍しい鳥形土製品をはじめ、畿内系の有段口縁壺、吉ヶ谷式系の壺、在地系の壺などと大きく畿内・比企地域・在地の３要素の特徴を示す壺が出土している。こうした地域に関わる被葬者の人物像が浮き彫りにされたことで、当地域の弥生時代後期から古墳時代前期の歴史を紐解く手がかりになったことは重要である。

なお、以上のうち、西原大塚遺跡122号住居跡出土の動物形土製品１点と西原大塚遺跡17号方形周溝墓から出土した、鳥形土製品１点と壷形土器４点の計５点は、考古資料として、平成25年３月１日付けで、市指定文化財に指定されている。

４．古墳時代中・後期

古墳時代でも前期末葉から中期になると、遺跡が減少する傾向にある。その中で、西原大塚遺跡に隣接する新邸遺跡で検出されている第２地点の１号住居跡と平成15（2003）年に発掘調査が実施された第８地点の２～８号住居跡は、古墳時代前期でも比較的に新しい段階に比定される可能性がある。このことから、新邸遺跡で検出された住居跡は、隣接する西原大塚遺跡から継続して広がった集落跡ではないかと推測される。

中期の遺跡では、中道・城山・中野遺跡から住居跡が発見されている。その中でも、平成７（1995）年に発掘調査が実施された中道遺跡第37地点19号住居跡は、５世紀中葉に比定され、カマドをもつ住居跡としては市内最古のものである。

５世紀末葉になると、遺跡が増加傾向にあり、特に６世紀後半から７世紀後半にかけては、縄文中期を越えるほどの爆発的な増加をみる。こうした集落跡は現在、中道・城山・中野遺跡に比較的に古い５世紀代の住居跡が確認されていることから、柏町地区を中心に存在した集落が、６世紀後半以降、周辺の地域に拡散するという動きを読み取ることができる。

なお、新邸遺跡では第８地点で初めて古墳時代後期（７世紀中葉）の住居跡が１軒検出されている。この住居跡は、３×3.5ｍの小型の長方形を呈するもので、焼失住居であり、床面上からは土器・炭化材の他ベンガラ塊が出土している。

現在、５世紀後半から７世紀後半にかけての時期に比定できる住居跡の軒数は、最も多い城山遺跡で200軒を越え、次いで中野遺跡で約50軒、中道遺跡で約15軒、田子山遺跡で約10軒、新邸遺跡で１軒を数える。

また住居跡以外では、平成５（1993）年に発掘調査が実施された田子山遺跡第24地点から、６世紀後半以降のものと考えられる4.1×4.7ｍの不整円形で２ヶ所にブリッジをもつ小型の円形周溝墓が１基確認されている。さらに、平成14（2002）年に発掘調査された田子山遺跡第81地点を契機に御嶽神社を取り囲むように外周で推定約33ｍの巨大な溝跡の存在が明らかになり、現時点では古墳の周溝ではないかと考えられている。

５．奈良・平安時代

奈良・平安時代の遺跡は、古墳時代後期以降に拡散した集落内で確認される傾向にあり、現在のところ、中野・城山・中道・西原大塚・田子山遺跡で検出されている。中でも城山・田子山遺跡はこの時代を代表とする遺跡として挙げることができる。城山遺跡では、平成８（1996）年に発掘調査が実施された第35地点の128号住居跡から、印面に「冨」１文字が書かれた完形品の銅印が出土しているが、これは県内でも稀少な例として貴重な資料であろう。この住居跡からはその他、須恵器坏や猿投産の緑釉陶器の小破片１点、布目瓦の小破片２点などが出土している。平成20・21（2008・2009）年の城山遺跡第62地点の調査では、平安時代の241号住居跡から皇朝十二銭の一つである富壽神寶（ふじゅしんぽう）が２枚とその近くからは鉄鎌１点と土錘１点が出土しており、祭祀行為が行われたと考えられる貴重な例とし

て、県内でも重要な発見につながっている。

田子山遺跡では、平成５（1993）年に発掘調査が実施された第24地点からは、住居跡の他、掘立柱建築遺構・溝跡そして100基を越える土坑群が検出されている。平成６（1994）年に発掘調査が実施された第31地点の44号住居跡からは、腰帯の一部である銅製の丸鞆が出土している。さらにカマド右横の床面上からは、東金子窯跡群（入間市）の製品と南比企窯跡群（鳩山町）の製品という生産地の異なる須恵器坏が共伴して出土したことにより、土器編年の基本資料として貴重であると言える。

なお、以上のうち、城山遺跡128号住居跡出土の銅印ほか９点の遺物と城山遺跡第241号住居跡出土の冨壽神寶ほか２点の遺物は、考古資料として、平成25年３月１日付けで、市指定文化財に指定されている。

６．中・近世

中・近世の遺跡は、「柏の城」を有する城山遺跡と千手堂関連である新邸・中道遺跡、そして関根兵庫館跡・宿遺跡が代表される遺跡と言える。城山遺跡では、数次にわたる発掘調査により、『舘村旧記』（註１）にある「柏之城落城後の屋敷割の図」に相当する堀跡などが多数発見されている。最新では、『廻国雑記』（註２）に登場する「大石信濃守館」が「柏の城」に相当し、「大塚十玉坊」についても市内の「大塚」に由来があるという説が有力と言えるであろう（神山　1988・2002）。

また、平成７（1995）年に発掘調査が実施された第29地点の127号土坑からは、馬の骨が検出されている。この土坑からは、板碑と土師質土器の他、炭化種子（イネ・オオムギ・コムギなど）も出土しており、イネの塊状のものは「おにぎり」あるいは「ちまき」のようなものであるという分析結果が報告されている。

さらに、平成８（1996）年度に発掘調査が実施された第35地点では、鋳造関連の遺構も検出されている。130号土坑については鋳造遺構、134号土坑については溶解炉に該当し、遺物としては、大量の鉄滓（スラッグ）、鋳型、三叉状の土製品、砥石などが出土している。また、平成13（2001）年度の第42地点からは、多くの土坑・地下室・井戸跡が検出される中、234号土坑から、鉄鍋の完形品が出土したことは特筆すべきである。この鉄鍋は、土坑の坑底面に伏せてある状況で出土しており、「鍋被り葬」と呼ばれる風習が志木市でも実在していた可能性が高い。

戦国期の資料としては、平成６（1994）年度に発掘調査が実施された第21地点から、当市では初めて、鎧の札である鉄製品１点と鉄鏃１点が出土している。出土した遺構は、19世紀前半の86号土坑であるため混入品となるが、「柏の城」に関連する資料として大変重要な資料に加わったと言える。

平成11～14（1999～2002）年度にかけて発掘調査が実施された中野遺跡第49地点からは、頭を北に向け横臥屈葬された人骨を出土した67号土坑が検出されている。その他、ピット列・土坑・溝跡などが検出されていることから、この一帯が『舘村旧記』に記載がある「村中の墓場」関連に相当する施設ではないかと考えられる。

中道遺跡では、昭和62（1987）年の第２地点から人骨を伴う地下式坑、掘立柱建築遺構が検出され、平成７（1995）年の中道遺跡第37地点からは、人骨と古銭５枚を出土した土坑墓１基と13世紀に比定される青磁盤１点を出土した道路状遺構１条が検出されている。

新邸遺跡では、昭和60（1985）年の第１地点から段切状遺構の平場から多数の土坑・地下式坑が検出され、平成15（2003）年の新邸遺跡第８地点からは、人骨と六文銭を伴う火葬墓２基が検出されて

いる。おそらく、この新邸遺跡から中道遺跡一帯は、『館村旧記』に記載がある「大塚千手堂」であり、古くは天台宗の「七堂大伽藍」を誇る「松林山観音寺大受院」関連遺構として、今後は体系的な究明が必要とされるであろう。

７．近代以降

近代以降の遺跡では、平成５（1993）年に発掘調査が実施された田子山遺跡第31地点から、敷島神社境内に存在する富士塚の築造（明治２～５年）に関連するローム採掘遺構が検出されている。この遺構の坑底面からは、鋤・鍬などの無数の工具痕が観察され、採掘作業がかなり組織的な単位で行われていたこともわかり、地域研究の重要な資料と言える。

平成15（2003）年の新邸遺跡第８地点からは、野火止用水跡が検出され、市内初の発掘調査例となった。用水路の基盤面からは水付きの銹着面が確認され、底面からは大量の陶磁器が出土した。

第２節　遺跡の概要

ここで、今回本書で報告する城山遺跡と中道遺跡について概観することにする。

まず、城山遺跡は、志木市柏町３丁目を中心に広がる遺跡で、東武東上線志木駅の北西約1.2㎞、柳瀬川駅の東約0.8㎞に位置している。本遺跡は、柳瀬川右岸の台地上に立地しており、標高は約12ｍ、低地との比高差は約５ｍである。

遺跡の周辺を眺めてみると、小学校や神社・墓地などが存在する閑静な住宅地と言えるが、ここ５・６年の間は、毎年のように市内では比較的に規模の大きい開発が増加しており、最近では平成22・23年に分譲住宅建設に伴う第62地点、平成23年度に共同住宅建設に伴う第72地点や分譲住宅建設に伴う第71地点が実施され、僅かに残る緑地や畑地にまで各種開発の波が押し寄せている状況で、一帯がほぼ住宅地と言える。

城山遺跡は、これまでに85回の調査（平成26年12月５日現在）が実施され、旧石器時代、縄文時代草創～晩期、弥生時代後期、古墳時代前・中・後期、奈良・平安時代、中・近世に至る複合遺跡であることが判明している。

中道遺跡は、志木市柏町５丁目を中心に広がる遺跡で、東武東上線志木駅の北西約１㎞に位置している。本遺跡は、柳瀬川右岸の台地上に立地しており、標高は北端で約13ｍ、南端で約14ｍ、低地との比高差は約７ｍである。遺跡の現況は都市計画道路富士見・大原線（ユリノ木通り）の開通とともに各種開発が盛んに行われ、畑地は急激に減少している。

中道遺跡は、これまでに75回の調査（平成25年12月15日現在）が実施され、旧石器時代、縄文時代中期、古墳時代中・後期、平安時代、中・近世に至る複合遺跡であることが判明している。

［註］

註１　『館村旧記』は、館村（現在の志木市柏町・幸町・館）の名主宮原仲右衛門仲恒が、享保12～14（1727～1729）年にかけて執筆したものである。

註２　『廻回雑記』は、左大臣近衛房嗣の子で、京都聖護院門跡をつとめた道興准后が、文明18年（1486）６月から10ヶ月間、北陸路から関東各地をめぐり、駿河甲斐にも足をのばし、奥州松島までの旅を紀行文にまとめたものである。

［引用文献］

神山健吉　1988「「廻回雑記」に現れる　大石信濃守の館と十玉坊の所在についての一考察」『郷土志木』第７号
2002「道興をめぐる二つの謬説を糾す」『郷土志木』第31号

第２章　城山遺跡第27地点の調査

第１節　調査の経緯

（１）調査に至る経過

平成６年９月、市内在住の個人から志木市教育委員会（以下、教育委員会）へ開発計画地内における埋蔵文化財の有無及び取り扱いについての照会があった。計画は志木市）柏町３丁目2655－６（面積486.17㎡）内において共同住宅建設を実施するというものである。

これに対し、教育委員会は当該開発予定地が周知の埋蔵文化財包蔵地である城山遺跡（コード11228－09－003）に該当するため、大旨下記のとおり回答した。

１．本地点は埋蔵文化財包蔵地に該当し、さらに周辺での過去の調査結果から判断して、遺構が密集して分布していることが予想される。

２．埋蔵文化財確認調査を実施して、その結果に基づき、当該開発予定地の埋蔵文化財の有無及び取り扱いについて回答する。

３．上記２の結果、埋蔵文化財が確認された場合、埋蔵文化財の保存措置を講ずること。また、やむを得ず土地の現状を変更する場合は、記録保存のための発掘調査を実施する必要があること。

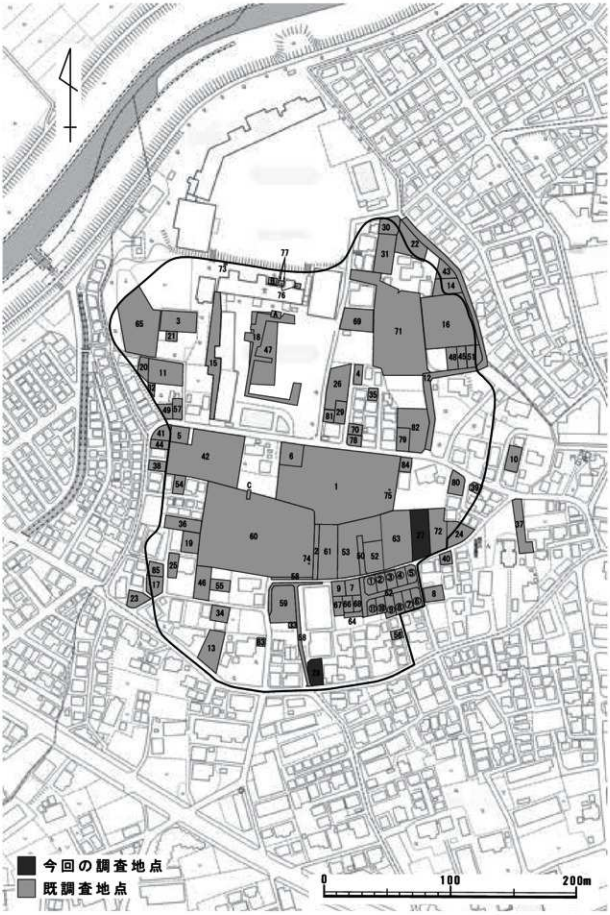
平成６年９月27日教育委員会は、開発者である個人より埋蔵文化財確認調査依頼書・発掘届を受理し、10月19日に確認調査を実施した。

確認調査は、調査区長軸に合わせ、２本のトレンチを設定し、バックホーで表土を剥ぎ、同時に遺構確認作業を行った。その結果、調査区北端からは、柏の城関連のものと思われる大堀跡の一部と古墳時代後期の住居跡１軒を検出した。

教育委員会は、この結果を直ちに開発者に報告し、埋蔵文化財の保存措置について協議を行った。その結果、結論的には記録保存のための発掘調査を実施することに決定した。その中で、調査区北端の柏の城関連の大堀跡と思われる遺構が検出された箇所については、当初の建物部分に当てる箇所を見直し、計画から除外することで計画変更となり、教育委員会は再度計画図を受理した。その結果、調査面積371.52㎡と計画規模が縮小されることになった。そこで教育委員会は、計画変更に伴い２回目の確認調査を平成７年１月30日に実施した。その結果、古墳時代後期の住居跡２軒、中世以降の井戸跡など多数の遺構を検出した。

教育委員会は、この結果を開発者に報告し、埋蔵文化財の保存措置についての最終協議を行い、記録保存のための発掘調査を実施することに決定した。そして、教育委員会では、開発者に対し、発掘調査にあたる組織として、志木市遺跡調査会（以下、遺跡調査会）を斡旋した。遺跡調査会ではこれを受け、開発者と委託契約を締結し、埋蔵文化財発掘調査届を教育委員会に提出した。教育委員会は、これらの届出書をすみやかに埼玉県教育委員会経由で文化庁長官に提出した。

これにより、平成７年２月27日から遺跡調査会を主体として発掘調査を施した。なお、発掘調査通知書番号は教文第３－641号　平成７年３月16日付けである。



平成26年12月26日現在

第２図　城山遺跡の調査地点（1／3,000）

（２）発掘調査の経過

ここでは、発掘調査の大まかな経過を説明することにし、各遺構の精査経過については、第２表の発掘調査工程表に示した。

２月27日　本日よりバックホー及びブルドーザーによる表土剥ぎ作業を開始する。残土については、調査区外への搬出作業は行わず、調査区北側の開発計画で除外された敷地を置場に当てることで対処した。

28日　本日で表土剥ぎ作業を終了する。検出された遺構は、古墳時代後期の住居跡１軒、中世以降の井戸跡数基・溝跡１本などであった。

３月２日　本日より人員導入による発掘調査を開始する。まず、調査区の整備と細部の遺構確認作業を行う。

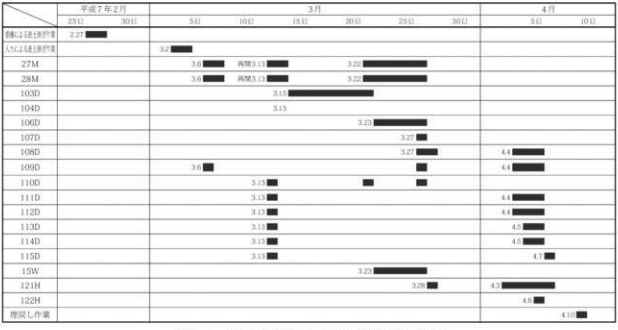
３月上旬　南北方向に延びる溝跡２本（27・28Ｍ）を中心に精査を行う。２本の溝跡は重複するが、セクションＥ－Ｅ'の観察により、28Ｍが新しいことが判明した。なお、３月８・９日は田子山遺跡第37地点の発掘調査の実施により、本地点の調査を一旦中断した。

３月中旬　27・28Ｍの精査に併行して、中世以降の土坑（103・104・110～115Ｄ）の精査を行った。103Ｄは入口竪坑部と主体部をもつ地下室であり、主体部の天井部はすでに崩落していた状態であった。

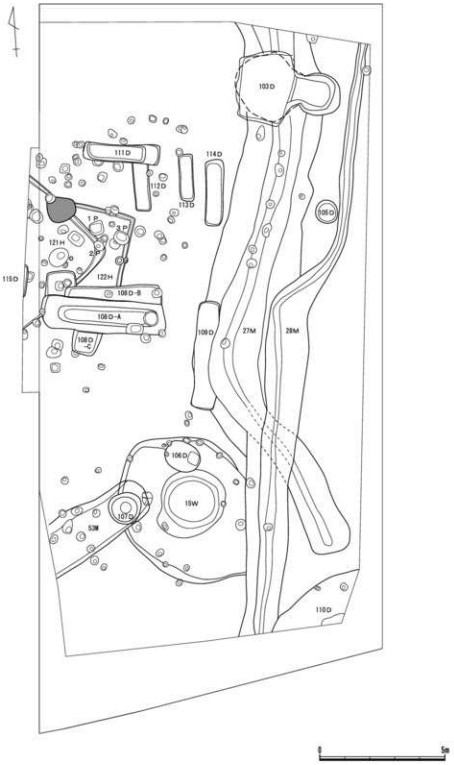
３月下旬　27・28M、103・104Ｄの精査を終了し、新たに中世以降の井戸跡（15Ｗ）、古墳時代後期の住居跡（121Ｈ）の精査を行う。15Ｗは周囲に楕円形の掘り込みをもち、そこに礫・砂・粘土を含む黄褐色土を敷き詰めている状態であった。

４月上旬　中世以降の土坑（108・109・111～115D）の精査を終了した。121Ｈについては、東側に別の住居跡が確認できたため、122Ｈとし調査を行い、７日にはすべての遺構の精査を完了した。

４月10日　バックホー及びブルドーザーのよる埋戻し作業を開始し、本日中に作業を完了する。



第２表　城山遺跡第27地点の発掘調査工程表



第３図　遺構分布図（1／150）

第２節　古墳時代後期の遺構・遺物

（１）概　要

古墳時代の遺構は、後期の住居跡２軒（121・122Ｈ）が検出された。２軒の住居跡は重複しており、新旧関係は、121Ｈが122Ｈより新しい。時期は121Ｈが７世紀中葉であるが、122Ｈについては、出土遺物がなかったため、詳細時期の決定はできなかった。

（２）住居跡

121号住居跡

遺　構（第４～６図）

［検出状況］東コーナー付近以外は調査区域外であり、122Ｈを切り、108Ｄ・115Ｄに切られる。

［構　造］**平面形**：方形。**規模**：不明／確認面からの深さ25㎝前後。**壁**：ほぼ垂直に立ち上がる。**壁溝**：確認できた範囲では、カマドを除き巡らされていた。上幅16～40㎝／下幅７～30㎝／深さ７～15㎝。**床面**：硬化した面は確認できなかったが、貼床は10～28㎝の厚さで施されていた。**カマド**：北東壁に位置する。主軸方位はＮ－50°－Ｅ。長さ90㎝／幅約100㎝／壁への掘り込み38㎝。袖部はロームを馬蹄形状に掘り残し、その上に粘土を被覆して構築されたと思われる。燃焼部は確認できなかった。**貯蔵穴**：東コーナーに偏って位置する。平面形は隅丸長方形。長軸62㎝／短軸47㎝／深さ53㎝。覆土はローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子・粘土粒子を含む暗茶褐色土を基調とする。中から坏・甕・支脚が出土した。**柱穴**：Ｐ１が主柱穴と思われる。覆土はローム粒子・ローム小ブロックを多く含む暗茶褐色土を基調とする。深さ62㎝。坏が１点出土した。

［覆　土］11層に分層できた。東コーナー付近から白色粘土が検出された。

［遺　物］土師器坏・甕形土器、須恵器甕形土器、土製品（支脚）が出土した。また、炭化種実（モモ）８点が出土した。

［時　期］古墳時代後期（７世紀中葉）。

遺　物（第７図、第３表）

［土　器］（第７図１～24、第３表）

１～19は土師器坏形土器、20～22は土師器甕形土器である。23は須恵器高坏形土器、24は須恵器甕形土器と思われる。

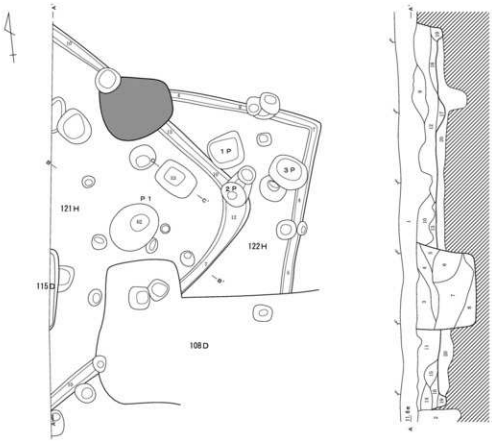
［土製品］（第７図25）

支脚である。高さ21.4㎝・上面径6.4㎝・下面径8.2㎝・重さ1.57㎏である。円筒形状を呈し、表面には縦方向に成形痕と思われる面が観察できる。色調は暗茶褐色を基調とし、粘土には砂粒を含まない。貯蔵穴からの出土で、ほぼ完形品である。なお、本資料は遺存状態が不良であるため、パラロイドＢ72（キシレン溶液）を含浸させ保存した。

122号住居跡

遺　構（第４図）

［検出状況］121Ｈ・108Ｄ・後世のピットに切られているため、詳細は不明である。

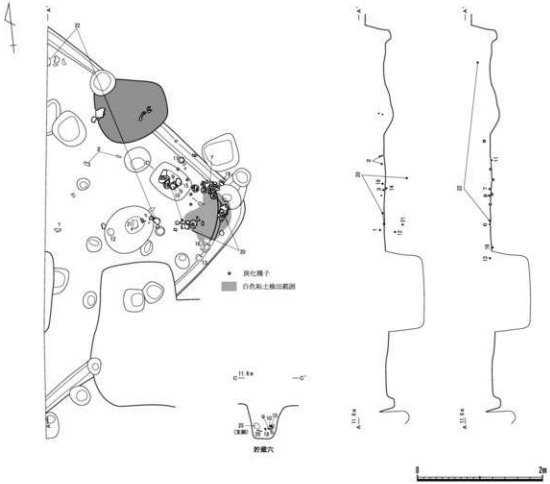


1層　表土及び耕作土。
2層　後世のピット。
3層　暗黄褐色土　ローム粒子・ローム小ブロックを多く、焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む。
4層　暗黄褐色土　ローム粒子を多く、焼土粒子・炭化物粒子・炭化材を含む。
5層　暗黄褐色土　ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。
6層　黄褐色土　ロームブロックを多く含む。
7層　暗黒褐色土　ローム粒子・ローム小ブロックを含む。
8層　黄褐色土　ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。
9層　黒褐色土　ローム粒子・焼土粒子を僅かに含む。
10層　暗黒褐色土　ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を含む。
11層　暗茶褐色土　ローム粒子を含む。
12層　明茶褐色土　ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を含む。
13層　暗黄褐色土　ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。
14層　黒褐色土　ローム粒子を含む。
15層　明茶褐色土　ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を含む。
16層　暗黄褐色土　ローム粒子を多く含む。
17層　明茶褐色土　ローム粒子・炭化物粒子を含む。
18層　暗黄褐色土　ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。
19層　暗黄褐色土　ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。
20層　黄褐色土　ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。粘質。

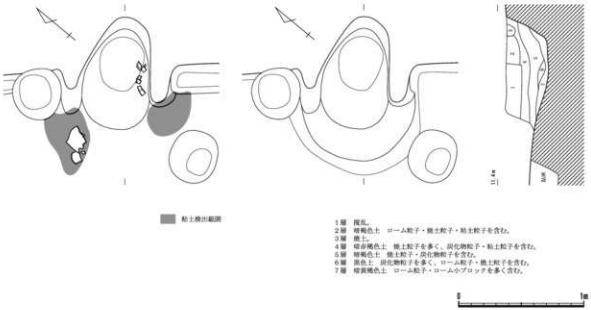
115D
121H

0　2m

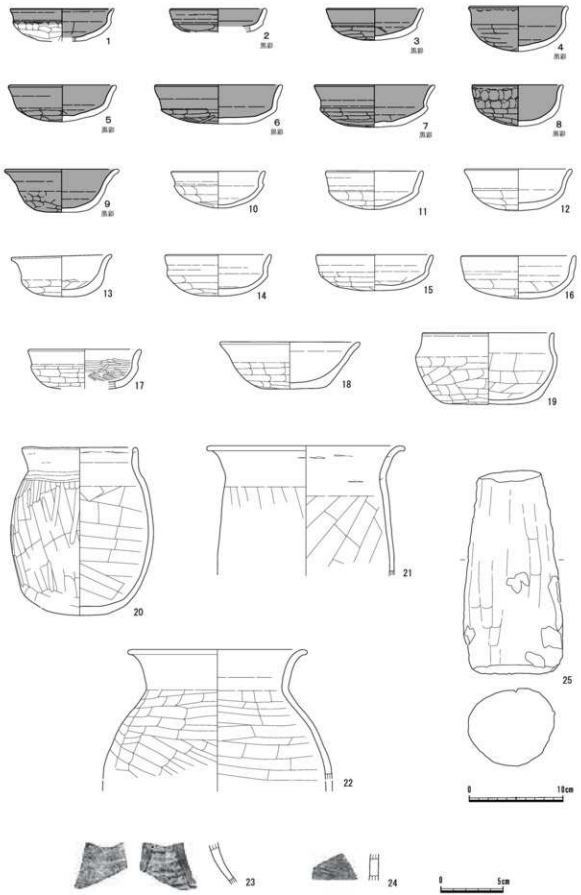
第４図　121・122号住居跡・115号土坑（1／60）



第５図　121号住居跡遺物出土状態（1／60）



第６図　121号住居跡カマド（1／30）



第７図　121 号住居跡出土遺物（1／4・1／3）

（　）は現存値及び推定値

掲図番号	器種	器高	口径	底径	特徴	色調	胎土	調整	出土位置	遺存度
第７図１	土師器 坏	(3.5)	(11.0)	－	いわゆる比企型坏／口縁部は外反する／口唇部内面に沈線がまわる／口縁部と底部との境に段をもつ／内面及び外面口縁部は赤彩	胎土は暗黄褐色	砂粒・小石をややや多く、茶褐色粒子・角閃石を含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ／外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り／外面口縁部直下には指頭による成形痕が僅かに残る	住居中央付近の覆土中（床上10㎝）	口縁部～底部40％
第７図２	土師器 坏	(2.5)	(10.3)	－	有段坏／小型品／口縁部は外傾する／口縁部と底部との境に段をもつ／内外面黒彩／在地系土師器	胎土は暗黄褐色	砂粒を多く、金雲母を含む	内面：横ナデ（回転ナデ）／外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り	カマド前面の覆土中（床上9・12㎝）	口縁部～底部30％
第７図３	土師器 坏	3.4	10.3	－	有段坏／小型品／口縁部は外傾する／口縁部と底部との境に段をもつ／内外面黒彩／在地系土師器	胎土は淡茶褐色	砂粒をやや多く、角閃石・金雲母を僅かに含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ／外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り後粗いヘラ磨き調整	住居東コーナーの覆土中（床上6㎝）	完形品
第７図４	土師器 坏	4.8	(10.6)	－	有稜坏／口縁部は僅かに外反する／口縁部と体部との境に稜をもつ／内外面黒彩／在地系土師器	胎土は淡茶褐色	砂粒を多く、角閃石を僅かに含む	内面：横ナデ／外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り後粗いヘラ磨き調整	覆土中	口縁部～底部30％
第７図５	土師器 坏	3.9	11.5	－	有稜坏／口縁部は外傾する／口縁部と体部との境に稜をもつ／内外面黒彩／在地系土師器	胎土は暗黄褐色	砂粒を多く、角閃石・金雲母を含む	内面：横ナデ（回転ナデ）／外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り	貯蔵穴覆土中	ほぼ完形品
第７図６	土師器 坏	4.2	13.6	－	有段坏／口縁部は外傾する／口縁部と底部との境に浅い段をもつ／内外面黒彩／在地系土師器	胎土は淡茶褐色	金雲母・砂粒をやや多く含む	内面：横ナデ、底部のみ一部ヘラナデ／外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り後粗いヘラ磨き調整	住居東コーナーの床面上	90％
第７図７	土師器 坏	4.5	12.8	－	有段坏／口縁部は外反する／口縁部と底部との境に段をもつ／内外面黒彩／在地系土師器	胎土は淡茶褐色	金雲母・砂粒をやや多く含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ／外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り後粗いヘラ磨き調整か	住居東コーナーの覆土中（床上5㎝）	80％
第７図８	土師器 坏	4.4	9.6	－	有稜坏／口縁部は僅かに外反する／口縁部と体部との境に稜をもつ／内外面黒彩／粗雑品／在地系土師器	胎土は淡茶褐色	砂粒をやや多く、金雲母を含む	内面：横ナデ（回転ナデ）／外面：口縁部は上端のみ軽く横ナデで基本は無調整、以下はヘラ削り／外面口縁部には指頭による成形痕が残る	住居東コーナーの覆土中（床上6㎝）	ほぼ完形品
第７図９	土師器 坏	4.6	12.0	－	有稜坏／口縁部は大きく外反する／口縁部と体部との境に稜をもつ／平底気味／内外面黒彩／在地系土師器	胎土は淡茶褐色	砂粒を含み、角閃石・金雲母を僅かに含む	内面：横ナデ（回転ナデ）／外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り	貯蔵穴覆土中	40％
第７図10	土師器 坏	3.9	10.2	－	有段坏／小型品／口縁部は外傾する／口縁部と底部との境に段をもつ／口唇部は摩耗している／在地系土師器	明橙色	砂粒を多く、金雲母を含む	内面：横ナデ（回転ナデ）／外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り	貯蔵穴覆土中	ほぼ完形品
第７図11	土師器 坏	4.1	10.4	－	有段坏／小型品／口縁部は途中に稜をもち外傾する／口縁部と底部との境に段をもつ／在地系土師器	明橙色	砂粒を多く、金雲母を含む	内面：横ナデ、底部のみヘラナデ／外面：横ナデ、以下はヘラ削り	カマド右横の貯蔵穴すぐ北の床面上	ほぼ完形品
第７図12	土師器 坏	4.4	11.4	－	有稜坏／口縁部は外反する／口縁部と体部との境に稜をもつ／在地系土師器	明橙色	砂粒を多く、黄褐色粒子・金雲母を含む	内面：口縁部は横ナデ、以下へラナデ／外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り	Ｐ１覆土中	ほぼ完形品

（単位：㎝）

第３表　121号住居跡出土土器一覧（１）

（　）は現存値及び推定値

掲図番号	器種	器高	口径	底径	特徴	色調	胎土	調整	出土位置	遺存度
第７図13	土師器 坏	4.5	10.7	－	有稜坏／口縁部は外反する／口縁部と体部との境に稜をもつ／粗雑品／在地系土師器	明橙色を基調	砂粒を多く、金雲母を含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ／外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り	住居東コーナー壁溝縁のほぼ床面上	80%
第７図14	土師器 坏	4.4	11.3	－	有稜坏／口縁部は途中に稜をもち外傾する／口縁部と体部との境に稜をもつ／在地系土師器	暗黄褐色	砂粒をやや多く、茶褐色粒子・金雲母を含む	内面：横ナデ、底部のみヘラナデ／外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り後粗いヘラ磨き調整	住居東コーナー：覆土中（床上4cm）	完形品
第７図15	土師器 坏	3.8	12.4	－	有段坏／口縁部は外傾する／口縁部と底部との境に弱い段をもつ／在地系土師器か	暗黄褐色	砂粒を多く、茶褐色粒を含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ／外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り	貯蔵穴覆土中	80%
第７図16	土師器 坏	4.6	12.2	－	有段坏／口縁部は外傾する／口縁部と底部との境に弱い段をもつ／全体に器面の摩耗が見られる／内面及び口縁部外面は赤彩の可能性／在地系土師器か	明橙色を基調	砂粒を多く、茶褐色粒子を僅かに含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ／外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り	住居東コーナー：壁溝縁の床面上	ほぼ完形品
第７図17	土師器 坏	(4.2)	(12.0)	－	有段坏／口縁部は外傾する／口縁部と底部との境に弱い段をもつ／在地系土師器か	明橙色を基調	砂粒を多く、茶褐色粒子・角閃石・金雲母含む	内面：口縁部は横ナデ、以下は横方向のヘラ磨き調整／外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り後粗いヘラ磨き調整	覆土中	口縁部～底部20％
第７図18	土師器 坏	5.0	14.8	7.2	有稜坏／口縁部は大きく外反する／口縁部と体部との境に稜をもつ／平底／在地系土師器	暗黄褐色	砂粒をやや多く、金雲母・小石を含む	内面：横ナデ（回転ナデ）／外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り	貯蔵穴覆土中	70%
第７図19	土師器 坏	7.6	14.0	－	有稜坏／深身タイプ／口縁部は外反する／口縁部と体部の境は稜をもつ／平底気味／在地系土師器	明橙色	砂粒を多く、金雲母をやや多く含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ／外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り	住居東コーナーの覆土中（床上6cm）	ほぼ完形品
第７図20	土師器 甕	17.8	12.3	(7.2)	小型丸甕／口縁部は直立気味／最大径は胴部中位にもつ／平底気味／在地系土師器	暗黄褐色	砂粒を多く、茶褐色粒子・金雲母含む	内面：口縁部は横ナデ、以下ヘラナデ／外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り後粗いヘラ磨き調整か	住居東コーナー：ほぼ床面上及び貯蔵穴から散在的	70%
第７図21	土師器 甕	(28.5)	(28.5)	－	長甕／口縁部は外反する／口唇部は丸い／口縁部と胴部との境は稜をもつ／在地系土師器	暗黄褐色～暗橙色	砂粒を多く、金雲母を含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ／外面：器面の状態が不良、ヘラ削り後ヘラナデか	Ｐ１覆土中	口縁部～胴部中位20％
第７図22	土師器 甕	15.0	(18.0)	－	丸甕／口縁部は大きく外反し、「コ」字状を呈する／最大径は胴部中位にもつ口縁部／在地系土師器	暗黄褐色	砂粒を多く、茶褐色粒子・金雲母を含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ／外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り	カマド左横の覆土中（床上20cm）及びＰ１縁の床面上から散在的	口縁部～胴部中位50％
第７図23	須恵器 高坏	(3.4)	－	－	脚台部で器形は「ハ」字状を呈する／途中２方形に長方形の「すかし窓」が穿たれている／鍋西製品か	淡灰色を基調	石英・白色砂粒を含む	表面にはロクロ目／外面には僅かに自然釉がかかっている	Ｐ１覆土中	脚台部小破片
第７図24	須恵器 甕	－	－	－	胴部／瘤の可能性もあり／産地不明	暗茶褐色を基調	白色砂粒を僅かに含む	内面：ナデ／外面：平行叩き目痕	カマド内	胴部小破片か

（単位：cm）

第３表　121号住居跡出土土器一覧（２）

［構　　造］**平面形**：方形。**規模**：不明。確認面からの深さ１～６㎝。**壁**：ほとんど確認できなかった。**壁溝**：確認できた部分では、巡らされていた。上幅14～20㎝／下幅６～12㎝／深さ４～９㎝。**床面**：硬化面も貼床も確認できなかった。**カマド**：確認できなかった。**貯蔵穴**：確認できなかった。**柱穴**：確認できなかった。

［遺　　物］出土しなかった。

［時　　期］古墳時代後期か。

第３節　中世以降の遺構・遺物

（１）概　要

中世以降の遺構は、土坑12基（103・105～115Ｄ）・井戸跡１基（15Ｗ）・溝跡２本（27・28Ｍ）が検出された。土坑のうち、103Ｄは地下室の形態をもつものである。なお、土坑とした104Ｄについては、隣接する第63地点（尾形・徳留・坂上他　2011）の53号溝跡（53Ｍ）と同一遺構と判断できるため、53Ｍに変更し、104Ｄは欠番とした。また、今回の調査区内から検出されたピットについては、中世以降の遺構と考えられるがピット番号等など詳細記述は省略するものとする。

（２）土　坑

103号土坑

遺　　構（第８図）

［検出状況］27Ｍを切る。

［構　　造］地下室の形態をもつ。**主軸方位**：Ｎ－76°－Ｗ。**入口竪坑部**：開口部の平面形は円形に近く、径約1.7m。坑底部は長方形で長軸1.4m／短軸0.95m／深さ1.7m。主体部への連絡は、10㎝程の段差になっている。**主体部**：天井部は崩落していた。坑底部の平面形は主軸に対して横長の台形を呈する。規模は前壁2.76m／奥壁2.26m／奥行1.7～2.0m。中央付近からは75×60㎝・厚さ５㎝の焼土と炭化物を多く含んだ黒色土が検出された。

［遺　　物］陶磁器、土器、石製品（砥石・石臼）、板碑、瓦、銭貨、鉄滓２点が出土した。

［時　　期］近世（18世紀後半）。

遺　　物（第９・10図、図版７・８－１、第４表）

［陶磁器・土器］（第９図１～30、第４表）

１～３は磁器、４～27は陶器、28～30は土器である。

［石製品］（第９・10図31～33）

31は砥石である。長さ8.4㎝・最大幅4.0㎝・厚さ3.0㎝・重さ115ｇ。使用面は表裏２面で、細かい擦痕が観察できる。側面と表面の下端は成形痕が残っている。石材は凝灰岩である。主体部の覆土中からの出土である。

32・33は石臼の上臼である。32は長さ10.5㎝・最大幅6.3㎝・厚さ4.1㎝・重さ305ｇ。上端部は剥落しており、下端部の臼面にはふくみと目立てあり。側面には成形痕が残る。33は長さ8.8㎝・最大幅7.5㎝・高さ10.1㎝・重さ490ｇ。上端縁部は高さ2.1㎝・最大幅3.8㎝。側面には成形痕が残る。

石材はいずれも安山岩で、主体部の覆土中からの出土である。

［　瓦　］（第10図34～36）

34・35は平瓦の破片である。34は長さ11.0㎝・最大幅7.3㎝・厚さ1.7㎝。35は長さ6.5㎝・最大幅5.7㎝・厚さ2.2㎝。いずれも主体部の覆土中からの出土である。

36は平瓦の破片と思われるが、中央に円形の窪み（径1.6㎝×1.8㎝・深さ1.1㎝）をもち、破片周辺が四角状に面取りされていることから転用製品であろう。用途は不明である。一辺4.9㎝・厚さ2.0㎝・重さ50.5ｇ。主体部の覆土中からの出土である。

［板　　碑］（図版８－１－37・38）

37・38は板碑の破片である。39は長さ14.0㎝・最大幅10.2㎝・厚さ1.1㎝・重さ344ｇ。40は長さ10.2　㎝・最大幅6.5㎝・厚さ1.0㎝重さ140ｇ。いずれも石材は緑色片岩で、主体部の覆土中からの出土である。

［銭　　貨］（第10図39）

39は銭貨で、洪武通宝である。外径2.4㎝・方孔一辺0.6㎝・重さ2.8ｇ。初鋳年は1368年（明洪武元年）。完形品。主体部の覆土中からの出土である。

［そ の 他］（図版８－１－40・41）

40・41は鉄滓である。40の重さ120ｇ。41の重さ65ｇ。主体部の覆土中からの出土である。

105号土坑

遺　　構（第８図）

［検出状況］27と28Ｍの中間の傾斜部分からの検出である。

［構　　造］**平面形**：ほぼ円形。**規模**：径約0.9m／深さ13㎝。**壁**：傾斜角度は約40°。

［覆　　土］ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む暗茶褐色土を基調とする。

［遺　　物］出土しなかった。

［時　　期］覆土の観察から中世以降と考えられる。

106号土坑

遺　　構（第８図）

［検出状況］15Ｗを切る。

［構　　造］**平面形**：楕円形。**規模**：上部は、長軸1.45ｍ／短軸1.14m。坑底部は一辺45㎝の方形を呈する。深さ1.35㎝。**壁**：西側の傾斜角度は約50°で、東側は袋状に30㎝程奥に延びている。**長軸方位**：Ｎ－60°－Ｗ。

［覆　　土］ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む暗茶褐色土を基調とする。

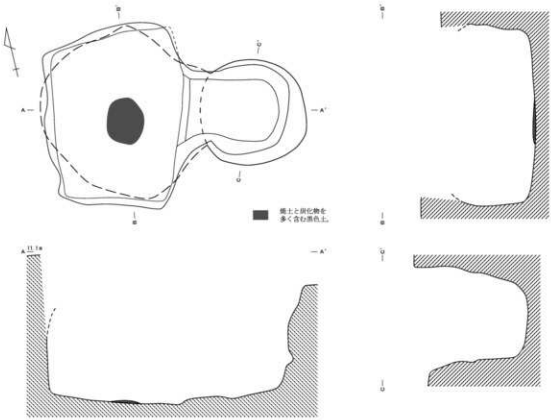
［遺　　物］出土しなかった。

［時　　期］覆土の観察から中世以降と考えられる。

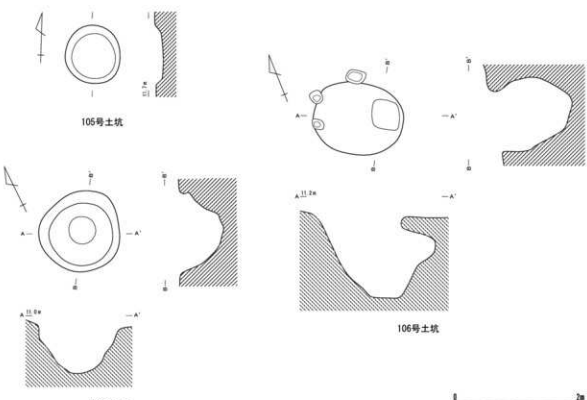
107号土坑

遺　　構（第８図）

［検出状況］53Ｍの硬化面下からの検出である。53Ｍに切られる。



103号土坑

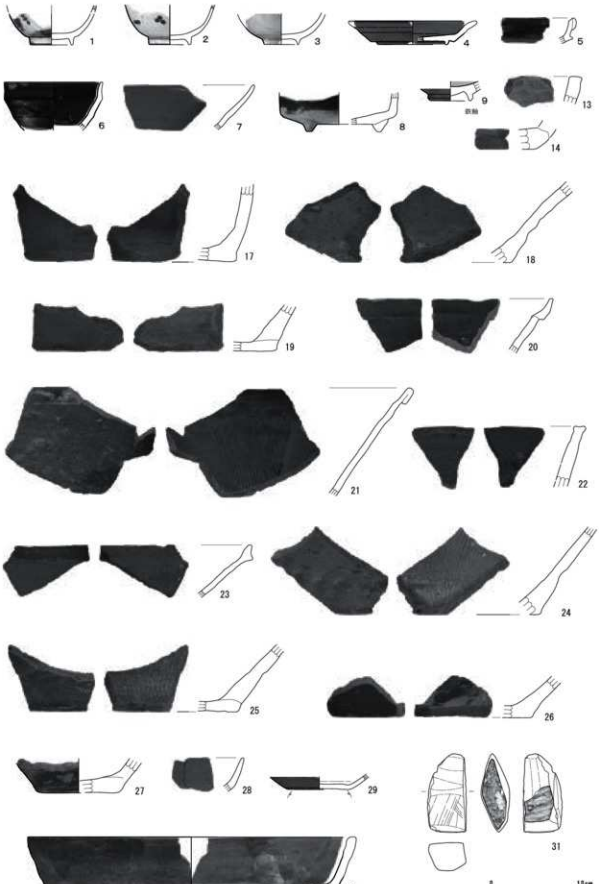


105号土坑

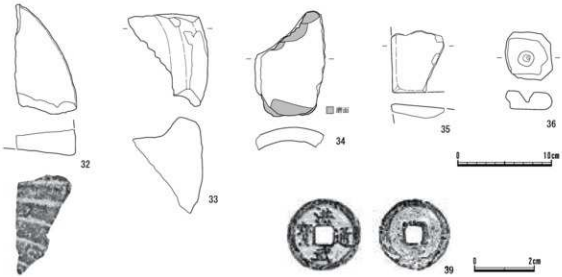
106号土坑

107号土坑

第８図　土坑１（1／60）



第９図　103号土坑出土遺物１（1／4）



第10図　103号土坑出土遺物２（1／4・4／5）

［構　　造］**平面形**：不整な円形。**規模**：径約1.3m／深さ70㎝。**壁**：傾斜角度は約65°。

［覆　　土］ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む暗茶褐色土を基調とする。

［遺　　物］出土しなかった。

［時　　期］覆土の観察から中世以降と考えられる。

108号－Ａ土坑

遺　　構（第11図）

［検出状況］121H・122H・180D－B・Cを切る。

［構　　造］**平面形**：長方形。**規模**：長軸4.9ｍ／短軸1.35m／深さ50㎝前後。坑底面の中央部は一段低くなっており、深さ60㎝前後を測る。**壁**：ほぼ垂直に立ち上がる。**長軸方位**：Ｎ－82°－Ｗ。

［覆　　土］ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む暗茶褐色土を基調とする。Ｂより明色。

［遺　　物］出土しなかった。

［時　　期］覆土の観察から近世以降と考えられる。

108号－Ｂ土坑

遺　　構（第11図）

［検出状況］121H・122Hを切り、180D－Ａに切られる。

［構　　造］**平面形**：長方形。**規模**：長軸3.35ｍ／短軸不明／深さ30㎝前後。**壁**：ほぼ垂直に立ち上がる。**長軸方位**：Ｅ－Ｗ。

［覆　　土］ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む暗茶褐色土を基調とする。

［遺　　物］出土しなかった。

［時　　期］覆土の観察から近世以降と考えられる。

108号－Ｃ土坑

遺　構（第11図）

［検出状況］121H・122Hを切り、180D－Ａに切られる。

［構　造］**平面形**：長方形。**規模**：長軸不明／短軸1.1m／深さ40㎝前後。**壁**：ほぼ垂直に立ち上がる。**長軸方位**：Ｎ－20°－Ｅ。

［覆　土］ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む明茶褐色土を基調とする。

［遺　物］出土しなかった。

［時　期］覆土の観察から近世以降と考えられる。

108号－Ｄ土坑

遺　構（第11図）

［検出状況］121H・122Hを切り、180D－Ａ・Ｂに切られる。

［構　造］**平面形**：方形。**規模**：長軸不明／短軸1.2ｍ／確認面からの深さ30㎝。**壁**：ほぼ垂直に立ち上がる。

［遺　物］出土しなかった。

［時　期］覆土の観察から近世以降と考えられる。

109号土坑

遺　構（第11図）

［検出状況］27Ｍを切る。

［構　造］**平面形**：長方形。**規模**：長軸4.3ｍ／短軸0.9ｍ／深さ57～79㎝。**壁**：ほぼ垂直に立ち上がる。**長軸方位**：Ｎ－10°－Ｅ。

［覆　土］ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む暗黄褐色土を基調とする。

［遺　物］板碑１点が出土した。

［時　期］覆土の観察から近世以降と考えられる。

遺　物（第13図１）

［板　碑］（第13図１）

１は板碑の破片である。長さ18.6㎝・最大幅12.7㎝・厚さ2.6㎝・重さ712ｇ。頭部は三角形状を呈し、その下方には横方向に二線が切り込まれている。種子の阿弥陀種子（キリーク）の一部が残っている。石材は緑色片岩で、覆土中からの出土である。

110号土坑

遺　構（第11図）

［検出状況］28Ｍに切られる。調査区の南東隅から一部のみの検出であるため、詳細は不明である。

［構　造］**平面形**：不整形。**規模**：不明／確認できた深さ59㎝。**壁**：緩やかに立ち上がる。

［覆　土］９層に分層できた。

［遺　物］陶器・土器が出土した。

［時　期］中・近世（17世紀前半か）。

遺　　物（第13図４、図版８－４、第４表）

［陶器・土器］（図版８－４－１～５・第４表）

１～３は陶器、４・５は土器である。

111号土坑

遺　　構（第12図）

［検出状況］112Dを切る。

［構　　造］**平面形**：長方形。**規模**：長軸3.05ｍ／短軸0.8ｍ／深さ60㎝前後。中央部は一段低くなっており、深さ75㎝。**壁**：東・西壁はほぼ垂直、南・北壁は袋状に立ち上がる。**長軸方位**：Ｎ－80°－Ｗ。

［覆　　土］土層なし。

［遺　　物］陶器、鉄製品（釘）が出土した。

［時　　期］覆土の観察から近世以降と考えられる。

遺　　物（第13図２、図版８－３、第４表）

［陶　　器］（図版８－３－１、第４表）

１は陶器である。

［鉄 製 品］（第13図２、図版８－３－２）

２は釘の破片である。断面は長方形で、上端部は欠損する。長さ3.5㎝・最大幅0.7㎝・重さ2.4ｇ。

112号土坑

遺　　構（第12図）

［検出状況］111Dに切られる。

［構　　造］**平面形**：長方形。**規模**：長軸不明／短軸0.6ｍ／深さ20～30㎝。**壁**：ほぼ垂直に立ち上がる。**長軸方位**：Ｎ－Ｓ。

［覆　　土］土層なし。

［遺　　物］出土しなかった。

［時　　期］覆土の観察から近世以降と考えられる。

113号土坑

遺　　構（第12図）

［検出状況］

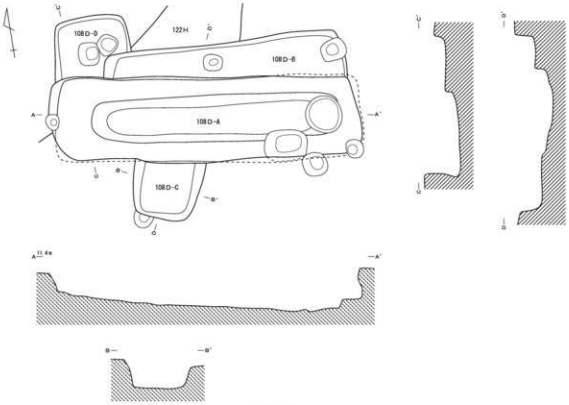
［構　　造］**平面形**：長方形。**規模**：長軸1.87ｍ／短軸56ｍ／深さ26㎝。**壁**：傾斜角度は70°。**長軸方位**：Ｎ－Ｓ。

［遺　　物］出土しなかった。

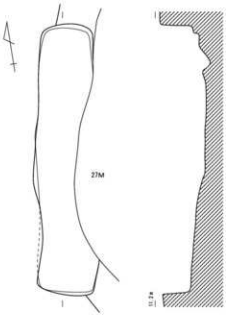
［時　　期］覆土の観察から近世以降と考えられる。

114号土坑

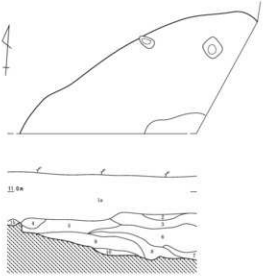
遺　　構（第12図）



108号土坑



109号土坑

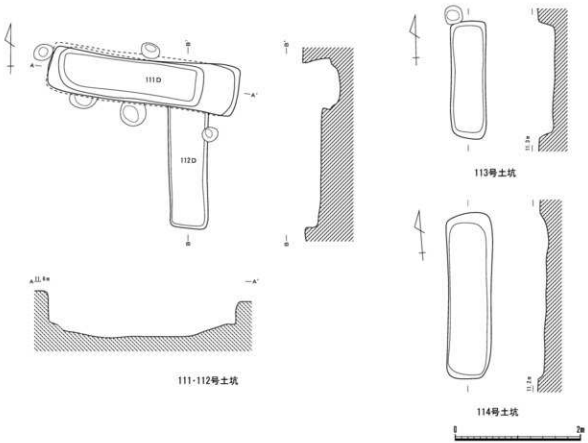


1a層　表土。
1b層　28M盛土。
2層　暗褐色土　ローム粒子を含む。
3層　暗黄褐色土　ローム粒子・ローム小ブロックを多く、小石を含む。
4層　暗褐色土　ローム粒子・ローム小ブロックを含む。
5層　黄褐色土　ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。
6層　暗褐色土　ローム粒子・小石を僅かに含む。
7層　暗黄褐色土　ローム粒子を僅かに含む。
8層　暗黄褐色土　ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。
9層　黒褐色土　ローム粒子・ローム小ブロックを僅かに含む。
10層　暗黄褐色土　ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。

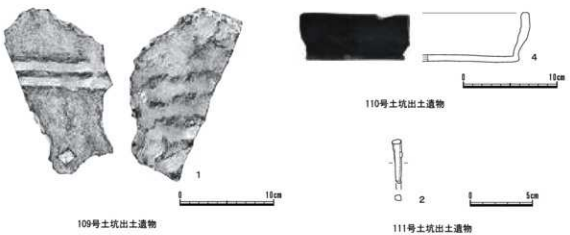
110号土坑

0　2m

第11図　土坑2（1／60）



第12図　土坑3（1／60）



第13図　109～111号土坑出土遺物（1／4・1／3）

［検出状況］

［構　　造］平面形：長方形。規模：長軸2.62ｍ／短軸0.73ｍ／深さ10㎝前後。壁：緩やかに立ち上がる。長軸方位：Ｎ－６°－Ｅ。

［遺　　物］出土しなかった。

［時　　期］覆土の観察から近世以降と考えられる。

115号土坑

遺　　構（第４図）

［検出状況］121 Hを切る。ほとんどが調査区域外のため詳細は不明である。

［構　　造］**平面形：**方形か。**規模：**不明／深さ 95㎝。**壁：**ほぼ垂直に立ち上がる。

［覆　　土］６層に分層できた。

［遺　　物］出土しなかった。

［時　　期］覆土の観察から近世以降と考えられる。

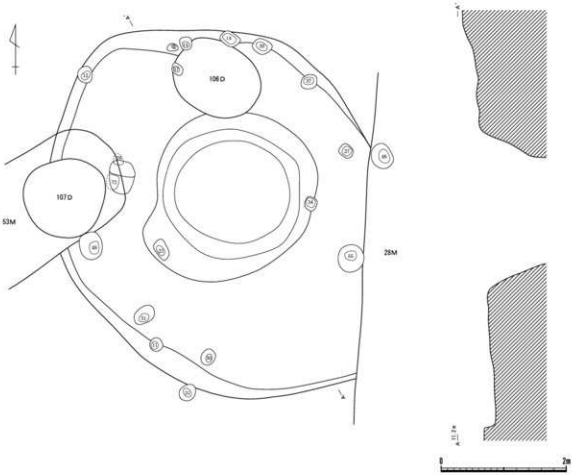
（２）井戸跡

15号井戸跡

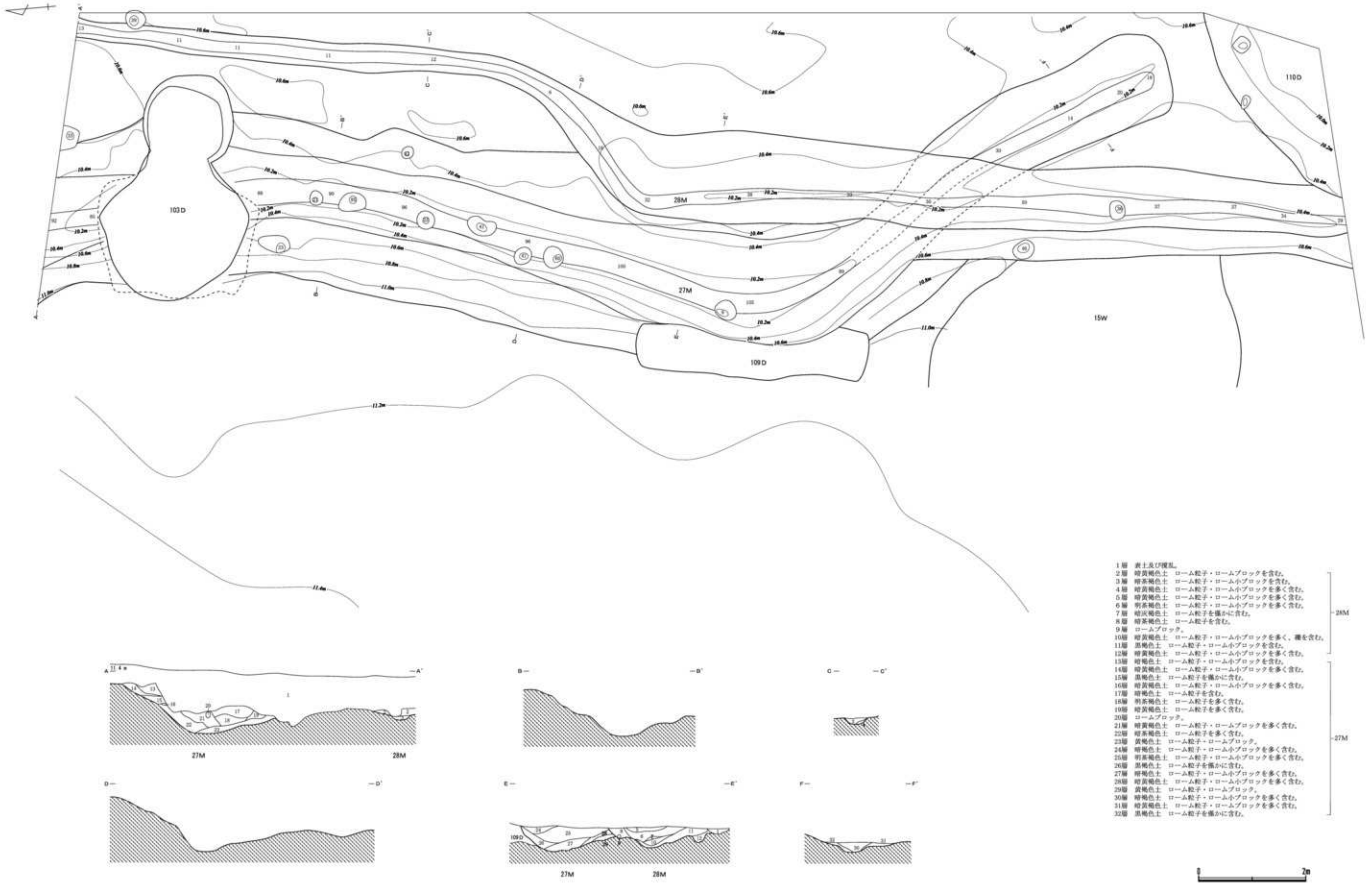
遺　　構（第14図）

［検出状況］28・53M、106・107Dに切られる。危険防止のため、1．２m程で掘り下げを中止した。

［構　　造］**平面形：**円形。**断面形：**漏斗状。**規模：**開口部径約2.6m。周囲には6.7×5.2m、深さ 20㎝前後の楕円形の掘り込みがあり、そこに礫・砂・粘土を含む黄褐色土を敷き詰めている状態であった。ピットは伴うか不明であるが、一応深さを入れた。



第14図　15号井戸跡（1／60）



第15図　27・28号溝跡（1／70）

［遺　　物］陶器・土器の破片が僅かに出土した。

［時　　期］中世（15～16世紀）。

遺　　物（図版９－１、第４表）

［陶器・土器］（図版９－１－１・２、第４表）

１は陶器、２は土器である。

（３）溝　跡

27号溝跡

遺　　構（第15図）

［検出状況］103Ｄ・109Ｄ・28Ｍに切られる。

［構　　造］調査区北側から直線的に伸びているが、13ｍ付近から南東に方向を変え９ｍ程先で途切れている。**規模**：調査区内で確認できた長さは22.2ｍ、上幅1.5～3.5ｍ／下幅25～40㎝／遺構確認面からの深さ30～105㎝。溝底の標高は調査区北端が10.25ｍとやや高いがそれ以外は10.15～10.18ｍである。**走行方位**：調査区北側がＮ－10°－Ｅ、南側がＮ－25°－Ｗ。

［覆　　土］20層に分層できた。

［遺　　物］陶磁器・土器が出土した。

［時　　期］中世（16世紀後半）。

遺　　物（第16図、図版９－２、第４表）

［陶磁器・土器］（第16図３・４・８・13、図版９－２－１～13、第４表）

１・２は磁器、３～11は陶器、12・13は土器である。

28号溝跡

遺　　構（第15図）

［検出状況］103Ｄに切られ、110Ｄ・15Ｗ・27Ｍを切る。

［構　　造］調査区北側から南側に延びている。**規模**：調査区内で確認できた長さは24.7ｍ、上幅0.4～1.7ｍ／下幅15～35㎝／遺構確認面からの深さ12～50㎝。溝底の標高は調査区北側が10.42～10.48ｍ、中央付近はやや低くなり10.2～10.24ｍ、南側は10.4ｍ前後である。**走行方位**：Ｎ－10°－Ｅ、中央付近はＮ－56°－Ｅの角度で３ｍ程屈曲している。

第16図　27号溝跡出土遺物（1／4）

［覆　　土］11層に分層できた。

［遺　　物］陶器２点が出土した。

［時　　期］近世以降か。

遺　　物（図版９－３、第４表）

［陶　　器］（図版９－３－１・２、第４表）

１・２は陶器である。

53号溝跡

遺　　構（第17図）

［検出状況］107D・15Wを切る。本遺構は、当初104号土坑（104 D）として扱っていたが、隣接する第63地点（尾形・徳留・坂上・青池他　2011）の調査で確認された53Mの東側部と判明したため、溝跡として報告することにした。

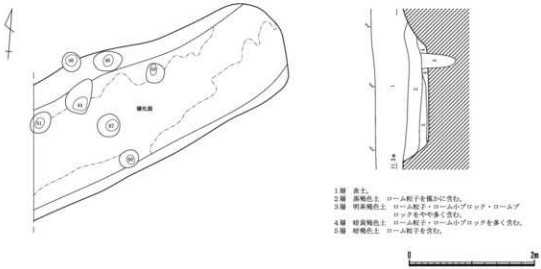
［構　　造］15Wの周囲の掘り込み内で途切れていた。**規模**：調査区内で確認できた長さは4.6 m、上幅1.65～1.95 m／下幅1.3～1.45 m／深さ26～36㎝。溝底の標高は10.9 m前後である。**断面形**：箱薬研形を呈する。**硬化面**：溝底の図示した部分が、硬化していた。**走行方位**：N－60°－E。

［覆　　土］４層に分層できた。

［遺　　物］今回の調査では出土しなかった。

［時　　期］近世（18世紀中葉）。

［所　　見］今回の調査では出土遺物がなかったため、時期の特定は難しいが、第63地点の調査では、陶器２点・土器１点が出土し、時期を近世（18世紀中葉）に比定している。



第17図　53号溝跡（1／60）

（　）は現存値及び推定値

図版番号	遺構名	種別	器種	法量			製作の特徴等	推定産地	時期
				器高	口径	底径			
第11図1	103 D	磁器	碗	(4.2)	－	(4.4)	染付碗／外面：風景文／高台／遺存度：体部中位～底部70％	肥前系	18c後半
第11図2	103 D	磁器	碗	(4.2)	－	(4.4)	染付碗／外面に草花文／高台／高台直上に二条線／遺存度：体部中位～底部60％	肥前系	18c後半
第11図3	103 D	磁器	碗	(3.3)	－	(3.6)	高台／高台直上に二条線／遺存度：体部下半～底部30％	肥前系	18c後半
第11図4	103 D	陶器	皿	2.5	(13.6)	(7.4)	内外面灰釉／削り出し高台／ロクロ成形／見込み に胎土目／胎土の色調は灰白色／胎土には砂粒を僅かに含む／遺存度：20％	瀬戸	17c前半
第11図5	103 D	陶器	香炉	(2.7)	－	－	口縁部内外面は鉄釉／ロクロ成形／胎土の色調は灰白色／胎土は精錬されている／口縁部～体部破片	瀬戸	16c後半
第11図6	103 D	陶器	天目茶碗	(5.1)	(10.4)	－	上手／外面底部を除き鉄釉／口唇部は短く外反する／頸部に被あり／ロクロ成形／胎土の色調は灰白色／胎土には黒色粒子・砂粒を僅かに含む／遺存度：口縁部～体部下半30％／中国製の可能性	瀬戸か	15～16c
第11図7	103 D	陶器	鉢	(5.7)	－	－	内外面灰釉／ロクロ成形／胎土の色調は灰白色／胎土は精錬されている／口縁部～体部下半破片	瀬戸か	15～16c
第11図8	103 D	陶器	香炉	(4.2)	－	(12.2)	外面体部は鉄釉／底部に三足貼付け／ロクロ成形／胎土の色調は灰白色／胎土は精錬されている／遺存度：体部下半～底部40％	瀬戸	16c後半
第11図9	103 D	陶器	碗	(2.1)	－	(4.4)	内面は鉄釉／高台あり／ロクロ成形／胎土の色調は茶褐色／胎土に砂粒を僅かに含む／遺存度：体部下半～底部60％／志戸呂の可能性	唐津か	16c前半
図版7－10	103 D	陶器	鉢	－	－	－	内外面灰釉／内面に鉄絵／ロクロ成形／胎土の色調は淡茶褐色／胎土に砂粒・小石を僅かに含む／体部下半小破片	唐津	17c前半
図版7－11	103 D	陶器	鉢	(1.6)	－	－	内外面灰釉／内面に鉄絵／ロクロ成形／胎土の色調は淡黄色／胎土は精錬されている／体部下半～底部破片	瀬戸	16c後半
第11図12	103 D	陶器	皿	(1.0)			外面底部を除き灰釉／ロクロ成形／胎土の色調は淡黄色／胎土は精錬されている／遺存度：底部50％	瀬戸	17c前半
第11図13	103 D	土器	鉢	(3.0)	－	－	口唇部は平坦に面取り／胎土の色調は淡橙色／胎土に砂粒・小石を含む／口縁部小破片	在地系	16～17c前半
第11図14	103 D	土器	不明品	－	－	－	色調は暗橙色／胎土に砂粒をやや多く、角閃石・小石を僅かに含む／底部小破片	在地系	不明
図版7－15	103 D	陶器	甕	－	－	－	色調は灰褐色／胎土に砂粒・小石を含む／胴部小破片	常滑	16c
図版7－16	103 D	陶器	甕	－	－	－	色調は灰色／胎土に砂粒を含む／外面に格子目タタキ／胴部小破片／須恵器の可能性	？	不明
第11図17	103 D	陶器	甕	(8.2)	－	－	平底／色調は暗橙色／胎土に白色砂粒をやや多く、石英・小石を僅かに含む／外面胴部下半には指頭による成形痕あり／遺存度：胴部下半～底部20％	常滑	16c
第11図18	103 D	陶器	甕	(8.5)	－	－	平底／外面鉄釉／胎土の色調は淡茶褐色／胎土に白色砂粒を多く、石英・小石を含む／胴部下半～底部破片	常滑	16c

（単位：cm）

第４表　土坑・井戸跡・溝跡出土の陶磁器・土器一覧（１）

（　）は現存値及び推定値

図版番号	遺構名	種別	器種	法量			製作の特徴等	推定産地	時期
				器高	口径	底径			
第11図19	103 D	陶器	甕	(4.7)	－	－	平底／色調は淡茶褐色／胎土に白色砂粒を多く、石英・小石を含む／遺存度：胴部下半～底部破片20％	常滑	16～17c前半
第11図20	103 D	陶器	擂鉢	(4.7)	－	－	複合口縁／内外面鉄釉／胎土の色調は淡黄色／胎土は精錬されている／口縁部～胴部破片	瀬戸	16～17c前半
第11図21	103 D	陶器	擂鉢	(11.4)	－	－	複合口縁／内外面鉄釉／櫛目は16本一単位／櫛目施文は右回り／胎土の色調は淡黄色／胎土に白色砂粒を僅かに含む／遺存度：口縁部～胴部下半15％	瀬戸	16c後半
第11図22	103 D	陶器	鉢	(6.6)	－	－	口縁部は平坦に面取りされ、口唇部はやや窪む／内外面鉄釉／胎土の色調は暗灰褐色／胎土に白色砂粒をやや多く、石英・小石を僅かに含む／口縁部破片	常滑	16c後半
第11図23	103 D	陶器	擂鉢	(5.6)	－	－	複合口縁／内外面鉄釉／櫛目は7本一単位／櫛目施文は格子目条／胎土の色調は暗茶褐色／胎土に石英・砂粒をやや多く含む／口縁部～胴部上半破片	信楽系？	16c
第11図24	103 D	陶器	擂鉢	(9.0)	－	－	内外面鉄釉／櫛目は8本一単位／櫛目施文は左回り／外面胴部下半に指頭による成形痕が残る／胎土の色調は暗茶褐色／胎土に石英・砂粒をやや多く含む／胴部下半～底部破片	瀬戸	16～17c前半
第11図25	103 D	陶器	擂鉢	(7.1)	－	－	内外面鉄釉／櫛目は7本一単位／櫛目施文は左回り／外面胴部下半に指頭による成形痕が残る／胎土の色調は暗茶褐色／胎土に石英・砂粒をやや多く含む／胴部下半～底部破片	瀬戸	17c前半
第11図26	103 D	陶器	擂鉢	(4.4)	－	(9.3)	内外面鉄釉／櫛目は8本一単位／櫛目施文は右回り／胎土の色調は淡橙色／胎土は精錬されている／胴部下半～底部30％	不明	17c
第11図27	103 D	陶器	擂鉢	(7.1)	－	－	平底／内外面鉄釉／櫛目は7本一単位／櫛目施文は格子目条／胎土の色調は暗茶褐色／胎土に石英・砂粒をやや多く含む／遺存度：胴部下半～底部	瀬戸	17c
第11図28	103 D	土器	かわらけ	(3.6)	－	－	色調は淡黄褐色／胎土に砂粒をやや多く、茶褐色粒子を含む／口縁部～体部下半破片	在地系	15～16c
第11図29	103 D	土器	かわらけ	(1.7)	－	6.4	色調は淡黄橙色／胎土に角閃石・茶褐色粒子・砂粒を含む／遺存度：体部下半～底部70％	在地系	18c
第11図30	103 D	土器	焙烙	6.7	(35.0)	(31.5)	内耳1か所あり／内外面全体が黒く煤けている／胴部下半に指頭による成形痕が残る／体部胎土の色調は淡茶褐色／胎土に砂粒を含む／遺存度：15％	在地系	16c後半～17c前半
図版8－4－1	110 D	陶器	皿	－	－	－	志野釉／胎土の色調は白色／胎土は精錬されている／口縁部小破片	瀬戸	17c前半
図版8－4－2	110 D	陶器	鉢	－	－	－	内外面鉄釉／内面に印刻文様／胎土の色調は明茶褐色／胎土は精錬されている／口縁部小破片／三島唐津	唐津	17c前半
図版8－4－3	110 D	陶器	擂鉢	－	－	－	口唇部は面取りされ平坦／内外面鉄釉／胎土の色調は暗黄褐色／胎土は精錬されている／口縁部小破片	瀬戸	不明
第13図4 図版8－4－4	110 D	土器	焙烙	5.3	(42.0)	(40.0)	内耳1か所あり／内外面は黒く煤けている／口縁部がやや肥厚／胎土の色調は内部黒色、表面淡茶褐色のサンドイッチ構造／内面には角閃石・砂粒を僅かに含む／外面体部下半には指頭による成形痕が残る／遺存度：15％	在地系	17c

（単位：cm）

第４表　土坑・井戸跡・溝跡出土の陶磁器・土器一覧（２）

（　）は現存値及び推定値

図版番号	遺構名	種別	器種	法量			製作の特徴等	推定産地	時期
				胴高	口径	底径			
図版8−4−5	110 D	土器	焙烙	−	−	−	平底／内外面は黒く煤けている／胎土の色調は淡黄褐色／内面には角閃石・砂粒を僅かに含む／底部小破片	在地系	不明
図版8−3−1	111 D	陶器	甕	−	−	−	胴部破片／外面に鉄釉／内面に自然釉が被覆／胎土の色調は灰色／胎土に石英・砂粒・小石を含む／胴部破片	常滑	不明
図版9−1−1	15 W	陶器	甕	−	−	−	外面鉄釉／自然釉が被覆／胎土の色調は灰色／胎土に石英・砂粒・小石を含む／頸部～胴部上半の破片	常滑	15c
図版9−1−2	15 W	土器	捏鉢	−	−	−	底部？／色調は淡茶褐色／胎土には白色砂粒を含む／	在地系	16c
図版9−2−1	27 M	磁器	碗	−	−	−	染付碗／外面に文様／体部小破片	肥前系	18c後半
図版9−2−2	27 M	磁器	碗	−	−	−	コンニャク判／体部小破片	肥前系	19c
図版16図3 図版9−2−3	27 M	陶器	土鍋	(2.5)	(10.4)	−	口縁部に把手／内外面鉄釉／胎土の色調は黒褐色／胎土は精錬されている／口縁部破片	不明	19c
図版16図4 図版9−2−4	27 M	陶器	碗	(5.3)	−	−	外面底部を除き灰釉／胎土の色調は白色／胎土に砂粒を僅かに含む／遺存度：口縁部～体部下半15％	瀬戸	16c後半
図版9−2−5	27 M	陶器	皿	(2.0)	−	−	口縁部破片／外面口縁部及び内面に鉄釉／胎土の色調は灰色／胎土は精錬されている／口縁部小破片／6と同一個体	志戸呂？	16c後半
図版9−2−6	27 M	陶器	皿	(1.8)	−	−	高台／内外面口縁部に鉄釉／胎土の色調は灰色／胎土は精錬されている／体部～底部破片／5と同一個体	志戸呂？	16c後半
図版9−2−7	27 M	陶器	擂鉢	(2.2)	−	−	口縁部は複合口縁／口唇部は平坦に面取り／内外面鉄釉／胎土の色調は灰白色／胎土に石英・白色砂粒を含む／口縁部小破片	信楽系？	18c
図版16図8 図版9−2−8	27 M	陶器	皿	(3.2)	−	(11.0)	高台／外面底部を除き鉄釉／内面に印刻文様／胎土の色調は灰褐色／胎土に精錬されている／遺存度：底部20％／三島唐津	唐津	17c
図版9−2−9	27 M	陶器	擂鉢	−	−	−	内外面鉄釉／櫛目は９本一単位／櫛目施文は左回り／胎土の色調は明茶褐色／胎土に白色砂粒・小石を含む／胴部小破片	備前系	不明
図版9−2−10	27 M	陶器	甕	−	−	−	外面鉄釉／胎土の色調は淡茶褐色／胎土に白色砂粒を含む／胴部小破片	常滑	16～18c
図版9−2−11	27 M	陶器	甕	−	−	−	外面鉄釉／胎土の色調は淡茶褐色／胎土に石英・砂粒を含む／胴部破片	常滑	16c
図版9−2−12	27 M	土器	かわらけ	−	−	−	色調は淡黄褐色／胎土に茶褐色粒子を含む／口縁部小破片	在地系	不明
図版16図13 図版9−2−13	27 M	土器	焙烙	5.5	(39.6)	(37.0)	内耳は２か所あり／内面底部を除き全体に黒く煤けている／外面には指頭による成形痕が顕著に残る／胎土の色調は黄白色を基調／胎土に砂粒を僅かに含む	在地系	16c後半～17c前半
図版9−3−1	28 M	陶器	擂鉢	−	−	−	内外面鉄釉／胎土の色調は淡黄褐色／胎土は精錬されている／櫛目は単位不明、右回りに施文／胴部小破片	瀬戸	不明
図版9−3−2	28 M	陶器	鉢	−	−	−	内外面鉄釉／胎土の色調は淡黄褐色／胎土は精錬されている／櫛目は単位不明、右回りに施文／胴部小破片	瀬戸	不明

（単位：cm）

第４表　土坑・井戸跡・溝跡出土の陶磁器・土器一覧（３）

第４節　遺構外出土遺物

ここでは、表土や攪乱から出土した遺物、そして遺構内であるが、明らかに他時期の混入品である遺物を前節までの各時代の出土遺物と区別し、遺構外出土遺物として扱う。

今回、遺構外出土遺物としては、縄文時代の石器、縄文時代の遺物、中世以降の遺物に分類する。

（１）縄文時代の石器（第18図１～９、第５表）

１・４・５は剥片、２・３は微細剥離痕のある剥片、６・７は打製石斧、８・９は石皿である。石材は１～４が黒曜石、５が頁岩、６・７が砂岩、８が閃緑岩、９が花崗岩である。

（２）縄文時代の土器（第19図10～21、第６表）

10～13は前期の土器である。10は羽状縄文系土器で縄文地文のみの胴部破片で、11・12は諸磯式、13は浮島式と思われる破片である。

14～19は中期の土器である。14～16が勝坂式、17・18が阿玉台式、19が加曽利ＥⅣ式である。

20・21は後期と思われるが、型式等の詳細は不明である。

（３）中世以降の遺物（第19図35、図版10－22～35、第７表）

[陶磁器・土器]（図版10－22～34、第７表）

22～30は 陶器、31～34は土器である。

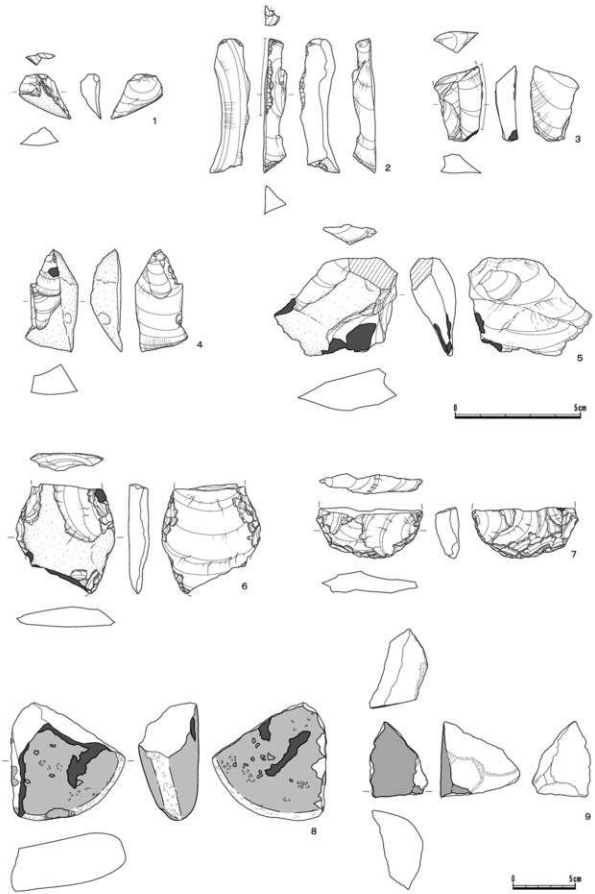
[鉄製品]（第19図35）

35は釘の破片と思われる。断面は長方形で、下端部は欠損する。長さ3.2㎝・最大幅0.7㎝・重さ3.3ｇで、遺構外からの出土である。

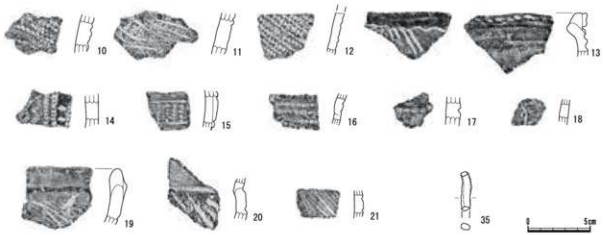
挿図番号	器　種	石　材	長さ	幅	厚さ	重量	特　　徴	出土位置
第18図1	剥　片	黒曜石	17.79	20.54	8.11	1.43	表面に原礫面が広く残置／打面は単剥離面	121H
第18図2	微細剥離痕のある剥片	黒曜石	53.20	9.39	15.86	4.72	断面形状は三角形／大型剥片の末端部を剥離したものか	121H
第18図3	微細剥離痕のある剥片	黒曜石	29.95	19.24	8.99	3.84	上部欠損／右側縁に微細剥離痕	遺構外
第18図4	剥　片	黒曜石	40.65	20.75	12.53	7.74	表面に原礫面が広く残置	15W
第18図5	剥　片	頁岩	39.10	48.87	18.05	24.66	表面に原礫面／節理面が広く残置／打面は単剥離面	27M
第18図6	打製石斧	砂岩	87.29	78.38	16.34	130.57	基部・刃部を欠損／扁平な大型の縦長剥片を素材	103Ｄ（主体部）
第18図7	打製石斧	砂岩	40.45	84.18	18.76	64.17	刃部破片／不規則な剥離が見られる	遺構外
第18図8	石　皿	閃緑岩	93.56	90.69	47.87	458.09	磨石の可能性もあり／表裏面に磨面／左側面にも磨耗面／石皿の破損後に再利用の可能性／側縁に敲打痕	103Ｄ（主体部）
第18図9	石　皿	花崗岩	60.14	46.20	63.12	131.94	石皿の破片／表面に顕著な磨面あり／右側面に棱上敲打痕が見られる	103Ｄ（主体部）

（単位：mm・g）

第５表　遺構外出土の石器一覧



第18図　遺構外出土遺物１（2／3・1／3）



第19図　遺構外出土遺物２（1／3）

挿図番号	部位	文様・特徴など	色調	時期・型式	胎土混入物					出土位置	備　考
					石	角	礫	砂	他		
第19図10	胴	縄文RL	にぶい赤褐 5YR5/4	羽状縄文系				○	繊	121H	
第19図11	胴	縄文LR／半裁竹管による平行沈線文	にぶい褐 7.5YR6/3	諸磯b		○		○		103D	
第19図12	胴	縄文RL	にぶい橙 5YR6/4	諸磯？	○			○	片	104D	砥石に付く
第19図13	口縁	口唇部上面にR縄による圧痕／肥厚した口唇部直下に鋸歯状の沈線文／斜位の沈線文	明赤褐 2.5YR5/6	中期初頭～前葉	○				雲	121H	
第19図14	胴	刻みを持つ隆帯に沿う２条の結節沈線文／鋸歯状の結節沈線文	にぶい赤褐 5YR5/3	勝坂				○		15W	
第19図15	胴	平行沈線による区画内に結節沈線文	にぶい橙 7.5YR6/4	勝坂				○		遺構外	裏面の剥離著しい
第19図16	胴	結節沈線文	にぶい黄橙 10YR6/4	前期末葉				○		遺構外	内面は黒褐色
第19図17	胴	結節沈線文	明赤褐 2.5YR5/6	阿玉台	○			○	雲	121H	
第19図18	胴	沈線文	明赤褐 2.5YR5/6	阿玉台	○			○	金	遺構外	
第19図19	口縁	縄文LR／微隆起線区画による口縁部無文帯	にぶい橙 7.5YR7/4	加曽利EⅣ				○		遺構外	
第19図20	胴	沈線区画下を沈線文充填	灰褐 7.5YR5/5	後期中～後葉		○		○		遺構外	
第19図21	胴	斜位の沈線文	にぶい赤褐 2.5YR5/4	後期				○		121H	

※ 石：石英　角：角閃石・輝石　礫：礫礫　砂：砂粒　繊：繊維　片：片岩　雲：雲母　金：金雲母

第６表　遺構外出土の縄文土器一覧

（　）は現存値

図版番号	種別	器種	法量			製作の特徴等	推定産地	出土位置	時期
			器高	口径	底径				
図版10－22	磁器	碗	－	－	－	胎土は精練されている／体部小破片	肥前系	遺構外	18c
図版10－23	磁器	碗	－	－	－	胎土は精練されている／体部小破片	肥前系	遺構外	18c
図版10－24	磁器	碗	－	－	－	胎土は精練されている／体部～底部小破片	肥前系	遺構外	18c
図版10－25	陶器	皿	(2.5)	－	－	志野釉／胎土は黒褐色／胎土は精練されている／口縁部小破片	瀬戸	遺構外	17c後半
図版10－26	陶器	皿	－	－	－	内外面底部を除き灰釉／胎土の色調は淡黄褐色／胎土には砂粒・小石を僅かに含む／体部下半～底部破片	瀬戸	遺構外	15c後半
図版10－27	陶器	皿	(2.0)	－	－	外面底部を除き灰釉／胎土の色調は淡黄褐色／胎土には砂粒を僅かに含む／外面底部に糸切り痕が残る／体部下半～底部破片	瀬戸	121H	15c後半
図版10－28	陶器	甕	－	－	－	鉄釉／胎土の色調は灰褐色／胎土に砂粒を僅かに含む／外面に平行叩き目痕あり／内面はナデ／胴部破片	常滑	遺構外	16c
図版10－29	陶器	甕	－	－	－	鉄釉／胎土の色調は灰褐色／胎土に石英・砂粒・小石を含む／外面は平行叩き後ナデ／内面はナデ／胴部破片	常滑	遺構外	15c前半
図版10－30	陶器	甕	(4.0)	－	－	平底／色調は暗茶褐色を基調／胎土に砂粒・小石を含む／外面にハケ目状の細かい成形痕あり／遺存度：胴部下半～底部20％／須恵器の可能性あり	不明	121H	不明
図版10－31	土器	甕	－	－	－	色調は赤褐色／胎土には石英・白色砂粒を含む／内外面ナデ／胴部下半破片	常滑	遺構外	17c
図版10－32	土器	火鉢	－	－	－	口唇部は平坦／外面口縁部直下にスタンプ文（雷文）が横位に連続して施文される／色調は淡黄褐色／胎土には砂粒を含む／口縁部破片	在地系	遺構外	15c
図版10－33	土器	火鉢	－	－	－	外面にスタンプ文（菊花文）が施文される／色調は淡茶褐色／胎土に砂粒・小石を僅かに含む／胴部小破片	在地系	遺構外	不明
図版10－34	土器	焙烙	－	－	－	平底／胎土の色調は内部が黒色、表層部が淡褐色のサンドイッチ構造／底部小破片	在地系	遺構外	不明

（単位：cm）

第７表　遺構外出土の陶磁器・土器一覧

第３章　城山遺跡第28地点の調査

第１節　調査の経緯

（１）調査に至る経過

平成６年11月、市内在住の個人から志木市教育委員会（以下、教育委員会）へ開発計画地内における埋蔵文化財の有無及び取り扱いについての照会があった。計画は志木市柏町３丁目2669－１の一部（面積233.30㎡）内において事務所建設を実施するというものである。

これに対し、教育委員会は当該開発予定地が周知の埋蔵文化財包蔵地である城山遺跡（コード11228－09－003）に該当するため、大旨下記のとおり回答した。

１．本地点は埋蔵文化財包蔵地に該当し、さらに周辺での過去の調査結果から判断して、遺構が密集して分布していることが予想される。

２．埋蔵文化財確認調査を実施して、その結果に基づき、当該開発予定地の埋蔵文化財の有無及び取り扱いについて回答する。

３．上記２の結果、埋蔵文化財が確認された場合、埋蔵文化財の保存措置を講ずること。また、やむを得ず土地の現状を変更する場合は、記録保存のための発掘調査を実施する必要があること。

平成６年12月５日、教育委員会は、開発主体者の個人より埋蔵文化財確認調査依頼書・発掘届を受理し、12月13日に確認調査を実施した。

確認調査は、今回、調査区南東部分においては、まだ駐車場の契約が完了していないということから、その部分を除外した範囲での実施となった。調査区内に３本のトレンチを設定し、バックホーで表土を剥ぎ、同時に遺構確認作業を行った。その結果、調査区北半部を中心に古墳時代と思われる住居跡を検出した。

教育委員会は、この結果を直ちに開発者に報告し、埋蔵文化財の保存措置について協議を行った。その結果、結論的には記録保存のための発掘調査を実施することに決定した。そして、教育委員会では、開発者に対し、発掘調査にあたる組織として、志木市遺跡調査会（以下、遺跡調査会）を斡旋した。

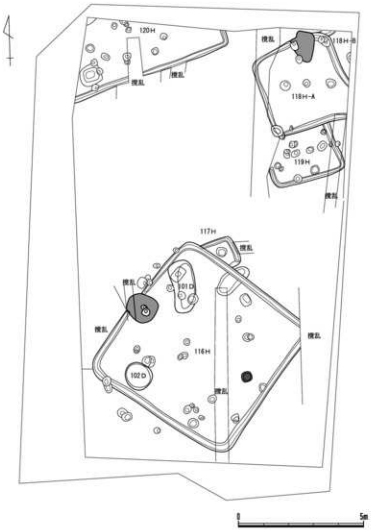
なお、確認調査から除外した箇所については、発掘調査の実施計画策定のため、平成７年１月９日に確認調査を実施し、これにより、調査区内全体で検出された遺構は、古墳時代後期の住居跡２軒などが分布していることが判明した。

そのため、遺跡調査会ではこれを受け、開発者と委託契約を締結し、埋蔵文化財発掘調査届を教育委員会に提出した。教育委員会は、これらの届出書をすみやかに埼玉県教育委員会経由で文化庁長官に提出した。

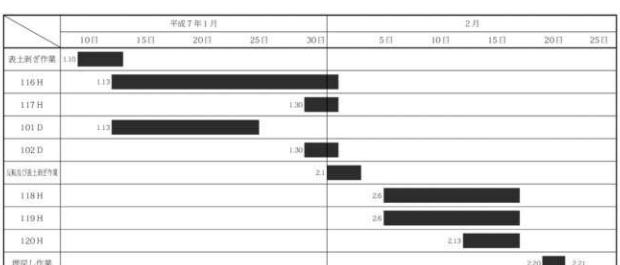
これにより、平成７年１月10日から遺跡調査会を主体として発掘調査を施した。なお、発掘調査通知書番号は教文第２－166号　平成７年１月27日付けである。

（２）発掘調査の経過

ここでは、発掘調査の大まかな経過を説明することにし、各遺構の精査経過については、第８表の発



第20図　遺構分布図（1／150）



第８表　城山遺跡第28地点の発掘調査工程表

掘調査工程表に示した。

1月10日　本日より重機（バックホー）による表土剥ぎ及び残土搬出作業を開始する。今回は調査区南半部を前半の調査とし、表土剥ぎ作業を先行して行った。調査区北半部は残土置場とし、一部残土は午後からダンプを使用し、調査区外へ搬出することにした。

11日　引き続き表土剥ぎ及び残土搬出作業を行う。

12日　重機による表土剥ぎ作業及び残土搬出作業に併行して、人員導入による発掘調査を開始する。まず、調査区の整備と遺構確認作業を行った結果、調査区内には古墳時代後期の住居跡２軒などが分布しているものと判明した。表土剥ぎ・残土搬出作業は午前中に終了する。

13～29日　古墳時代後期の住居跡（116 H）の精査を開始する。また、116 H内に中世以降の土坑（101 D）が検出されたため、精査を開始する。

30・31日　116 Hの北コーナーに一部張り出すように１軒古い住居跡が検出されたため、117 Hとし精査を行う。また、116 Hの貼床下から縄文時代の土坑１基（102 D）検出されたため、精査を開始する。102 Dからはやや大きめの諸磯ｃ式の土器が出土した。

2月１日　本日から調査区南半部の埋戻し作業を行い、北半部の表土剥ぎを開始する。遺構確認の結果、古墳時代後期の住居跡３軒（118～120 H）を確認した。

２・３日　引き続き調査区北半部の表土剥ぎ及び遺構確認作業を行う。

６日　118・119 Hの精査を開始する。新旧関係は118 Hより119 Hが古いことが判明した。

13日　118・119 Hの遺物取り上げと遺構の実測を行う。また、120Hの精査を開始する。

15日　118・119Hの平板測量・レベリング・エレベーション実測を終了し、118 Hのカマドの精査を開始する。また、120Hの貯蔵穴の上層から赤彩埦１点が出土しており、その特徴から５世紀後葉のものと考えられる。

17日　118のカマド実測終了、その後118・119Hの掘り方精査を開始し、終了する。120Hは平板測量・レベリング・エレベーション実測を終了し、すべての調査を完了した。

20日　午後から重機（バックホー）による埋戻し作業及び残土搬入作業を開始し、21日には完了した。

第２節　縄文時代の遺構・遺物

（１）概　要

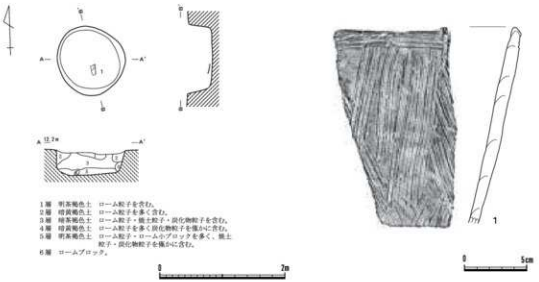
縄文時代の遺構は、土坑１基（102 D）であり、本土坑は、古墳時代後期の住居跡（116 H）の貼床下からの検出である。

（２）土　坑

102号土坑

遺　構（第21図）

［検出状況］ 116 H西コーナーの貼床下から検出された。



第21図　102号土坑・出土遺物（1／60・1／3）

［構　　造］**平面形**：楕円形。**規模**：長軸1.10ｍ／短軸1.03ｍ／深さ40㎝。**壁**：80°前後の角度で立ち上がる。坑底面は平坦。**長軸方位**：Ｎ－45°－Ｗ。

［覆　　土］６層に分層された。

［遺　　物］土器１点が出土した。

［時　　期］縄文時代前期（諸磯ｃ式期）。

遺　　物（第21図１）

諸磯ｃ式土器である。口縁部～胴部上半の破片で、胴部地文は縦位の条線文で口縁部には横位に条線文が巡らされる。口縁部外面に結節浮線文が剥離した痕跡がある。色調は黒色を基調とし、内面はにぶい赤褐色を呈すが器面の剥離が著しい。胎土には砂粒を顕著に含む。

第３節　古墳時代後期の遺構・遺物

（１）概　要

古墳時代の遺構は、後期の住居跡５軒（116～120Ｈ）が検出された。住居跡の分布は、調査区全域に広がっており、調査区北東隅では、118Ｈと119Ｈが重複し、調査区南端では、116Ｈと117Ｈが重複している。これら５軒の住居跡の時期に関しては、120Ｈについては５世紀後葉に比定できるが、他の４軒についてはおおよそ７世紀中葉に比定できるであろう。

なお、120Ｈについては、すでに第58地点（尾形・藤波・鈴木・中村　2008）で、住居西側部分が報告されており、今回その資料を合わせることにした。そのため、遺構・遺物ともに図面の追加及び変更を加え、改めてここに報告するものとする。

（２）住居跡

116号住居跡

遺　構（第 22・23図）

［検出状況］117 H・102 Dを切り、101 Dに切られる。

［構　造］**平面形**：隅丸方形。**規模**：長軸6.54m／短軸6.46m／確認面からの深さ27～34㎝。**壁**：ほぼ垂直に立ち上がる。**長軸方位**：N－55°－W。**壁溝**：上幅15～35㎝／下幅10～20㎝／深さ９～20㎝。**床面**：カマド付近から入り口付近まで、硬化した面が確認できた。南東壁中央から１m程離れたところが被熱赤化していた。貼床は２～10㎝の厚さで施されていた。**カマド**：北西壁のほぼ中央に位置する。主軸方位はN－52°－W。長さ100㎝／幅100㎝／壁への掘り込み10㎝。袖部はロームを馬蹄形状に掘り残し、その上に粘土を被覆して構築したものと思われる。**貯蔵穴**：北コーナー寄りに位置するが、上層は101 Dに壊されている。平面形は長方形。長軸60㎝／短軸40㎝／深さ62㎝。**柱穴**：主柱穴はＰ１～Ｐ４の４本と思われる。Ｐ２とＰ４は２本ずつ重複していた。深さは23～69㎝。Ｐ４からは長甕が出土している。**入口施設**：Ｐ５は入り口ピットの可能性がある。覆土はローム粒子を多く含む明茶褐色土を基調とする。

［覆　土］９層に分層できた。北コーナー付近から白色粘土が検出された。

［遺　物］土師器坏・鉢・甕・甑形土器、土製品（土玉）、鉄製品（釘）、炭化種子（モモ２点）・鉄滓８点が出土した。

［時　期］古墳時代後期（７世紀中葉）。

遺　物（第25・26図、第９表）

［土　器］（第25・26図１～25、第９表）

１～10は土師器坏形土器、11は土師器鉢形土器、12は須恵器長頸壺、13～24は土師器甕形土器、25は土師器甑形土器である。

［土 製 品］（第26図26）

26は土玉である。径1.8㎝・重さ4.7ｇ・穿孔径0.2㎝。指頭押捺による成形痕がやや残るが、ていねいなナデあるいは磨きにより仕上げられている。色調は暗橙色を基調とする。カマドすぐ左側の北西壁際の覆土中（床上４㎝）からの出土である。完形品。

［鉄 製 品］（第26図27・28）

27・28は釘である。

27は長さ3.9㎝・最大幅0.9㎝・重さ2.4ｇ。先端は欠損している。覆土中からの出土である。

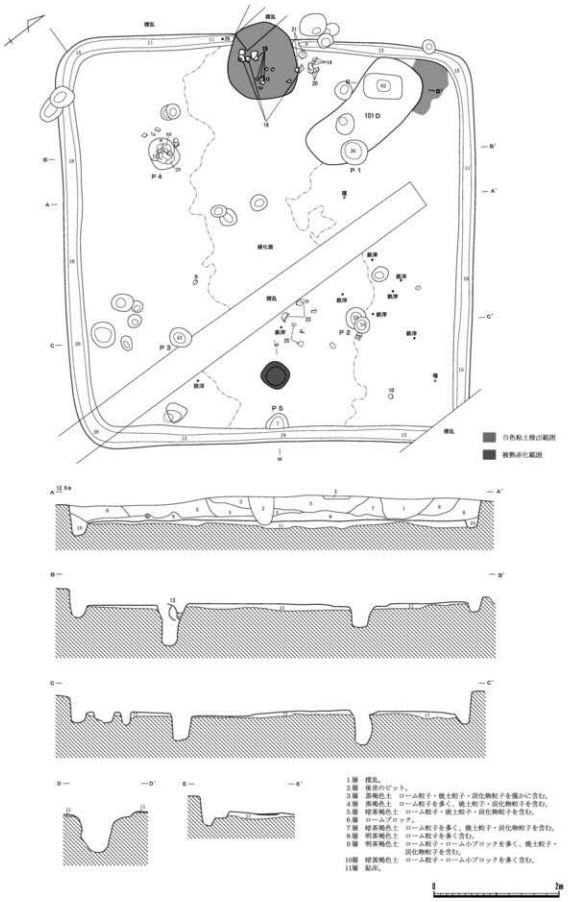
28は長さ5.0㎝・最大幅0.6㎝・重さ3.9ｇ。覆土中からの出土で、完形品である。

117号住居跡

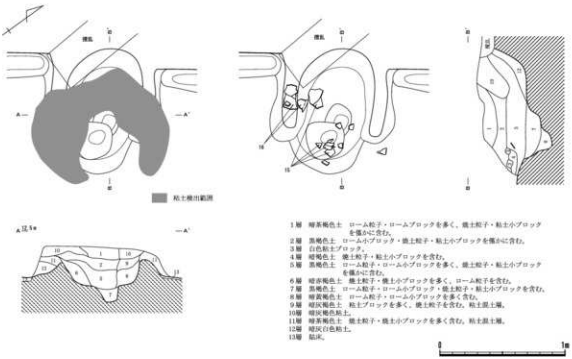
遺　構（第24図）

［検出状況］116 Hに切られており、北東コーナー付近のごく一部しか確認できなかった。

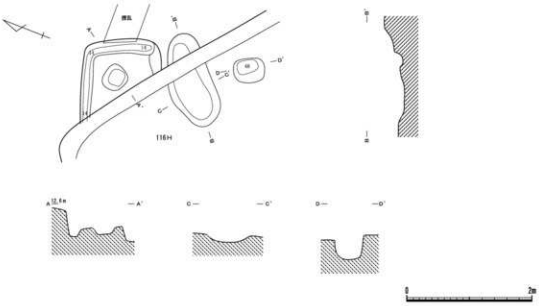
［構　造］**平面形**：方形か。**規模**：不明／確認面からの深さ32㎝。**壁**：ほぼ垂直に立ち上がる。**長軸方位**：不明。**壁溝**：確認できた範囲では、カマドを除き巡らされていた。上幅18～24㎝／下幅８～10㎝／深さ14㎝。**床面**：貼床は確認できなかった。**カマド**：東壁に位置する。西側は116 Hの床下からの検出であるため遺存状態は良くない。主軸方位はN－50°－E。長さ150㎝／幅70㎝／壁への掘



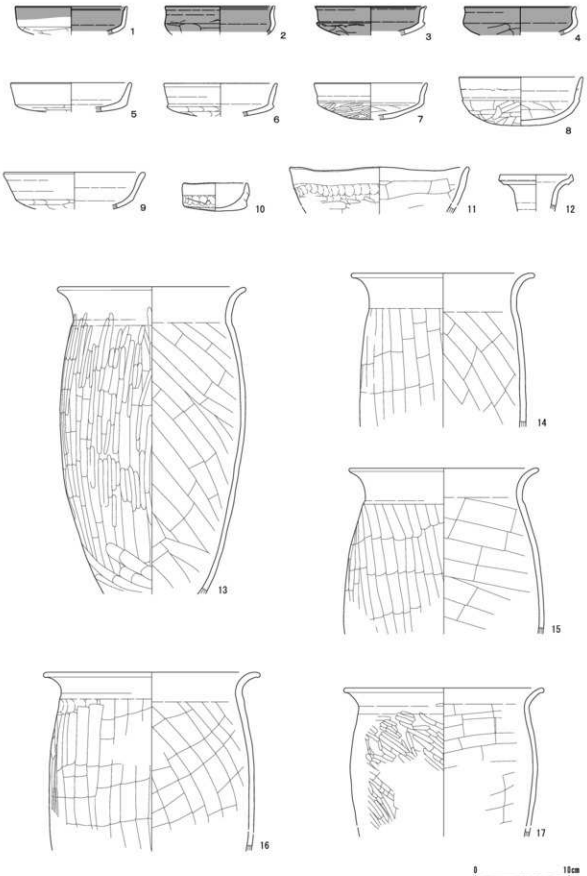
第22図　116号住居跡（1／60）



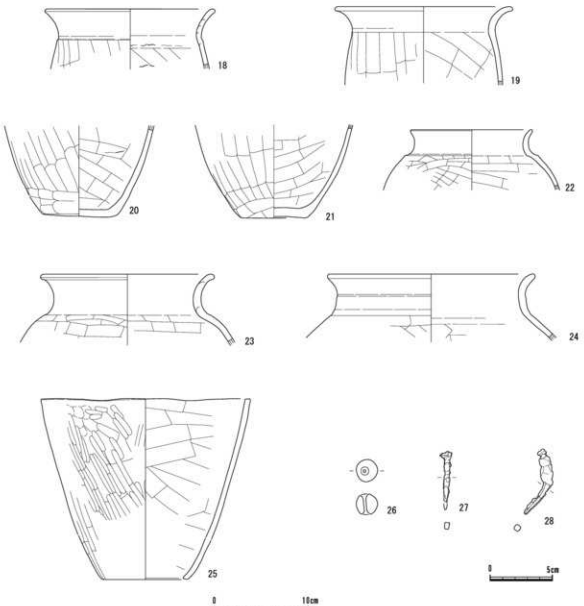
第23図　116号住居跡カマド（1／30）



第24図　117号住居跡（1／60）



第25図　116号住居跡出土遺物１（1／4）



第26図　116号住居跡出土遺物２（1／4・1／3）

り込みは不明。袖部はロームを掘り残して構築されたと思われる。覆土は焼土粒子・粘土粒子を多く含む明茶褐色土を基調とする。**貯蔵穴**：116Ｈの貼床下からの検出である。平面形は隅丸長方形。長軸50㎝／短軸40㎝／残りの良い床面からの深さ48㎝。覆土はローム粒子を多く含む明茶褐色土を基調とする。**柱穴**：確認できなかった。

［**遺　　物**］図示できるものはなかった。

［**時　　期**］古墳時代後期か。

118号住居跡

遺　構（第27・28図）

［検出状況］東側は調査区域外であり、西側は攪乱を受けている。119Ｈを切る。東側に確認できた壁溝と床面は同一の住居跡かどうか判断できなかったので、一応118Ｈ－Ｂとして扱った。

［構　造］〈118Ｈ－Ａ〉**平面形**：不整な方形。南東コーナー方向の壁溝が外側に歪んでいた。**規模**：長軸3.55m／短軸3.45m／残りの良い確認面からの深さ30～34㎝。**壁**：急斜に立ち上がる。**長軸方位**：Ｎ－15°－Ｗ。**壁溝**：確認できた範囲ではカマドを除き巡らされていた。上幅15～27㎝／下幅6～15㎝／深さ10～18㎝。**床面**：カマド前面から南壁近くまで、よく硬化した面が確認できた。**カマド**：北壁の中央より東に偏って位置する。主軸方位はＮ－12°－Ｗ。長さ130㎝／幅80㎝／壁への掘り込み28㎝。袖部はロームを馬蹄形状に掘り残し、その上に粘土を被覆して構築されたと思われる。左袖部の大半は後世のピットにより壊されていた。**貯蔵穴**：検出されなかった。**柱穴**：住居に伴うと考えられるものは、検出されなかった。**入口施設**：確認できなかった。〈118Ｈ－Ｂ〉**規模**：不明。**床面**：確認面からの深さ34㎝。一部硬化した床面が確認できた。貼床は確認できなかった。**壁溝**：上幅不明／下幅8㎝／深さ11㎝。確認できた長さは約30㎝。

［覆　土］14層に分層できた。

［遺　物］土師器坏・甕・甑形土器、銅製品（銅玉）、鉄製品（不明品）、炭化種子（モモ６点）が出土した。

［時　期］古墳時代後期（７世紀中葉）。

遺　物（第29図、第10表）

［土　器］（第29図１～９、第10表）

１～４は土師器坏形土器、５～７は土師器甕形土器、８・９は土師器甑形土器である。

［金属製品］（第29図10・11）

10は銅製品で、銅玉であろうか。径1.2㎝・厚さ0.6㎝・穿孔径0.2㎝。覆土中からの出土で完形品。

11は鉄製品で不明品である。長さ1.5㎝・径1.0㎝・穿孔径3.3㎝。両端部は欠損している。中心に穿孔（径0.2㎝）あり。覆土中からの出土である。

119号住居跡

遺　構（第30図）

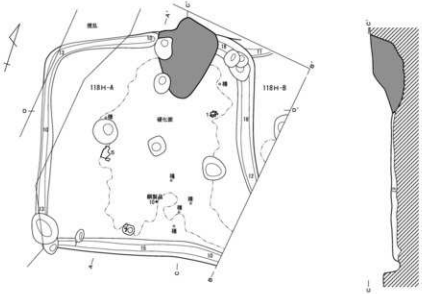
［検出状況］118Ｈに切られる。西壁も攪乱により、かなり破壊されていた。

［構　造］**平面形**：方形。**規模**：北側は118Ｈに壊されているため不明。南壁は2.7m／確認面からの深さ９～12㎝。**壁**：ほぼ垂直に立ち上がる。**長軸方位**：Ｎ－15°－Ｗ。**壁溝**：上幅15～27㎝／下幅５～12㎝／深さ９～15㎝。**床面**：図示した部分に硬化した面が確認できた。**カマド**：確認できなかった。**貯蔵穴**：確認できなかった。**柱穴**：主柱穴と思われるものは検出されなかったが、南壁の接する深さ28㎝の掘り込みから土師器甑形土器１点・炭化種子（モモ１点）が出土している。**入口施設**：確認できなかった。

［覆　土］４層に分層できた。

［遺　物］土師器甑形土器１点、鉄製品１点、炭化種子（モモ１点）が出土した。

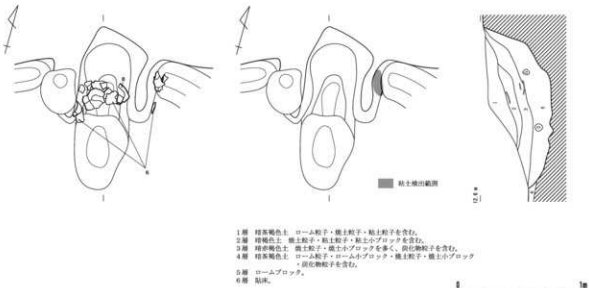
［時　期］古墳時代後期（７世紀中葉）。



1層　表土及び現代。
2層　黒褐色土　微土粒子・炭化物粒子を含む。
3層　黒褐色土　炭化物粒子を多く、微土粒子・微土小ブロック・粘土粒子を含む。
4層　暗茶褐色土　ローム粒子・炭化物粒子を含む。
5層　暗赤褐色土　微土粒子・微土小ブロックを多く、炭化物粒子・炭化材・粘土粒子・粘土小ブロックを含む。
6層　ロームブロック。
7層　暗茶褐色土　ローム粒子・微土粒子・炭化物粒子を含む。
8層　暗褐色土　ローム粒子を僅かに含む。
9層　暗褐色土　ローム粒子を含む。
10層　明茶褐色土　ローム粒子を多く、微土粒子・炭化物粒子を含む。
11層　黒褐色土　ローム粒子・炭化物粒子を含む。
12層　黒褐色土　ローム粒子を含む。
13層　明茶褐色土　ローム粒子を多く、微土小ブロック・微土粒子・炭化物粒子を含む。
14層　明茶褐色土　ローム粒子を多く含む。
15層　明茶褐色土　ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。
16層　暗黄褐色土　ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。
17層　白色粘土。
18層　暗黄褐色土　ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む。
19層　貼床。

0　2m

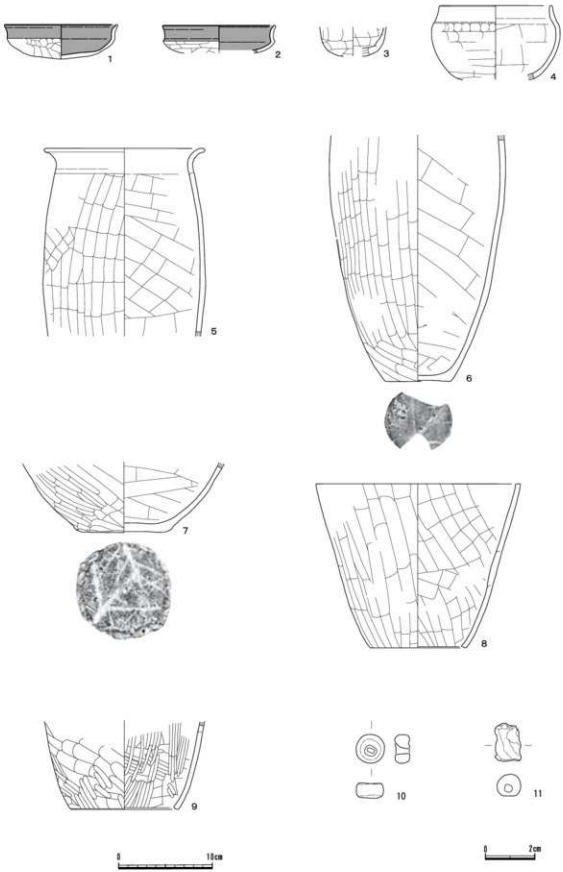
第27図　118号住居跡（1／60）



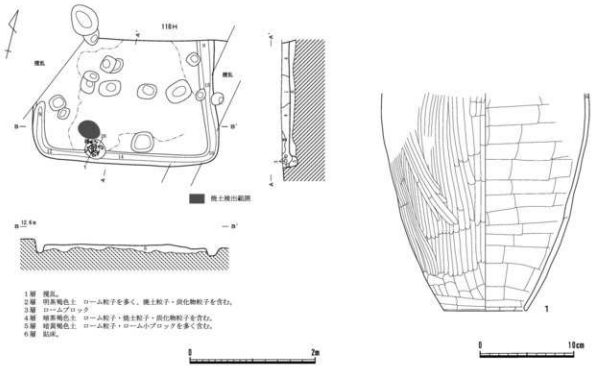
1層　暗茶褐色土　ローム粒子・微土粒子・粘土粒子を含む。
2層　暗褐色土　微土粒子・粘土粒子・粘土小ブロックを含む。
3層　暗赤褐色土　微土粒子・微土小ブロックを多く、炭化物粒子を含む。
4層　暗茶褐色土　ローム粒子・ローム小ブロック・微土粒子・微土小ブロック・炭化物粒子を含む。
5層　ロームブロック。
6層　貼床。

0　1m

第28図　118号住居跡カマド（1／30）



第29図　118号住居跡出土遺物（1／4・2／3）



第30図　119号住居跡・出土遺物（1／60・1／4）

遺　　物（第30図、図版15－2、第11表）

［土　　器］（第30図1、第11表）

1は土師器甑形土器である。

［鉄 製 品］（図版15－2－2）

2は鎖状の製品である。個々の鎖素子の単位は、鎖輪径1.9×1.0㎝・鎖線径0.3㎝の楕円形を呈する。重さは32ｇ。覆土中からの出土であるが、詳細不明である。

120号住居跡

遺　　構（第31図）

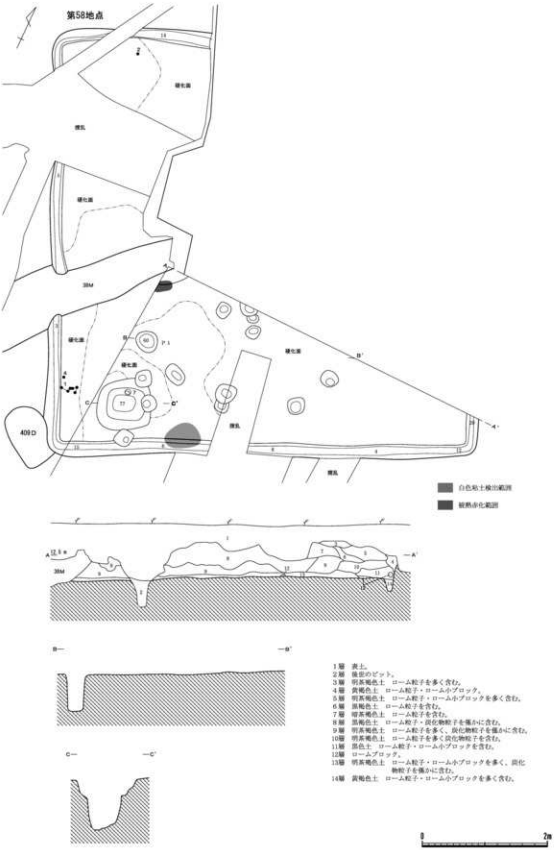
［検出状況］西側は58地点で検出されている。北側は調査区域外であり、38Mに切られる。

［構　　造］**平面形**：方形。**規模**：長軸6.95m／短軸6.81m／確認面からの深さ30㎝。**壁**：ほぼ垂直に立ち上がる。**長軸方位**：Ｎ－65°－Ｅ。**壁溝**：確認できた範囲では巡らされていた。上幅16～27㎝／下幅３～14㎝／深さ３～20㎝。**床面**：図示した部分が硬化していた。**カマド**：確認できなかった。**貯蔵穴**：南コーナーに位置する。平面形は長方形。長軸85㎝／短軸80㎝／深さ77㎝。覆土はローム粒子を多く、ローム小ブロック・炭化物粒子を含む明茶褐色土を基調とする。**柱穴**：Ｐ１が主柱穴と思われる。深さ60㎝。**入口施設**：確認出来なかった。

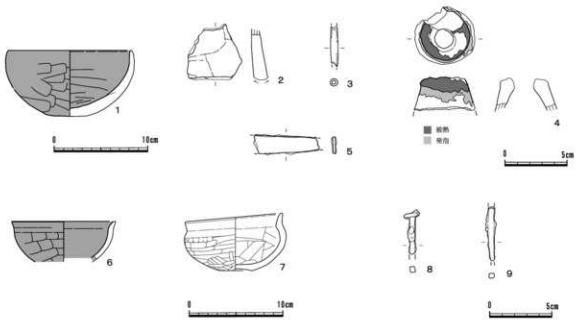
［覆　　土］12層に分層できた。貯蔵穴西側の南東壁付近から、白色粘土が16㎝の厚さで検出された。

［遺　　物］土師器坏形土器、須恵器片転用品、土製品（土錘・鞴羽口）、鉄製品（不明品・釘）が出土した。

［時　　期］古墳時代後期（５世紀後葉）。



第31図　120号住居跡（1／60）



第32図　120号住居跡出土遺物（1／4・1／3）

遺　物（第32図、第12表）

本住居跡出土の遺物として、１～５は第58地点の調査の際に出土しており、今回の調査では、２点の土師器坏形土器（６・７）と２点の鉄製品（８・９）が追加資料となる。

［土　　器］（第32図１・６・７、第12表）

第58地点からは、土師器坏形土器（１）が出土したが、今回は６・７の土師器坏形土器が追加資料となった。

［土 製 品］（第32図２・３・４）

第58地点からは、須恵器片転用品（２）・土錘（３）・鞴羽口（４）が出土したが、今回の追加資料はなかった。

２は長さ4.5㎝・最大幅4.3㎝・重さ24.9ｇ。色調は灰色。住居北壁近くの床面上からの出土である。

３は長さ3.1㎝・最大幅0.6㎝・重さ0.8ｇ。丸棒芯巻付け成形。外面はナデ。色調は橙色。住居北半覆土中からの出土である。

４は長さ2.7㎝・最大幅4.8㎝・重さ26.7ｇ。外面はナデ。色調は外面が黄褐色～オリーブ灰色、内面が橙色。被熱による溶解・発砲。住居南コーナー壁の灰白色粘土付近の覆土中（床上約21㎝）からの出土である。

［鉄 製 品］（第32図５・８・９）

第58地点からは、５の不明鉄製品が出土したが、今回は８・９の釘が追加資料となった。

５は長さ5.1㎝・最大幅1.5㎝・重さ0.2ｇ。板状製品で両端は欠損している。住居北半覆土中からの出土である。

８は長さ3.5㎝・最大幅1.1㎝・重さ2.1ｇ。先端部は欠損している。覆土中からの出土である。

９は長さ4.3㎝・最大幅0.8㎝・重さ3.5ｇ。頭部は欠損している。覆土中からの出土である。

（　）は現存値及び推定値

掲図番号	器種	器高	口径	底径	特徴	色調	胎土	調整	出土位置	遺存度
第25図1	土師器 坏	(3.0)	(11.9)	－	いわゆる比企型坏／口縁部と底部との境に稜をもつ／口縁部は外傾する／口唇部内面に沈線がまわる／内面及び口縁部外面は赤彩／入間系土師器	胎土は暗赤褐色を基調	砂粒・小石を含む	内面：横ナデ／外面：口縁部は横ナデ、底部はヘラ削り	覆土中	口縁部から底部10％
第25図2	土師器 坏	(3.0)	(11.6)	－	いわゆる比企型坏／口縁部と底部との境に稜をもつ／口縁部は直立気味／口唇部内面に沈線がまわる／内面及び口縁部外面は赤彩／入間系土師器	胎土は暗赤褐色を基調	茶褐色粒子・砂粒を含む	内面：横ナデ／外面：口縁部は横ナデ、底部はヘラ削り	覆土中	口縁部から底部10％以下
第25図3	土師器 坏	(3.1)	(11.8)	－	いわゆる比企型坏／口縁部と底部との境に段をもつ／口縁部は直立気味／口唇部内面に沈線がまわる／内面及び口縁部外面は赤彩／入間系土師器	胎土は暗赤褐色を基調	茶褐色粒子・砂粒・小石を含む	内面：横ナデ／外面：口縁部は横ナデ、底部はヘラ削り	覆土中	口縁部から底部20％
第25図4	土師器 坏	(3.0)	(11.8)	－	いわゆる比企型坏／口縁部と底部との境は稜をもつ／口縁部はやや内傾直立／口唇部内面に沈線なし／内面及び口縁部外面は赤彩／入間系土師器	胎土は暗赤褐色を基調	砂粒を多く、茶褐色粒子・小石を含む	内面：横ナデ／外面：口縁部は横ナデ、底部はヘラ削り	覆土中	口縁部から底部10％
第25図5	土師器 坏	(3.1)	(12.8)	－	有稜坏／口縁部と底部との境に稜をもつ／口縁部は外傾する／在地系土師器	淡黄褐色を基調	砂粒を多く、石英・角閃石を僅かに含む	内面：横ナデ（回転ナデか）／外面：口縁部は横ナデ、底部はヘラ削り後粗いヘラ磨き調整	住居中央からやや南寄りのほぼ床面上	口縁部～底部20％以下
第25図6	土師器 坏	(3.5)	(12.0)	－	有段坏／口縁部と底部との境に段をもつ／口縁部は外傾する／在地系土師器か	黄白色を基調	砂粒を多く、角閃石を僅かに含む	内面：横ナデ（回転ナデか）／外面：口縁部は横ナデ、底部はヘラ削り	覆土中	口縁部から底部10％
第25図7	土師器 坏	(3.9)	(12.0)	－	有段坏／口縁部と底部との境に弱い段をもつ／口縁部は外傾する／全面黒彩の可能性あり／在地系土師器	暗黄褐色を基調	砂粒を多く、角閃石・金雲母を僅かに含む	内面：口縁部は横ナデ、底部はヘラナデ／外面：口縁部は横ナデ、底部はヘラ削り後粗いヘラ磨き調整	覆土中	30％
第25図8	土師器 坏	5.2	13.1	－	有段坏／口縁部と底部との境に段をもつ／口縁部は外傾する／外面口縁部途中に輪積み痕あり／在地系土師器	淡黄褐色	砂粒をやや多く、金雲母を含む	内面：口縁部は横ナデ、底部はヘラナデ／外面：口縁部は横ナデ、底部はヘラ削り後粗いヘラ磨き調整	覆土中	70％
第25図9	土師器 坏	(3.9)	(15.0)	－	大型有稜坏／口縁部と底部との境に稜をもつ／口唇部はやや肥厚／口縁部は大きく外傾する／在地系土師器	淡黄褐色	砂粒を多く、金雲母・小石を僅かに含む	内面：横ナデ（回転ナデか）／外面：口縁部は横ナデ、底部はヘラ削り	覆土中	口縁部から底部30％
第25図10	土師器 坏	3.0	6.9	6.8	小型品／粗製品／器形は平底の底部から直立気味に立ち上がる／外面底部に黒斑あり／在地系土師器	暗黄褐色	砂粒を多く、角閃石を含む	内外面：横ナデ（回転ナデか）、外面底部付近には指頭による成形痕が残る	住居東コーナー覆土中（床上5cm）	完形品
第25図11	土師器 鉢	(5.0)	(19.0)	－	浅鉢か／口縁部に最大径をもつものと思われる／在地系土師器	淡黄褐色	砂粒を多く、金雲母を含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ／外面：口縁部は横ナデ、以下は基本的に無調整で指頭による成形痕が残るが部分的に粗いヘラ磨き調整	覆土中	口縁部～体部中位30％

（単位：cm）

第９表　116号住居跡出土土器一覧（1）

（ ）は現存値及び推定値

掲図番号	器種	器高	口径	底径	特　　徴	色　調	胎　土	調　　整	出土位置	遺存度
第25図12	須恵器 長頸瓶	(3.9)	(7.6)	－	口縁部外面は面取り／口縁部内面は受口状／産地不明	暗灰色	胎土は暗黒褐色	白色砂粒を僅かに含む	ロクロ成形	覆土中	口頸部破片
第25図13	土師器 甕	(32.5)	20.0	－	長甕／口縁部は外反する／口縁部と胴部との境は段差あり／在地系土師器	暗橙色	砂粒を多く、黄褐色粒子・金雲母・小石を僅かに含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ／外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り後粗いヘラ磨き調整	P4内	口縁部～胴部下半100%
第25図14	土師器 甕	(16.3)	(19.4)	－	長甕／口縁部は外反する／口縁部と胴部との境はスムーズ／在地系土師器	暗黄褐色	砂粒を多く、金雲母を含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ／外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り後粗いヘラナデ	カマド右横の覆土中（床上27cm）	口縁部～胴部中位40%
第25図15	土師器 甕	(17.5)	(20.0)	－	長甕／口縁部は外反する／口縁部と胴部との境はやや段差あり／在地系土師器	明橙色	砂粒を多く、小石を僅かに含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ／外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り	カマド内	口縁部～胴部中位40%
第25図16	土師器 甕	(18.9)	(23.0)	－	長甕／口縁部は外反する／口縁部と胴部との境はやや段差あり／在地系土師器	黄橙色	砂粒を多く、金雲母を僅かに含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ／外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り	カマド左袖上部及びカマド右横のほぼ床面上	口縁部～胴部中位40%
第25図17	土師器 甕	(15.8)	(21.2)	－	長甕／口縁部は外反する／口縁部と胴部との境はスムーズ／在地系土師器	淡黄褐色	砂粒を多く、金雲母・小石を僅かに含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ／外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り後粗いヘラ磨き調整	北東壁中央付近の覆土中	口縁部～胴部中位15%
第26図18	土師器 甕	(6.4)	(18.0)	－	長甕／口縁部は外反する／口縁部と胴部との境は段差あり／在地系土師器	淡橙色	砂粒をやや多く、金雲母を僅かに含む	内面：口縁部は横ナデ、以下ヘラナデ／外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り後ヘラナデ	住居西コーナー付近の覆土中	口縁部～胴部上半15%
第26図19	土師器 甕	(8.1)	(18.8)	－	長甕／口縁部は外反する／口縁部と胴部との境はやや段差あり／在地系土師器	淡黄褐色	砂粒を多く、角閃石・金雲母を含む	内面：口縁部は横ナデ、以下ヘラナデ／外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り後ヘラナデ（スリップか）	覆土中	口縁部～胴部上半20%
第26図20	土師器 甕	(9.7)	－	7.8	長甕／平底／在地系土師器	淡茶褐色	砂粒を多く、小石を含む	内面：ヘラナデ／外面：ヘラ削り	カマド右横のほぼ床面上	胴部下半～底部80%
第26図21	土師器 甕	(9.9)	－	7.0	長甕／平底／在地系土師器	暗橙色	砂粒を多く、小石を含む	内面：ヘラナデ／外面：ヘラ削り	カマド右横のほぼ床面上	胴部下半～底部60%
第26図22	土師器 甕	(6.4)	(12.8)	－	丸甕／中型タイプ／口縁部は外反する／口縁部と胴部との境は段差あり／在地系土師器	淡黄褐色	砂粒をやや多く、金雲母を僅かに含む	内面：口縁部は横ナデ、以下ヘラナデ／外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り後ヘラナデ（スリップか）	覆土中	口縁部～胴部上半30%
第26図23	土師器 甕	(7.5)	18.8	－	丸甕／大型タイプ／口縁部は外反する／口縁部と胴部との境はスムーズ／在地系土師器	暗黄褐色	砂粒をやや多く、金雲母を僅かに含む	内面：口縁部は横ナデ、以下ヘラナデ／外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り後粗いヘラナデ	住居中央から北東壁寄りの床面上	口縁部～胴部上半50%
第26図24	土師器 甕	(7.2)	(22.0)	－	丸甕／大型タイプ／口縁部は外反する／口縁部と胴部との境はスムーズ／在地系土師器	淡黄褐色	砂粒を多く、金雲母を僅かに含む	内面：口縁部は横ナデ、以下ヘラナデ／外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り後ヘラナデ（スリップか）	覆土中	口縁部～胴部上半10%
第26図26	土師器 甑	19.8	(22.3)	9.0	底部は筒抜け式／大型タイプ／口縁部は外反せず口唇部は平坦／最大径は口縁部にもつ／在地系土師器	暗黄褐色	砂粒を多く含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ／外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り後粗いヘラ磨き調整／口縁部横ナデなし	住居中央から北東壁寄りの床面上（及び北東壁中央付近の床面上）	40%

（単位：cm）

第９表　116号住居跡出土土器一覧（2）

（　）は現存値及び推定値

挿図番号	器種	器高	口径	底径	特徴	色調	胎土	調整	出土位置	遺存度
第29図1	土師器 坏	(3.7)	(12.0)	－	いわゆる比企型坏／口縁部と底部との境に弱い段をもつ／口縁部は外傾する／口唇部内面に沈線が巡わる／内面及び口縁部外面は赤彩／入間系土師器	胎土は暗赤褐色	茶褐色粒子・砂粒・小石をを含む	内面：横ナデ／外面：口縁部は横ナデ、底部はヘラ削り／外面口縁部直下に指頭による成形痕が残る（指紋あり）	カマド前面の東壁寄りの覆土中（床上15㎝）	60%
第29図2	土師器 坏	(3.7)	12.0	－	いわゆる比企型坏／口縁部と底部との境に段をもつ／口縁部は直立気味に外反する／口唇部内面に沈線が巡わる／内面及び口縁部外面は赤彩／入間系土師器	胎土は暗赤褐色	茶褐色粒子・砂粒・小石をを含む	内面：横ナデ／外面：口縁部は横ナデ、底部はヘラ削り	覆土中	口縁部～体部破片
第29図3	土師器 坏	(3.1)	20.0	－	小型品／丸底／在地系土師器	暗黄褐色	砂粒をやや多く、角閃石を僅かに含む	内面：ナデ、指頭によるものか／外面：ヘラ削りヘラナデ	覆土中	体部下半～底部20％
第29図4	土師器 坏	7.9	(12.0)	(8.2)	深身タイプ／口縁部は内傾する／最大径は体部上半にもつ／平底／在地系土師器	内面：黒色／外面：淡茶褐色	砂粒をやや多く、角閃石・金雲母を含む	内面：横ナデ／外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り後ヘラナデ／外面口縁部直下に指頭による成形痕が残る	覆土中	50%
第29図5	土師器 甕	(19.9)	(17.0)	－	長甕／口縁部は外反する／口縁部と胴部との境は段差あり／器面全体が黒く煤けている／在地系土師器	胎土は暗橙色を基調	砂粒をやや多く、角閃石を僅かに含む	内面：口縁部は横ナデ、以下ヘラナデ／外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り後ヘラナデ（スリップか）	住居中央から北壁寄りの覆土中（床上24㎝）	口縁部～胴部下半20％
第29図6	土師器 甕	(26.0)	－	7.0	長甕／平底／底部に木葉痕あり／外面は黒く煤けている／在地系土師器	暗橙色	砂粒を多く、角閃石・金雲母を僅かに含む	内面：ヘラナデ／外面：ヘラ削り後ていねいにヘラナデ（スリップか）	カマド内	胴部中位～底部60％
第29図7	土師器 甕	(7.5)	－	10.2	丸甕／中型タイプ／平底／底部に木葉痕あり／在地系土師器	明橙色	砂粒を多く、角閃石を含む	内面：ヘラナデ／外面：ヘラ削り後粗いヘラ磨き調整	南壁中央近くの床面上	胴部下半～底部60％
第29図8	土師器 甑	17.3	(21.6)	(10.0)	底部は筒抜け式／口縁部は外反せず口唇部は平坦／最大径は口縁部にもつ／在地系土師器	淡茶褐色	砂粒を多く含む	内面：ヘラナデ／外面：ヘラ削り後ヘラナデ／口縁部横ナデなし	カマド内	40%
第29図9	土師器 甑	(9.3)	－	11.2	底部は筒抜け式／在地系土師器	暗橙色	砂粒を多く、金雲母を含む	内面：ヘラナデ後縦方向の粗いヘラ磨き調整／外面：ヘラ削り後粗いヘラ磨き調整	カマド内	胴部下半～底部20％

（単位：cm）

第10表　118号住居跡出土土器一覧

（　）は現存値及び推定値

挿図番号	器種	器高	口径	底径	特徴	色調	胎土	調整	出土位置	遺存度
第30図1	土師器 甑	(23.0)	－	(9.0)	底部は筒抜け式／在地系土師器	内面：明橙色／外面：暗黄褐色	砂粒を多く、金雲母を僅かに含む	内面：ヘラナデ／外面：ヘラ削り後縦方向に粗いヘラ磨き調整	南壁の南西コーナー寄りの掘り込み内	胴部中位～底部50％

（単位：cm）

第11表　119号住居跡出土土器一覧

（　）は現存値及び推定値

挿図番号	器種	器高	口径	底径	特　徴	色調	胎土	調　整	出土位置	遺存度
第32図1	土師器 坏	(6.9)	(13.0)	(4.0)	内湾坏／底部から口縁部にかけて内湾する／平底／入間系土師器か	淡茶褐色	砂粒を多く、粒子・石英・角閃石を含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ／外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り後	住居跡コーナーの覆土中（床上5～30㎝）	25％以下
第32図6	土師器 坏	(4.3)	(11.0)	－	口縁部は短く外反する／内外面底部は被熱により灰褐色に変色か／入間系土師器か	暗赤褐色を基調	砂粒をやや多く、角閃石を僅かに含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はナデ／外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り	貯蔵穴内	口縁部～底部付近10％
第32図7	土師器 坏	6.1	10.4	3.5	口縁部は短めに外傾する／最大径は体部中位にもつ／糸切底	暗黄褐色	砂粒をやや多く、角閃石を僅かに含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ／外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り／外面口縁部直下に指頭による成形痕が僅かに残る	貯蔵穴内	完形品

（単位：cm）

第12表　120号住居跡出土土器一覧

第４節　近世の遺構・遺物

（１）概　要

近世の遺構は、古墳時代後期の住居跡（116Ｈ）の北コーナー付近に土坑１基（101Ｄ）が検出された。出土遺物は陶器４点・銅製品２点と少なかった。時期は近世（19世紀）のものと考えられる。

（２）土　坑

101号土坑

遺　構（第33図）

［検出状況］116Ｈを切る。

［構　造］**平面形**：楕円形に近い。**規模**：長軸2.05ｍ／短軸0.95ｍ／116Ｈの床面からの深さ11～14㎝。**壁**：緩やかに立ち上がる。**長軸方位**：ほぼＮ－Ｓ。

［遺　物］陶器４点、銅製品２点が出土した。

［時　期］近世（19世紀）。

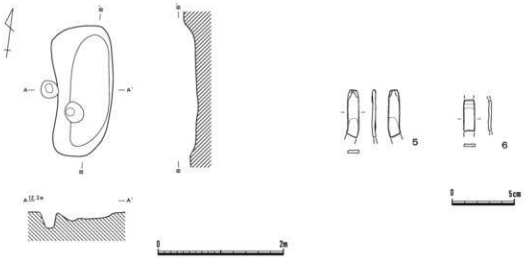
遺　物（第33図５・６、図版17－１、第13表）

［陶　器］（図版17－１－１～４、第13表）

１～４は陶器である。

［銅 製 品］（第33図５・６）

５・６は不明品である。これらは同一個体と考えられるが、接合部と思われる部分はねじ切れており、接合できなかった。１の先端部は山形にやや細くなっている。１の長さ3.7㎝・最大幅0.9㎝・厚さ0.2㎝・重さ5.1ｇ。２の長さ3.0㎝・最大幅0.9㎝・厚さ0.2㎝・重さ3.2ｇである。



第33図　101号土坑・出土遺物（1／60・1／3）

（　）は現存値

図版番号	種別	器種	法量			製作の特徴等	推定産地	出土位置	時期
			器高	口径	底径				
図版17－1－1	陶器	土瓶	－	－	－	注口／黄釉・緑釉圏線／注口基部小破片	京焼系	覆土中	19c
図版17－1－2	陶器	土瓶	(2.4)	－	－	口縁部はやや内湾する／蓋受部あり／無釉薄手／色調は淡茶褐色／胎土は精錬されている／小破片	不明	覆土中	19c
図版17－1－3	陶器	土瓶	－	－	－	把手か／色調は淡茶褐色／胎土は精錬されている／小破片	不明	覆土中	19c
図版17－1－4	陶器	香炉	(2.0)	－	－	色調は淡黄褐色／胎土は精錬されている／底部に貼付黄釉／底部破片	瀬戸	覆土中	19c前半

（単位：cm）

第13表　101号土坑出土の陶器一覧

第５節　遺構外出土遺物

ここでは、表土や攪乱から出土した遺物、そして遺構内であるが、明らかに他時期の混入品である遺物を前節までの各時代の出土遺物と区別し、遺構外出土遺物として扱う。

今回、遺構外出土遺物としては、縄文時代の石器、縄文時代の土器、古墳時代後期の土器、中世以降の遺物に分類する。

（１）縄文時代の石器（第34図１、第14表）

１は二次的剥離のある黒曜石の剥片である。

（２）縄文時代の土器（第34図２～９）

本地点では縄文遺物包含層は確認できず、縄文土器は後世の遺構からの出土が殆どであった。

２は内面に条痕文が認められる。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を基調とし、胎土には砂と少量の繊維が含まれる。120Hからの出土。

３の表面は劣化が顕著で文様は確認できない。内面は細い隆線が認められる。色調は表面が明黄褐色

(10YR6/6)、内面はにぶい橙色を基調とし、胎土には少量の繊維を含む。118Hからの出土。

４は羽状縄文を施文する土器片。色調はにぶい赤褐色（5YR5/4）を基調とし、胎土には砂粒と繊維を含む。118Hからの出土。

５は条線文を施文する土器片。色調は灰褐色（10YR4/1）からにぶい黄橙色を基調とし、胎土には砂粒を含む。120Hからの出土。

６は半裁竹管による集合沈線を施文する土器片。貼付文が剥離した痕跡が認められる。色調はにぶい黄橙色（10YR5/4）を呈し、胎土には砂粒を含む。116Hからの出土。７と同一個体の可能性がある。

７は半裁竹管による集合沈線を施文する土器片。貼付文が剥離した痕跡が認められる。色調はにぶい黄橙色（10YR5/4）を呈し、胎土には砂粒を含む。116Hからの出土。６と同一個体の可能性がある。

８は斜位の格子状沈線文を地文にし、棒状貼付文を施文する。色調は褐灰色（7.5YR4/1）、内面はにぶい橙色を基調とし、胎土には粗粒の砂を含む。120Hからの出土。

９は縄文LRを地文とし、破片端部には微隆起線文が確認できる。色調は表面がにぶい黄橙色(10YR7/4)、内面は橙色を呈し、胎土に砂粒、白色粒子を含む。遺構外からの出土。

以上、２・３は早期末葉の条痕文系、４は前期前葉の羽状縄文系、５～８は前期末葉の諸磯ｃ式、９は中期後葉の加曽利ＥⅢ式であろう。

（３）古墳時代後期の土器（第34図10～12）

10は土師器坏形土器である。現器高4.2㎝・推定口径10.5㎝。口縁部が内湾する塊タイプで内外面は赤彩が施される。内面にタール状の付着物あり。胎土の色調は暗橙色を基調とし、胎土には茶褐色粒子・砂粒を僅かに含む。調整は口縁部内外面が横ナデ、以下内面はヘラナデ、外面はヘラ削りである。遺存度は口縁部から底部にかけて10％程である。118Ｈからの出土。

11は土師器高坏形土器である。現器高3.4㎝。外面は赤彩が施される。胎土の色調は明赤褐色を基調とし、胎土には角閃石・砂粒・小石を含む。調整は坏部が内面ヘラ磨き調整、外面ナデ、脚台部は外面が粗いヘラ磨き調整、内面がヘラナデである。入間系土師器と考えられる。118Ｈからの出土。

12は土師器壷形土器である。現器高3.4㎝。頸部は直立気味に立ち上がり、胴部との境は段差をもつ。外面及び口縁部内面は赤彩が施される。胎土の色調は暗赤褐色を基調とし、胎土には茶褐色粒子・砂粒を含む。調整は内外面が横ナデである。入間系土師器と考えられる。118Ｈからの出土。

（４）中世以降の遺物（第34図24、図版17－２－13～24、第15表）

[陶磁器・土器]（図版17－２－13～23、第15表）

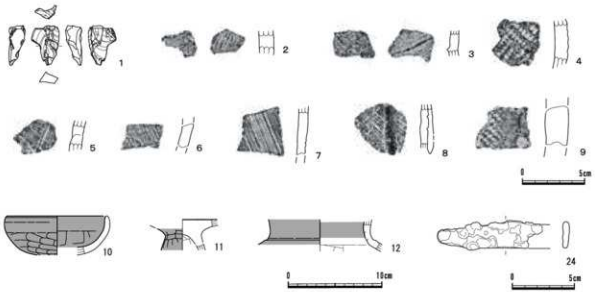
13～15は磁器、16～21は陶器、22は土器である。

[　瓦　]（図版17－２－23）

23は瓦の破片であろうか。長さ6.4㎝・幅4.8㎝・厚さ1.8㎝。色調は淡黄褐色を基調とし、内外面はナデにより仕上げられている。120Ｈの覆土中からの出土である。

[鉄 製 品]（第34図24）

不明鉄製品である。長さ7.3㎝・最大幅2.1㎝・厚さ0.4㎝・重さ13.6ｇ。左端部分は欠損。形状は板状で、先端分はやや細く丸味をもち、中央付近はやや幅広になっている。116Ｈ内の攪乱からの出土である。



第34図　遺構外出土遺物（2／3・1／3・1／4）

挿図番号	器　種	石　材	長さ	幅	厚さ	重量	特　　徴	出土位置
第34図1	二次的剥離のある剥片	黒曜石	31.49	22.02	13.00	5.10	左側縁に調整／素材剥片の打面は単剥離面	118H

（単位：mm・g）

第14表　遺構外出土の石器一覧

（　）は現存値

図版番号	種別	器種	法　量			製作の特徴等	推定産地	出土位置	時　期
			器高	口径	底径				
図版17－2－13	磁器	碗	－	－	－	外面に草花文／口縁部破片	肥前	遺構外	18c後半
図版17－2－14	磁器	碗	－	－	－	口サビ／口縁部～体部破片	瀬戸	遺構外	19c
図版17－2－15	磁器	皿	－	－	－	高台／見込み　蛇の目釉ぎ／底部破片	肥前	遺構外	17c後半
図版17－2－16	陶器	皿	－	－	－	内外面灰釉／胎土の色調は灰褐色／被熱／口縁部小破片	瀬戸	116H	17c後半
図版17－2－17	陶器	土瓶	－	－	－	把手／鉄釉文あり／胎土の色調は淡茶褐色／体部小破片	信楽系	116H	19c以降
図版17－2－18	陶器	蓋	(1.2)	－	－	つまみ：高さ0.5cm・径1.7／鉄釉／胎土の色調は灰白色／胎土は精練されている／蓋部小破片	不明	遺構外	19c～現代
図版17－2－19	陶器	碗	－	－	－	内面灰釉／貼付文／胎土の色調は灰白色／胎土は精練されている／体部小破片	瀬戸	120H	19c以降
図版17－2－20	陶器	皿	－	－	－	志野釉／見込みに鉄絵？／削り高台／胎土の色調は淡黄褐色／底部破片	瀬戸	遺構外	17c前半
図版17－2－21	陶器	甕	－	－	－	胎土の色調は内部が灰色、表層部が暗茶褐色のサンドイッチ構造／胎土に石英・白色砂粒を含む／胴部破片	常滑？	120H	16c
図版17－2－22	土器	手焙り	(4.8)	－	－	平底／外面に幅2mmの条線状の叩き目（縄席文？）が縦引状に施文され、その後磨き／胎土の色調は淡茶褐色	在地系	遺構外	不明

（単位：cm）

第15表　遺構外出土の陶磁器・土器一覧

第４章　中道遺跡第56地点の調査

第１節　調査の経緯

（１）調査に至る経過

平成13年２月、市内在住の個人から志木市教育委員会（以下、教育委員会）へ開発計画地内における埋蔵文化財の有無及び取り扱いについての照会があった。計画は志木市柏町５丁目2910－１、2911－１・２、2912－４、2918－１～３・11（面積4,918.56㎡）内において店舗建設を実施するというものである。

これに対し、教育委員会は当該開発予定地が周知の埋蔵文化財包蔵地である中道遺跡（コード11228－09－005）に該当するため、大旨下記のとおり回答した。

１．本地点は埋蔵文化財包蔵地に該当し、さらに周辺での過去の調査結果から判断して、遺構が密集して分布していることが予想される。

２．埋蔵文化財確認調査を実施して、その結果に基づき、当該開発予定地の埋蔵文化財の有無及び取り扱いについて回答する。

３．上記２の結果、埋蔵文化財が確認された場合、埋蔵文化財の保存措置を講ずること。また、やむを得ず土地の現状を変更する場合は、記録保存のための発掘調査を実施する必要があること。

平成13年２月７日、教育委員会は、開発者である個人より埋蔵文化財確認調査依頼書・発掘届を受理し、２月20・21日の２日間で確認調査を実施した。

確認調査は、調査区長軸のほぼ南北方向に合わせ、６本のトレンチを設定し、バックホーで表土を剥ぎ、同時に遺構確認作業を行った。その結果、調査区北西端において、南北方向に延びる溝跡１本を検出した（第36図）。

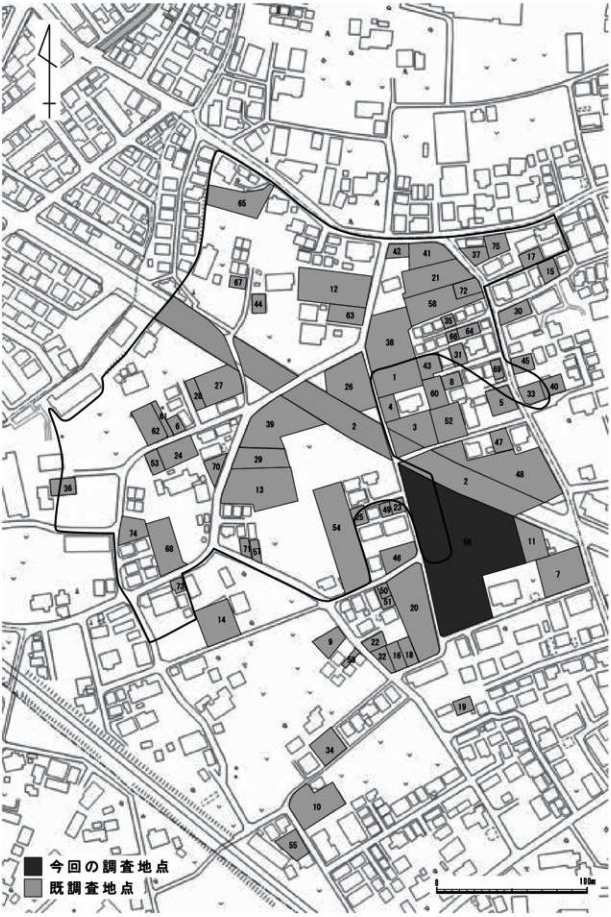
教育委員会は、この結果を直ちに開発者に報告し、埋蔵文化財の保存措置について協議を行った。その結果、確認調査の結果に基づき、遺構が検出された区域（面積595.00㎡）において発掘調査を実施することに決定した。そして、教育委員会では、開発者に対し、発掘調査にあたる組織として、志木市遺跡調査会（以下、遺跡調査会）を斡旋した。遺跡調査会ではこれを受け、開発者と委託契約を締結し、埋蔵文化財発掘調査届を教育委員会に提出した。教育委員会は、これらの届出書をすみやかに埼玉県教育委員会経由で文化庁長官に提出した。

これにより、平成13年４月９日から遺跡調査会を主体として発掘調査を施した。なお、発掘調査通知書番号は教文第２－131号　平成13年４月３日付けである。

（２）発掘調査の経過

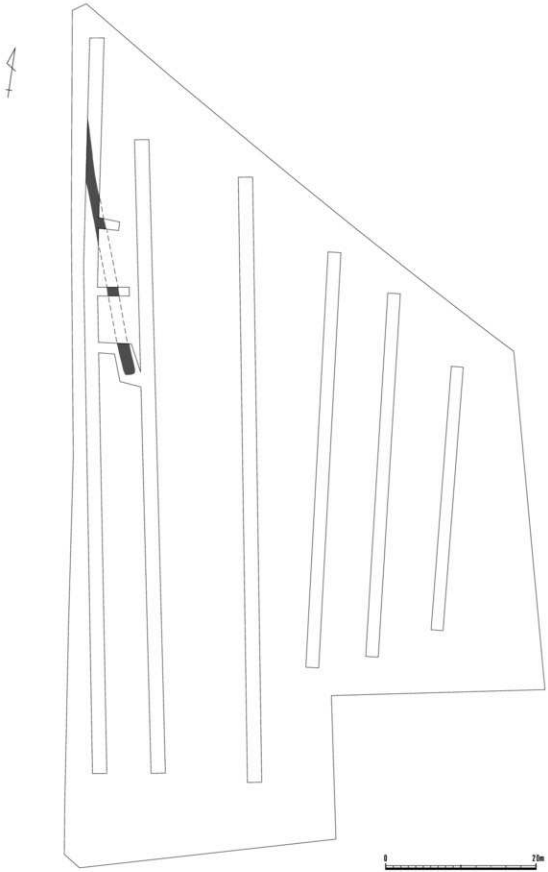
ここでは、発掘調査の大まかな経過を説明することとする。

４月９日　重機（バックホー）による表土剥ぎ作業を開始し、本日中に終了する。今回は残土搬出作業を行わず、残土置場については、発掘調査の対象とならなかった区域以外に当てることにした。

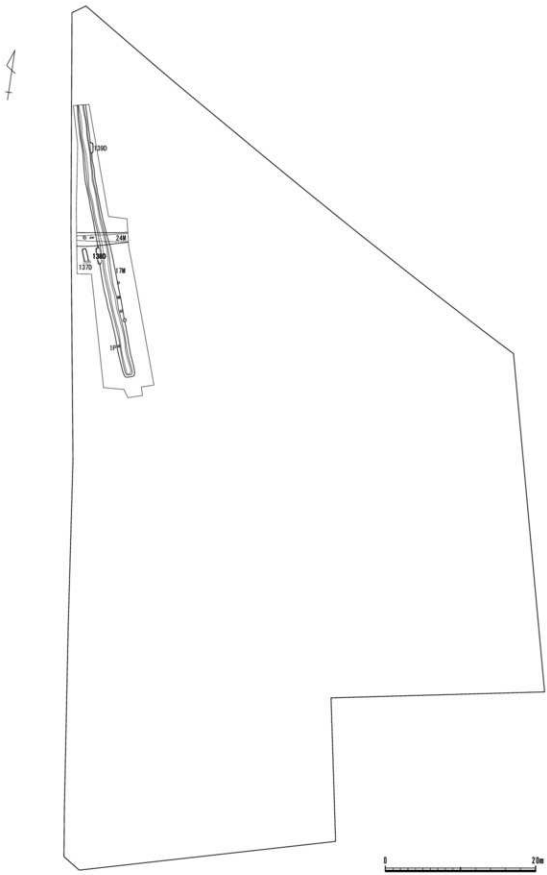


第35図　中道遺跡の調査地点（1／2.500）

平成26年12月26日現在



第36図　確認調査時の遺構分布図（1／500）



第37図　遺構分布図（1／500）

10日　人員導入による発掘調査を開始する。まず調査前の準備として、器材をトラックに積載し、現地に搬入する。その後、調査区の整備と細部の遺構確認作業を行った結果、調査区内には弥生時代後期～古墳時代前期の土坑１基（137 D）、古墳時代後期の溝跡１本（17M）と中世以降の土坑２基（138・139 D）・溝跡１本（24 M）が分布していることが判明した。さらには、17M・137Dの精査を開始し、137Dについては、その後完掘し、遺構の写真撮影を終了した。

11日　新たに24Mと138・139 Dの精査を開始する。時期はすべて中世以降と考えられる。その後、すべての遺構の精査を終了し、写真撮影・平板測量・実測を終了し、調査を完了する。

12日　埋戻し作業を完了する。

第２節　検出された遺構・遺物

（1）概　要

本地点からは、弥生時代後期～古墳時代前期の土坑１基（137 D）、古墳時代後期の溝跡１本（17 M）と中世以降の土坑２基（138・139 D）・溝跡１本（24 M）などが検出された。特に17 Mについては、本地点の北側の第２地点（佐々木・尾形　1988）の調査の際に検出された３Mと第26地点（佐々木・尾形　1996）の調査の際に検出された17Mの方向性と覆土の観察から同一遺構と判断し、今回は17Mとして取り扱った。時期は古墳時代後期（７世紀中葉）と考えられる。

（2）溝　跡

17号溝跡

遺　構（第38図）

［検出状況］第26地点の調査で検出された17Mと考えられる。138・139 D・24 Mに切られる。

［構　造］**規模**：調査区域内の長さは36.7 m。南側で立ち上がっている。上幅1.10～1.92 m／下幅40～62 ㎝／確認面からの深さは53～94 ㎝だが、溝底の標高では12.2～12.4 mであまり高低差はなかった。**断面形**：箱薬研形を呈する。**走向方位**：N－20°－W。

［覆　土］10層に分層できた。

［遺　物］土師器坏・甕形土器、須恵器坏形土器の小破片が僅かに出土した。

［時　期］古墳時代後期（７世紀中葉）。

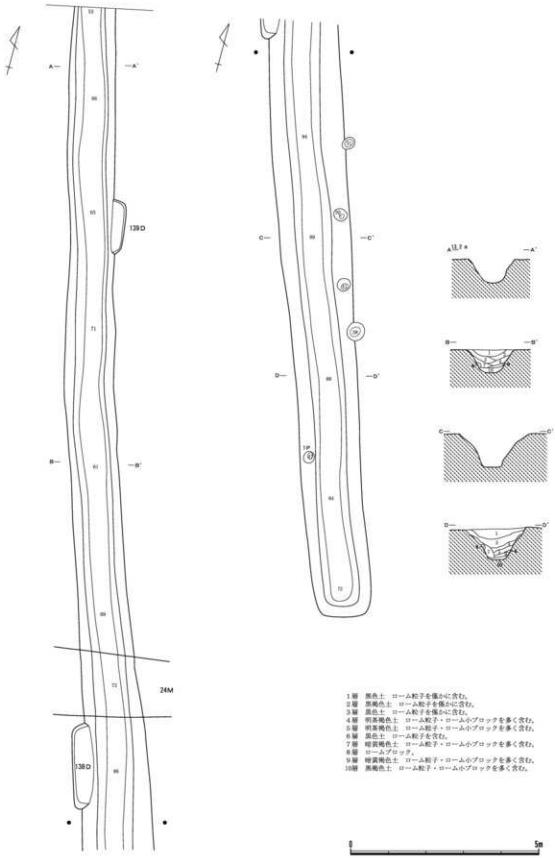
遺　物（第40図、図版20－１、第16表）

［土　器］（第40図１～３、図版20－１－１～８、第16表）

１～３は土師器甕形土器、４は須恵器坏形土器、５～７は土師器坏形土器、８は土師器甕形土器である。

24号溝跡

遺　構（第39図）



第38図　17号溝跡（1／100）

［検出状況］ 17Ｍを切る。

［構　　造］ 規模：確認できた長さは6.8ｍ。溝幅は、上幅1.32～1.80ｍ・下幅60～106㎝・確認面からの深さ14～15㎝。走向方位：Ｎ－81°－Ｅ。

［遺　　物］ 土器（焙烙）、石製品（砥石）が出土した。

［時　　期］ 中～近世（17世紀初）。

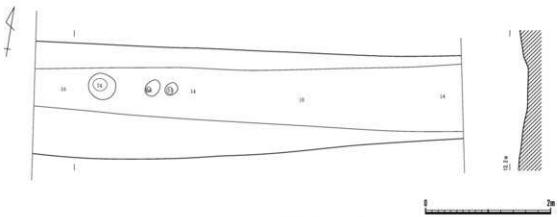
遺　　物（第40図、第17表）

［土　　器］（第40図1、第17表）

焙烙の底部破片である。

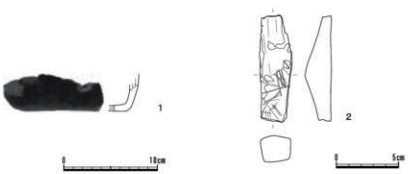
［石 製 品］（第40図２）

砥石である。長さ8.5㎝・最大幅2.5㎝・厚さ2.1㎝・重さ53ｇ。使用面は主に表面で、側面については僅かに使用の痕跡を留める程度である。側面と裏面には細かい条線状の成形痕が観察できる。石材は凝灰岩である。覆土中の出土で、完形品である。



第39図　24号溝跡（1／60）

17号溝跡出土遺物



24号溝跡出土遺物

第40図　溝跡出土遺物（1／4・1／3）

（３）土　坑

137号土坑

遺　　構（第41図）

［検出状況］南側は攪乱により確認できなかった。

［構　　造］**平面形**：長方形。**規模**：長軸不明／短軸0.57m／深さ14㎝。**壁**：緩やかに立ち上がる。**長軸方位**：N－18°－W。

［覆　　土］ローム粒子を含む黒褐色土を基調とする。

［遺　　物］土器の小破片１点が出土した

［時　　期］弥生時代後期～古墳時代前期の土器１点が出土したため、一応当該期として扱った。

遺　　物（図版20－３）

［土　　器］（図版20－３）

壺形土器の頸部小破片と思われる。内外面は赤彩が施され、胎土は淡茶褐色を呈し、橙色粒子を僅かに含む。調整は内面が縦方向のヘラ磨き調整、外面はヘラ削りか。覆土中からの出土である。

138号土坑

遺　　構（第41図）

［検出状況］17Ｍを切る。

［構　　造］**平面形**：長方形。**規模**：長軸2.3m／短軸不明／深さ21㎝。**壁**：北壁はほぼ垂直、南壁は傾斜角度50°。**長軸方位**：N－16°－W。

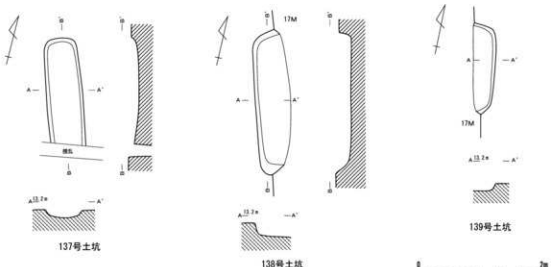
［遺　　物］出土しなかった。

［時　　期］中世以降か。

139号土坑

遺　　構（第41図）

［検出状況］17Ｍを切る。



第41図　土坑（1／60）

［構　　造］平面形：長方形。規模：長軸1.4m／短軸不明／深さ11㎝。長軸方位：N－10°－W。
［遺　　物］出土しなかった。
［時　　期］中世以降か。

（4）ピット

調査区域内には８本のピットが存在し、その大部分が中世以降に比定できるものと考えられる。今回はそのうち須恵器甕形土器の小破片１点を出土したピット（Ｐ１）についてのみ遺構名を付けて説明することにする。

１号ピット

遺　　構（第37図）
［検出状況］17Ｍを切る。
［構　　造］平面形：ほぼ円形。規模：径44㎝／深さ30㎝。
［遺　　物］土師器坏・甕形土器が出土した。
［時　　期］古墳時代後期～平安時代。
遺　　物（図版20－４）
［土　　器］（図版20－４－１）
須恵器甕形土器である。胎土は青灰色を呈し、白色砂粒を僅かに含む。外面には自然薬であろうか、緑色の釉薬が全体に被覆している。覆土中からの出土である。産地・詳細時期は不明。

（5）遺構外出土遺物

ここでは、表土や撹乱から出土した遺物、そして遺構内であるが、明らかに他時期の混入品である遺物を前節までの各時代の出土遺物と区別し、遺構外出土遺物として扱う。

今回、遺構外出土遺物としては、大まかに縄文時代の遺物と中世以降の遺物に分類する。

１．縄文時代の遺物（第42図１・２）

［土　　器］（第42図１・２）
１は深鉢の胴部破片である。文様は懸垂文にＬＲ単節縄文が施文される。色調は淡茶褐色を基調とし、胎土には石英・砂粒を含む。中期後葉の加曽利Ｅ式土器であろう。
２は無文の土器である。胎土には砂粒を含む。詳細時期は不明であるが、中期であろうか。

第42図　遺構外出土遺物（1／3）

２．中世以降の遺物（図版20－５－３～５、第17表）

［陶器・土器］（図版20－５－３・４、第17表）

３は陶器、４は土器である。

［金属製品］（第42図５）

５は煙管の雁首である。銅製品。長さ7.3㎝・高さ2.8㎝・火皿径1.6㎝・重さ9.7ｇ。遺構外からの出土である。完形品。

（　）は現存値及び推定値

挿図番号	器種	器高	口径	底径	特徴	色調	胎土	調整	出土位置	遺存度
第40図1	土師器 甕	(10.9)	(20.0)	－	長甕／口縁部は外反する／口縁部と胴部との境は段差をもつ／在地系土師器	胴部は淡橙色／内面は暗灰褐色	砂粒を多く含む	内面：口縁部は横ナデ、以下はヘラナデ／外面：口縁部は横ナデ、以下はヘラ削り／外面口縁部底下は未調整で指頭による成形痕が残る	覆土中	口縁部～胴部上半20％
第40図2	土師器 甕	(2.9)	－	5.8	長甕か／底部は丸底気味／在地系土師器	淡黄褐色	砂粒を多く、角閃石を僅かに含む	内面：ヘラナデ／外面：ヘラ削り	覆土中	底部のみ
第40図3	土師器 甕	(2.5)	－	7.4	甕／底部は平底	暗赤褐色	砂粒を多く、角閃石・小石を含む	内面：ヘラナデ／外面：ヘラナデか	覆土中	底部60％
図版20－1－4	須恵器 坏	－	－	－	体部小破片／蓋か身か不明／産地不明	灰色	僅かに白色砂粒を含む	ロクロ成形	覆土中	体部小破片
図版20－1－5	土師器 坏	(2.4)	－	－	いわゆる比企型坏／内面口唇部に沈線あり／内外面赤彩／人間系土師器	胎土は暗赤褐色	砂粒・小石を含む	内外面：横ナデ	覆土中	口縁部小破片
図版20－1－6	土師器 坏	－	－	－	いわゆる比企型坏／内面口唇部に沈線あり／内面赤彩／人間系土師器	胎土は暗橙色	茶褐色粒子・砂粒を含む	内面：ヘラナデ／外面：ヘラナデ	覆土中	底部小破片
図版20－1－7	土師器 坏	(2.1)	－	－	いわゆる比企型坏／内面口唇部に沈線あり／内外面赤彩／人間系土師器	胎土は暗赤褐色	砂粒・小石を含む	内外面：横ナデ	覆土中	口縁部小破片
図版20－1－8	土師器 甕	－	－	－	長甕／在地系土師器	暗黄褐色	砂粒をやや多く含む	内面：ヘラナデ／外面：ヘラ削り後ていねいにヘラナデ（スリップ？）	覆土中	胴部小破片

（単位：cm）

第16表　17号溝跡出土土器一覧

（　）は現存値

図版番号	遺構名	種別	器種	法量			製作の特徴等	推定産地	時期
				器高	口径	底径			
図版20－2－1	24Ｍ	土器	焙烙	(4.2)	－	－	底部は平底／胎土の色調は淡茶褐色を基調とし、内部は黒色、外面は黒く煤けている／頭部～底部破片	在地系	17c初
図版20－5－3	遺構外	陶器	天目茶碗	(3.2)	－	－	口縁部は短く外反する／外面に鉄釉／胎土の色調は淡黄褐色／胎土は精錬されている／口縁部～体部小片	瀬戸	16～17c
図版20－5－4	遺構外	土器	かわらけ	(1.4)	－	－	ロクロ成形／色調は淡橙色／胎土は精錬されている／体部下半～底部小破片	在地系	16～17c

（単位：cm）

第17表　24号溝跡・遺構外出土の陶器・土器一覧

第５章　調査のまとめ

本書は、城山遺跡第27・28地点と中道遺跡第56地点の合計３地点分の発掘調査成果を収録したものである。そこで、今回検出された遺構・遺物について、地点毎に調査所見をまとめることにする。

第１節　城山遺跡第27地点

本地点からは、古墳時代後期の住居跡２軒（121・122Ｈ）、中世以降の土坑13基（103～115Ｄ）・井戸跡１基（15Ｗ）・溝跡２本（27・28Ｍ）が検出された。ここでは、今回検出された古墳時代後期の121号住居跡出土土器と中世以降の遺構・遺物について考えることにする。

（１）古墳時代後期の121号住居跡出土土器について

土器の器種構成としては、土師器坏・甕形土器である（第７図）。

①土師器坏形土器（１～19）

赤色系土器（１）・黒色系土器（２～９）・無彩系土器（10～19）に大別することができる。

まず、赤色系土器の１については、推定口径11.0㎝のいわゆる比企型坏で、小型化傾向を示している。さらに、口縁部と底部との境に段をもち口縁部が外反する特徴から、水口由紀子氏の「Ｂ系列」（水口　1989a）、入間系土師器におけるＡ６類の須恵器蓋の有段タイプ（尾形　2008）に相当する。

黒色系土器については、東国土器研究会による古墳時代から奈良時代までを視野に入れ、東北地方から関東・北陸・東海地方までの広範囲を対象とした研究がある（東国土器研究会　1989）。その中で、埼玉南部・東京は「黒色土器がほとんど出現しない地域」であり、他地域からの搬入品という認識でまとめられている。しかし、本住居跡の黒色系土器は、「元荒川以北の武蔵と平野部の上毛野の土器」（水口　1989b）からの搬入品ではなく、在地系土師器（尾形　2006）と考えられる。

無彩系土器は、前述した黒色系土器と同様に在地系土師器と考えられる。しかし、これらは一見して、器形・法量のバラエティーが豊富であり、７世紀中葉以降の須恵器の小型化に連動した基準で捉えづらいものと言える。在地系土師器については、単純に小型化傾向にあるだけではなく、様々な用途に対応しえるように多種のタイプを製作することに重点が置かれたものと見るべきであろう。

②土師器甕形土器（20～22）

長甕（21）と丸甕（20・22）に大別することができる。

まず、長甕は21は口縁部から胴部中位までの個体であるが、口縁部が外反し、長胴化の完成を遂げ、前段階までの厚手のものよりやや薄手のタイプである。志木市における土師器編年（尾形　2001）では、13期（７世紀３／５段階）に比定される。

丸甕は21の小型品と22の大型品に分類される。丸甕は長甕よりも変化の速度が遅く、基本的に器形や調整によっても詳細時期を設定することは難しいものと思われる。

以上、本住居跡出土の土師器坏・甕形土器を見てきたが、時期については、志木市における土師器編年（尾形　2000・2001）の13期（７世紀３／５段階）に比定されることから、７世紀中葉に比定できる。

（２）中世以降の遺構・遺物について

中世以降の遺構は、土坑13基（103～115Ｄ）・井戸跡１基（15Ｗ）・溝跡２本（27・28Ｍ）が検出された。これらは、本地点が柏の城内に位置することから、柏の城関連遺構と考えられる（註１）。

１．土坑について

第42地点の分類（尾形・深井・青木　2005）に準拠すると以下のとおりである。ここでは、該当する土坑のみ列記する。なお110Dは分類から除外した。

Ｂ群　長方形の土坑　７基
　２類　幅狭の長方形土坑　７基（108・109D・111D～115）
Ｃ群　円形・楕円形の土坑　３基（105～107D）
Ｅ群　地下室・地下坑　１基
　１類　１竪坑１主体部タイプ（103D）

まず、Ｂ群２類については、調査区中央からやや北西付近にまとまって検出されている。これらは、「いもあな」・「いもぴつ」などの農業関連の遺構と考えられる。時期については、今回出土遺物が少なく、111Dから出土した陶器も小破片であり、時期の特定には至らなかった。

Ｃ群は第42地点でも用途不明として扱われたが、本調査でも同様である。105・107Dのきれいな円形のものは、墓坑とも考えられるが出土遺物もなく、時期・用途は不明である。

Ｅ群１類には103Dが該当する。遺物の時期を見ると、大きく16世紀後半と18世紀後半とに区分できるが、これは本土坑の主体部の天井部が陥落したことで、上部に掘り込まれた27Ｍの遺物が覆土ごと本土坑の内部に混在してしまったことが原因と考えられる。27Ｍについては、後述するが16世紀後半に比定されることから、本土坑の16世紀後半の遺物は27Ｍに関連する遺物と考えられる。つまり、18世紀後半の遺物が本土坑出土遺物としてよいであろう。

２．井戸跡・溝跡について

井戸跡は15Ｗが１基検出された。構造として、周囲を１段低く掘り下げ、そこに礫などを敷き固めて基盤としており、小ピットも伴う可能性がある。時期は出土した遺物から、15～16世紀と考えられる。

溝跡は27・28・53Ｍの３本が検出された。27・28Ｍはほぼ南北方向に走行する大きな溝跡で、両者は調査区中央から南半部で屈曲する特徴をもち、重複している。新旧関係については、セクションＥ－Ｅ′から、27Ｍより28Ｍが新しいことが判断できる。時期については、出土遺物から、27Ｍは16世紀後半に比定できるが、28Ｍは陶器小破片２点が出土したが時期を比定するには至らなかった。

53Ｍについては、調査当初は土坑と扱っていたが、その後、本地点の西側に隣接する第63地点（尾形・徳留・坂上・青池・鈴木　2011）調査の際の53Ｍと同一遺構と判断できたため、今回の報告では変更して使用した。時期については、第63地点では近世（18世紀中葉）に比定されている。

第２節　城山遺跡第28地点

本地点からは、縄文時代前期の土坑１基（102Ｄ）、古墳時代後期の住居跡５軒（116～120Ｈ）、近世の土坑１基（101Ｄ）が検出された。ここでは、縄文時代前期の遺構・遺物と古墳時代後期の住居跡から出土した土器について簡単にまとめることにする。

（１）縄文時代前期末葉の遺構・遺物について

縄文時代では、古墳時代後期の116Ｈの貼床精査中に検出された土坑（102Ｄ）から、前期末葉の諸磯ｃ式土器のやや大きな破片１点が出土した。

市内における縄文時代前期末葉の遺構・遺物については、本遺跡内から比較的にまとまって検出されており、住居跡が検出された例は、Ａ地点（志木市　1984）の諸磯ａ式期の第１号住居跡、第46地点（尾形・深井・青木　2008a）の前期末葉（諸磯ｂ式期～十三菩提式期）の２号住居跡（２Ｊ）、第59地点（尾形・徳留・深井・青木　2011）の３号住居跡（３Ｊ）がある。また、集石では、第22地点（尾形・深井・青木　2009）の前期後葉の２号集石（２Ｓ）、第58・60地点（尾形・藤波・鈴木・中村　2008）の前期後半（諸磯ｃ式期）の５号集石がある。なお、市内では、西原特定土地区画整理事業に伴う５Ⅱ地点（佐々木・内野・宮川　2009）の427号土坑（427Ｄ）から、口縁部から胴部下半にかけて復元可能である諸磯ｃ式土器１点が出土しており、大変貴重な資料となっている。

（２）古墳時代後期の住居跡出土の土器について

古墳時代後期の遺構としては、住居跡５軒（116～120Ｈ）が検出された。住居跡の分布は、調査区全域に広がっており、調査区北東隅では、118Ｈと119Ｈが重複し、調査区南端では、116Ｈと117Ｈが重複している。また、調査区北西隅から検出された120Ｈについては、すでに第58・60地点の発掘調査の際に住居西側部分が報告されていたため、本報告ではその資料を統合してまとめたものとした。ここでは、比較的遺物がまとまって出土した116・118・120Ｈの土器を中心に住居別にその特徴と時期について検討することとしたい。

116号住居跡（第25・26図）

器種構成としては、土師器坏・鉢・甕・甑形土器、須恵器長頸壺形土器である。土師器の製品レベルでの大きな分類としては、１～４のいわゆる比企型坏は入間系土師器、それ以外の５～11・13～25は在地系土師器である。ここでは、土師器について器種毎に説明することにする。

①土師器坏形土器（１～10）

赤色系土器（１～４）・無彩系土器（５～10）に大別することができる。

赤色系土器の１～４はいわゆる比企型坏である。すべて口径12㎝未満のもので、小型化傾向にあるもので、胎土の色調が暗赤褐色であることから、入間系土師器と考えられる。そのうちの３は口縁部と底部との境に段をもち口縁部が外反する特徴から、水口由紀子氏の「Ｂ系列」、入間系土師器におけるＡ６類の須恵器蓋の有段タイプに相当する。

無彩系土器の５～10はすべて在地系土師器である。５～９はすべて口縁部と底部との境に段を有す

る有段系タイプで、８を除きすべて推定口径であるが、６・７は口径12㎝、５・８は口径13㎝前後、９は15㎝と法量にばらつきがある。10は口径6.9㎝と超小型品であり、５～９の製品とは異なり、粗雑品と考えられる。在地系土師器の豊富なバラエティーの中で捉えられるものである。

②土師器鉢形土器（11）

浅鉢タイプで、口縁部がやや歪んでいる。外面口縁部直下には指頭による成形痕を残すものである。

③土師器甕形土器（13～24）

長甕（13～21）と丸甕（22～24）に大別することができる。さらに丸甕は小型品（22）と大型品（23・24）に分類される。特に長甕の特徴としては、すべて長胴化の完成を遂げている。最大径の位置に着目すると、10がやや口縁部に最大径をもつが、口縁部と胴部がほぼ同位置にあるものが主体と言える。さらに、胴部最大径の位置についても見てみると、13・17は胴部やや上半にあるが、その他はすべて胴部中位にあるものである。前者は後者より後出タイプであり、このタイプの主体となる段階は７世紀後葉～末葉と考えられることから、後者を主体とする長甕の特徴をもって、７世紀中葉に位置付けることが妥当であろう（尾形　2002）。

④土師器甑形土器（25）

１点のみの出土である。特徴は口縁部が外反する甕形タイプではなく、長甕の底部から胴部中位までの作りかけのような特異なタイプである。口唇部は平坦で、口縁部に横ナデが施されていない。このタイプは本地点の118Ｈ－８でも全く同じ製品が出土しているが、本遺跡内でも珍しいタイプと言える。

以上、本住居跡出土の土師器坏・鉢・甕・甑形土器を見てきたが、時期については、志木市における土師器編年の13期（７世紀３／５段階）に比定されることから、７世紀中葉に比定できる。

118号住居跡（第29図）

器種構成としては、土師器坏・甕・甑形土器である。土師器の製品レベルでの大きな分類としては、１・２のいわゆる比企型坏は入間系土師器、それ以外の３～９は在地系土師器である。

①土師器坏形土器（１～４）

１・２は赤色系土器で、いわゆる比企型坏である。いずれも口径12㎝で、小型化傾向にあり、水口由紀子氏の「Ｂ系列」、入間系土師器におけるＡ６類の「須恵器蓋の有段タイプ」に相当する。

３・４は無彩系土器で、在地系土師器である。３は口縁部が欠損しているため、器形が不明の小型品である。４は口縁部がやや内傾する深身タイプである。このタイプは７世紀後葉～末葉に比定される田子山遺跡第５地点11号住居跡（佐々木・尾形　1992）からも出土しており、８世紀前葉まで存続する在地系土師器の１つのタイプと考えられる。

②土師器甕形土器（５～７）

長甕（５・６）と丸甕（７）に大別することができる。丸甕の７は大型品である。

長甕の特徴としては、すべて長胴化の完成を遂げている。最大径の位置では、116Ｈ同様に口縁部と胴部がほぼ同位置にある。

③土師器甑形土器（８・９）

116Ｈ－25と同様に長甕の底部から胴部中位までの作りかけのような特異なタイプである。現時点では７世紀中葉に限定できると考えられる。

以上、本住居跡出土の土師器坏・甕・甑形土器を見てきたが、時期については、志木市における土師

器編年の13期（７世紀３／５段階）に比定されることから、７世紀中葉に比定できる。

120号住居跡（第32図１・６・７）

第32図は第58地点の際の資料と今回の調査分を統合した図面である。土器については、すべて土師器坏形土器で、１は第58地点ですでに報告されているもので、今回は６・７が追加資料である。

①土師器坏形土器（１・６・７）

１は内湾タイプで、やや平底を基本とする赤色系土器である。このタイプは、志木市における土師器編年の２期（５世紀２／５段階）で底部が平底あるいは碁笥底のものとして出現し、その後、坏形土器の底部が一部丸底に変化する時期の４期（５世紀４／５段階）では、平底・碁笥底と丸底が混在するようである。そして、５期（５世紀５／５段階）には、坏形土器は一斉に丸底化が進むものと理解できる。そのため、この土器は、まだ丸底化を遂げていないこととやや扁平で大型化が見られることから、４期（５世紀４／５段階）に該当することから、５世紀後葉に比定することができる。

６はいわゆる内斜口縁坏に類似する土器と考えられる。この土器は、口縁部が外反し、内斜は目立たないが、比企型坏の初現タイプにしても口縁部が開きすぎており、体部上半の膨らみを弱すぎるものである。まだ法量の大型化が見られないことから、前段階の特徴を継承しているものと考えられる。志木市における土師器編年の３期（５世紀３／５段階）に該当することから、５世紀中葉に比定することができる。

７は底部の碁笥底が顕著なもので、やはり６と同様に法量の大型化が見られないことから、前段階の特徴を継承するものであり、６の土器と同様の時期に比定できる。

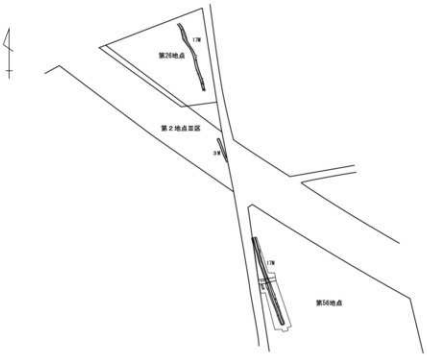
以上、本住居跡出土では、土師器坏形土器のみであったが、時期については、志木市における土師器編年の３～４期（５世紀３～４段階）に比定されるが、１の土器のようにやや新しい特徴が見られることから、５世紀後葉に比定するのが妥当と考えられる。

第３節　中道遺跡第56地点

本地点からは、弥生時代後期～古墳時代前期の土坑１基（137Ｄ）、古墳時代後期の溝跡１本（17Ｍ）と中世以降の土坑２基（138・139Ｄ）・溝跡１本（24Ｍ）が検出された。ここでは、これらの遺構・遺物について、簡単にまとめてみることにする。

まず、弥生時代後期～古墳時代前期の137Ｄからは、壺形土器の胴部小破片１点が出土している。ここでは、一応、この時期のものとして取り扱った。

溝跡の17Ｍについては、第26地点（佐々木・尾形　1996）で検出された溝跡と同一遺構と判断した。第43図は17Ｍと同一遺構と考えられる溝跡を過去の調査結果から抜粋して図示したものである。これによると、実は第２地点（佐々木・尾形　1988）での３Ｍがこの17Ｍと判断できる。さらに、17Ｍはその北側の第26地点で検出されていることから、直線的な溝跡が想定できる。長さは現時点でおよそ約127ｍ、ほぼ南北方向に走行していることになる。その先の北側においては、第12地点（佐々木・尾形　1992）があるが、該当する溝跡はなかった。17Ｍの時期については、比較的に安定して古墳時代後期の土器が出土したことから、この時期のものと判断したが、１の土師器甕形土器が長



第43図　17号溝跡検出状況（1／1,500）

甕であり、製品レベルでは在地系土師器であることから、志木市における土師器編年の13期（７世紀３／５段階）に比定される。おおよそ７世紀中葉に比定してもよいであろう（註2）。さて、この17Mの機能であるが、これについては今後の課題としたいが、現時点では、第２地点１・３～５号住居跡、第12地点６・７・10号住居跡というように古墳時代の住居跡が７世紀中葉に比定できることから、中道遺跡の古墳時代の特色を示していると言える（註３）。つまり、今回の17Mは中道遺跡で検出されている古墳時代の住居跡と同時期に比定されることから、集落域の境界を示す区画溝の役割などの集落に密接に関係する遺構として考えるのが妥当であろう。

中世以降の土坑２基（138・139Ｄ）・溝跡１本（24Ｍ）については、遺物が少なかったが、24Ｍから17世紀の焙烙を出土したことにより、時期を設定した。さらに、遺構外出土遺物に17世紀の陶器・かわらけの小破片２点があることからも第26地点の２基の土坑墓が17世紀後半に比定されることで、関連性があるものと考えられる（註４）。さらに、本地点の西側には、「千手堂」関連の遺構が広がっていることも含め、今後の資料の増加を待って検討が必要となるであろう。

［註］

註１　柏の城関連資料については、常に朝霞市教育委員会の野澤　均氏にご教示を賜っているが、今回の27・28Mについても出土遺物の時期や柏の城全体の位置関係などから判断して、柏の城関連の堀跡に相当する遺構ということである。また、野沢氏によれば、53Mは第58・60地点・第61地点（尾形・深井・青木　2008b）・第63地点でも検出されていることから、柏の城の土塁の基盤部分であり、さらに第46地点と第58・60地点から検出されている１号道路状遺構についてもこの溝跡の南側に並行して走行することから、土塁外側の犬走り跡ではないかとの考えである。本地点の南側の道路は、その犬走り跡が原型となって現在の道路として残っているのではないかという見解である。

註２　17Ｍの時期は、第26地点の報告でも図示はされていないが、古墳時代後期の土器小破片が比較的に安定して出土していることから、古墳時代後期の可能性があると記述されている。

註３　中道遺跡の古墳時代の集落跡の様相を考えた場合、第37地点19号住居跡は、市内最古のカマドを有する住居跡と考えられるが、この住居跡はどちらかと言うと城山遺跡に隣接することで、中道遺跡の特色ではないと言えるであろう。

註４　土坑墓からは、それぞれ１体ずつ人骨が出土し、銭貨が共伴している。銭貨別では、28Ｄから永楽通宝１点と古寛永通宝16点、新寛永通宝である文銭18点、不明寛永通宝１点の合計36点、29Ｄから古寛永通宝のみ６点が出土している。

[引用・参考文献]

尾形則敏　1999「いわゆる「比企型坏」の編年基準の要点」『あらかわ』第２号　あらかわ考古談話会

2000「志木市における古墳時代の土師器の編年（１）」『あらかわ』第３号　あらかわ考古談話会

2001「志木市における古墳時代の土師器の編年（２）」『あらかわ』第４号　あらかわ考古談話会

2002「第４章　まとめ」『志木市遺跡群12』志木市の文化財第32集　埼玉県志木市教育委員会

2006「七世紀における「在地系土師器」の出現と歴史的意義―武蔵野台地北西部の無彩系・黒色系土師器の一事例―」『埼玉の考古学Ⅱ』埼玉考古学会

2008「古墳時代後期の土師器研究の再認識―（仮称）「入間系土師器」の実態と生産地推定を例として―」『埼玉考古』第43号　埼玉考古学会

尾形則敏・徳留彰紀・坂上直嗣・青池紀子・鈴木伸哉　2011『城山遺跡第63地点　埋蔵文化財発掘調査報告書』志木市の文化財第46集　埼玉県志木市教育委員会

尾形則敏・徳留彰紀・深井恵子・青木　修　2011『志木市遺跡群19』志木市の文化財第45集　志木市教育委員会

尾形則敏・藤波啓容・鈴木徹・中村真理　2008『城山遺跡第58・60地点　埋蔵文化財発掘調査報告書』志木市遺跡調査会調査報告第17集　埼玉県志木市遺跡調査会

尾形則敏・深井恵子・青木　修　2005『城山遺跡第42地点　埋蔵文化財発掘調査報告書』志木市遺跡調査会調査報告第10集　埼玉県志木市遺跡調査会

2008a『志木市遺跡群16』志木市の文化財第38集　埼玉県志木市教育委員会

2008b『城山遺跡第61地点　埋蔵文化財発掘調査報告書』志木市遺跡調査会調査報告第16集　埼玉県志木市遺跡調査会

2009『埋蔵文化財調査報告書４』志木市の文化財第40集　埼玉県志木市教育委員会

佐々木保俊・尾形則敏　1992「第５章　田子山遺跡第５地点の調査」『中道遺跡第12地点　中道遺跡第13地点　田子山遺跡第４地点　田子山遺跡第５地点発掘調査報告書』志木市の文化財第18集　埼玉県志木市教育委員会

1988『中道遺跡発掘調査報告書』志木市遺跡調査会調査報告第５集　埼玉県志木市遺跡調査会

1996『城山遺跡第12地点　城山遺跡第13地点　西原大塚遺跡第14地点　中野遺跡第11地点　中道第16地点　市場裏遺跡第１地点　田子山遺跡第10地点　中道遺跡第21地点　田子山遺跡第13地点　西原大塚遺跡第21地点　市場裏遺跡第２地点　中道遺跡第26地点発掘調査報告書』志木市の文化財第24集　埼玉県志木市教育委員会

佐々木保俊・内野美津江・宮川幸佳　2009『西原大塚遺跡Ⅰ　西原特定土地区画整理事業に伴う発掘調査報告書』志木市遺跡調査会調査報告第13集　埼玉県志木市西原特定土地区画整理組合　埼玉県志木市遺跡調査会

志木市　1984『志木市史　原始・古代資料編』

東国土器研究会　1989『東国土器研究』第２号

水口由紀子　1989a「いわゆる"比企型坏"の再検討」『東京考古』第７号　東京考古学会

1989b「古墳時代後期における土師器の一分析―元荒川以南の武蔵を事例にして―」『東国土器研究』第２号　東国土器研究会

図　　版

1．表土剥ぎ風景

2．121号住居跡遺物出土状態

3．121号住居跡遺物出土状態

4．121号住居跡遺物出土状態

5．121号住居跡貯蔵穴遺物出土状態

6．121号住居跡カマド

7．121・122号住居跡

8．121号住居跡掘り方

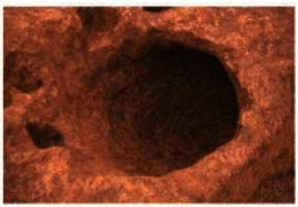
1．103号土坑

2．103号土坑縦坑

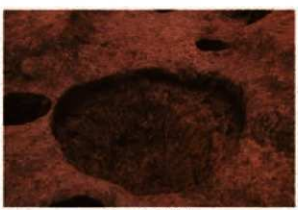
3．103号土坑主体部

4．103号土坑主体部

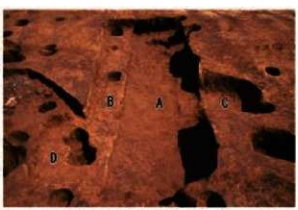
5．105号土坑



6．106号土坑



7．107号土坑

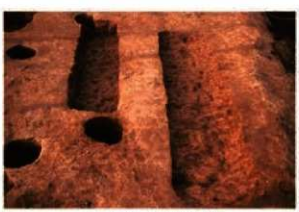


8．108号土坑A～D

1．109号土坑

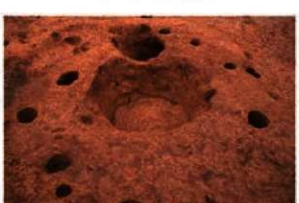
2．110号土坑

3．111・112号土坑



4．113・114号土坑

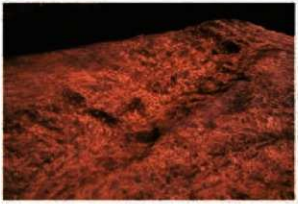
5．115号土坑



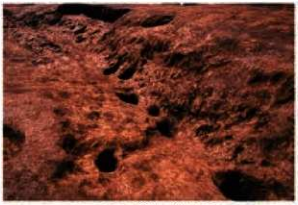
6．15号井戸跡

7．発掘調査風景

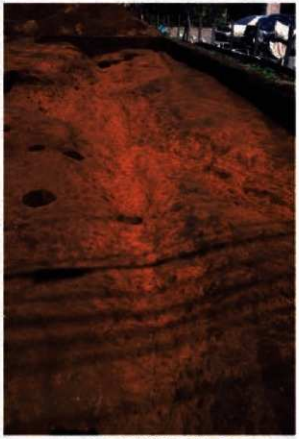
1．27・28号溝跡（南から）



2．27号溝跡南端（北から）

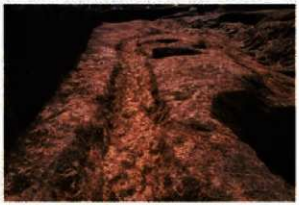


3．27号溝跡（北から）



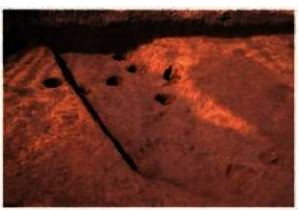
4．27・28号溝跡（南から）

1．28号溝跡（南から）



2．28号溝跡（北から）

3．27・28号溝跡（南から）

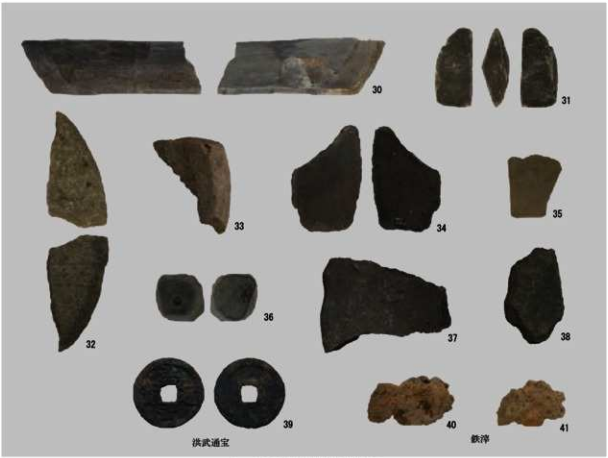


4．53号溝跡

5．53号溝跡

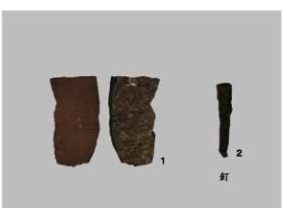
121号住居跡出土遺物

103号土坑出土遺物1



1．103号土坑出土遺物２

2．109号土坑出土遺物



3．111号土坑出土遺物

4．110号土坑出土遺物

1．15号井戸跡出土遺物

2．27号溝跡出土遺物

3．28号溝跡出土遺物

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
釘

遺構外出土遺物

1．102号土坑

2．116号住居跡発掘風景

3．116号住居跡遺物出土状態

4．116号住居跡遺物出土状態

5．116号住居跡遺物出土状態

6．116号住居跡遺物出土状態

7．116号住居跡貯蔵穴付近

8．116号住居跡貯蔵穴

1．116号住居跡カマド粘土出土状態

2．116号住居跡カマド掘り方

3．116号住居跡掘り方

4．117号住居跡

5．117号住居跡カマド

6．117号住居跡貯蔵穴

7．118・119号住居跡

8．118号住居跡遺物出土状態

1．118号住居跡カマド遺物出土状態

2．118号住居跡カマド掘り方

3．119号住居跡

4．119号住居跡遺物出土状態

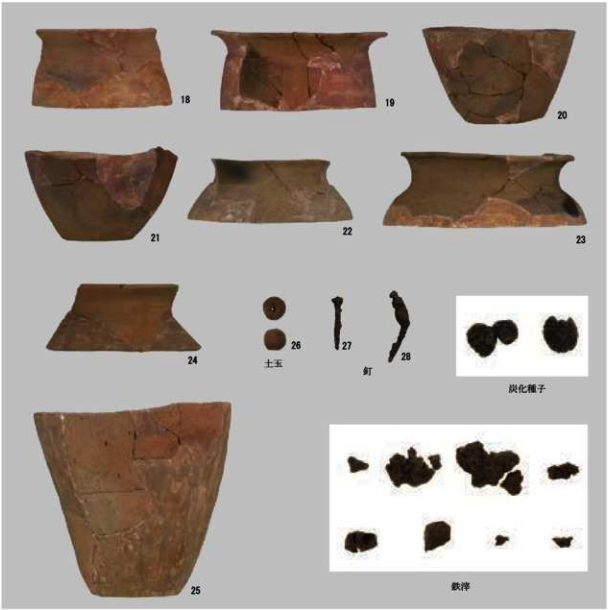
5．118・119号住居跡掘り方

6．120号住居跡遺物出土状態

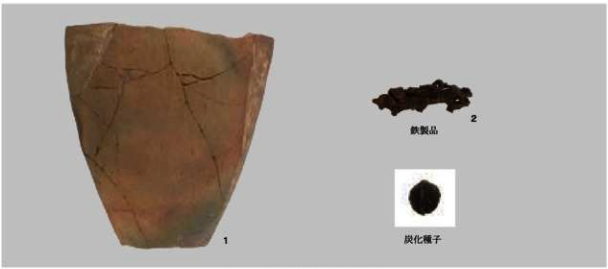
7．120号住居跡

1．102号土坑出土遺物

2．116号住居跡出土遺物1



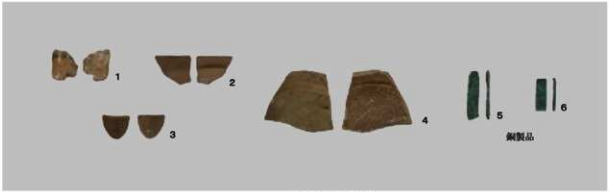
1．116号住居跡出土遺物２



2．119号住居跡出土遺物

1．118号住居跡出土遺物

2．120号住居跡出土遺物



1．101号土坑出土遺物

2．遺構外出土遺物

1．遺構確認風景

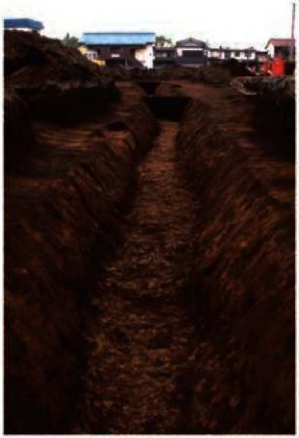
2．発掘調査風景

3．17号溝跡（南から）

4．17号溝跡（南から）

5．17号溝跡（南から）

6．17号溝跡（南から）



1．17号溝跡（北から）

2．17号溝跡（北から）

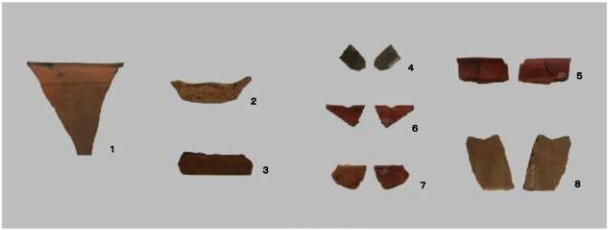
3．17号溝跡南端

4．17号溝跡・139号土坑（北から）

5．24号溝跡（東から）

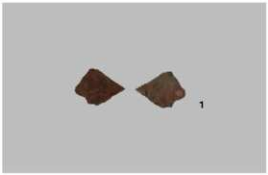
6．137号土坑

7．138号土坑

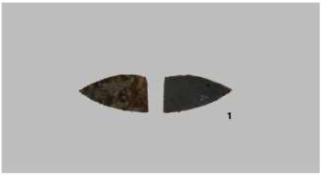


1．17号溝跡出土遺物

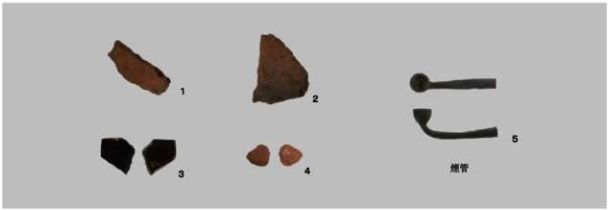
2．24号溝跡出土遺物



3．137号土坑出土遺物



4．1号ピット出土遺物



5．遺構外出土遺物

報 告 書 抄 録

ふ り が な	しきしまいぞうぶんかざいちょうさほうこくしょ 6
書　　名	志 木 市 埋 蔵 文 化 財 調 査 報 告 書 6
シ リ ー ズ 名	志木市の文化財
シリーズ番号	第63集
著 者 氏 名	尾形則敏　深井恵子　青木　修
編 集 機 関	埼玉県志木市教育委員会
所　在　地	〒353-0002 埼玉県志木市中宗岡1丁目1番1号　TEL 048（473）1111
発 行 年 月 日	平成27（2015）年3月31日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯（°′″）	東経（°′″）	調査期間	発掘調査面積(㎡)（開発全体面積）	調査原因
城山遺跡（しろやまいせき）（第27地点）	志木市柏町（しきしかしわちょう）3丁目2655－6の一部	11228	003	35°49′50″	139°34′14″	19950227～19950410	371.52（486.17）	共同住宅建設
城山遺跡（しろやまいせき）（第28地点）	志木市柏町（しきしかしわちょう）3丁目2669－1の一部	11228	003	35°49′49″	139°34′11″	19950110～19950221	233.30	事務所建設
中道遺跡（なかみちいせき）（第56地点）	志木市柏町（しきしかしわちょう）5丁目2910－1、2911－1・2	11228	09-005	35°49′43″	139°34′11″	20010409～20010412	595.00（4,918.56）	店舗建設

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
城山遺跡（第27地点）	集落跡・城館跡	古墳時代後期 中世以降	住居跡　2軒 土坑　10基 地下室　1基 井戸跡　1基 溝跡　3本	土師器・須恵器・土製品・炭化種子 陶磁器・土器・瓦・石製品・鉄製品・板碑・銅銭・鉄滓 陶器・土器 陶磁器・土器	
城山遺跡（第28地点）	集落跡・城館跡	縄文時代前期 古墳時代後期 中世以降	土坑　1基 住居跡　5軒 土坑　1基	土器 土師器・須恵器・ミニチュア土器・鉄製品 陶器・土器・鉄製品	
中道遺跡（第56地点）	集落跡	弥生後期～古墳前期 古墳時代後期 中世以降	土坑　1基 溝跡　1本 土坑　2基 溝跡　1本	土器 土師器・須恵器 なし 土器・石製品	

要　約

城山遺跡は、旧石器時代～近世にかけての複合遺跡である。今回報告する地点は,第27・28地点で、第27地点からは、古墳時代後期の住居跡と中世以降の土坑・地下室・井戸跡・溝跡が、第28地点からは、縄文時代前期の土坑・古墳時代後期の住居跡・近世の土坑が検出された。特に中世以降の遺構については、いずれも柏の城内に位置することから、その関連性が考えられる。

中道遺跡は、旧石器時代～近世にかけての複合遺跡である。今回報告する第56地点からは。弥生時代後期～古墳時代前期の土坑、古墳時代後期の溝跡、中世以降の土坑・溝跡が検出された。特に古墳時代後期の17号溝跡については、南北方向に延びていることで、本地点の北側で過去に調査を実施した第2・26地点でも検出されていることから、集落跡との関係性を考える上で重要である。

志木市の文化財　第63集

埼玉県志木市

埋蔵文化財発掘調査報告書 6

発　行　埼玉県志木市教育委員会
埼玉県志木市中宗岡１丁目１番１号
発行日　平成 27（2015）年 3 月 31 日